
死者の徘徊する街

てつまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死者の徘徊する街

【コード】

N4536M

【作者名】

てつまる

【あらすじ】

ある日を境に死者が人々を襲い始めた。生き残れるのか？

死者の徘徊する街（前書き）

皆さんのゾンビものに触発されて一念発起、書いてみました。優しく見守って下さい。

死者の徘徊する街

俺（田中一郎。平凡な名前だと笑わないでくれよな。40年も付き合ひ、なやんでんだから）は渾身の力で何度目かの特殊警棒を「ソレ」に叩きつけていた。

特殊警棒って？

刑事ドラマでたまに見かける、昔の制服の警察官が腰にぶら下げた木の棒だよ。えっ？知らない？仕方ない、適当に調べてくれ。

「ソレ？」についても説明が必要だよな。

少し待つててくれるかな、安全なところまで移動しないとヤバいから。

俺は完全に動かなくなった「ソレ」を確認し、隣で倒れている警官（多分特殊部隊SATだと思うが）を抱き起こして移動した。

街角や路地から…湧いてくるように「ソレ」は出てきている。

丁度10メートル程離れた所に交番（今は派出所っ言うだったか？）があるんで、何とか「ソレ」が近寄ってくる間に交番にたどり着いた。

此処なら、ガラスにも鉄線が入った強化ガラスだから、破られないだろう。

取り敢えず、意識のない警官を椅子に座らせて、たしか交番ってえのは休憩室か何かの奥に在るはずだよな。

俺は、特殊警棒を握り直しゆっくりと奥の部屋を調べようとした。

扉は内開きだ、ほんの少しだけ開けて様子を見てみようとした時

「ガン！ガン！」と交番の入り口のガラスドアにたどり着いた「ソレ」がガラスドアをのっそりと叩き始めた。

まさか、叩き破られることはないよな？。

しかしタイミングが悪いなあ。心臓が止まるかと思っちまったぜ、これだけの音を立ててるんだから、一気に行くしかない、部屋に踏み込んだが……

助かった！誰も居なかった。1階には休憩室とキッチン。2階には2部屋分の仮眠室があったが無人だった。額に大量に流れでる汗を拭いながら、特殊警棒を握りしめた自分の右手の指を左手で一本一本剥がしていった。

外から数体の「ソレ」が緩慢な動きでガラスドアを叩いている音がやかましかったが、ガラスドアにはヒビが入る様子もなく大丈夫そうだった。

こうやって、明るい交番の中に行けるといやでも目立つので、警察官を担いで休憩室に入り込み、受付部屋（みたいなもんだよね？）の電気を消して静かに息を潜めることにした。
なんだってんだ？今日は？

死者の徘徊する街（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております

第1話（前書き）

まだまだ始まったばかりです。

第1話

休憩室に入った俺は、警察官を起こすため キッチンへ向かい雑然と置かれた湯のみに水を入れて（本当は俺の靴下を鼻先で嗅がせりや一発なんだが……それだとその後に協力体制がとれなくなる可能性があるから……てか怒られるだろう）勢いよく顔目掛けてぶっかけた。

「ウツ！」意識が戻りかけ、俺の顔を見ているようだが視線が定まっていないみたいだ、俺は密かに腰に差してある特殊警棒に手を添えながら（もし襲われたらなんだしな）

「大丈夫か？喋れるか？」と声をかけてみた。

「ここは？」と警官はオドオドと答えた。

「安心しな。交番の休憩室だからよ。表も鍵しめてあっから暫くは大丈夫だぜ……………おい?!どうしたんだ!!」

安心と知った途端にまた気を失いやがった。

首筋を触ったところ、間違いなく脈は打ってるから大丈夫みたいだ。

さて…どうしたもんだか？

ここから逃げ出す算段を考えながら、俺は警官の装備品をチェックしていった。

えっ？それを使えば楽に突破できたって？

まあ、1人なら走って逃げれるんだろうが…生きてる奴を放っておくのは嫌だからな。

しかし、いつから日本の警官はこんなに凄い装備を配給されてんだ？

シヨルダーホルスターにはH&a m p・KのUPSが差し込まれている。

たしか、自衛隊も警察もSIGがメインじゃなかったのか？

第1話（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしています。
銃器など間違いがあればご指摘下さい。

第2話

装備に疑問を感じてもしょうがないか。

USPを手に取り、マガジンを抜くとまだ数発、弾が残っていた。

45ACPじゃなく、標準的な9ミリバラベラムだった。

まあ、日本人なら45口径より9ミリ口径の方が無難だよな。反動もそんなにきつくないし。

45口径なんてえのは、アメリカ人の信仰口径だし、威力も余り変わらんらしいな。

しかし、ひつこいが変わった装備だ。

左脇の予備マガジン入れが、横差し（普通は下向けに差してるか、横差しでも2マガジンなんだが……）の2列3連。すなわち6本もあるじゃないか！

たしか、USPのマガジンは15発だから、シオルダーホルスターだけで90発近い弾丸がある訳だな。

更にごたいそうに腰のベルトにもマガジンがどっさりとくっついてるぞ！？。

2列2連が3つか。

まるで、大量の弾丸が必要な事態を予測していたような感じに違和

感を抱きながら、警官をひっくり返しながら、更に装備を確認した。

以下がこの警官の持ってた装備だ。

USP 2丁

(もう1丁がレッグホルスターで足首についてたぞ)

予備マガジン 18本

(弾丸270発位)

S & W M686リボルバー

(弾丸36発)

ごっついアーミーナイフ

警察無線

(ぶつけたのか壊れているみたいだ)

特殊警棒

(さっきの説明が悪かったが、昔の警官が持ってた木の警棒の現在版の鉄製の伸縮する棒)

後は手錠・タバコ・財布などだ。

卓袱台の上に並べられた銃器一式。を眺めながら……俺の記憶は昨日の朝に戻っていった。

第3話（前書き）

うーん 第1話や2話の続きとして掲載したいんですが…やり方が
わからず。一話一話の更新になってしまいます。参ったです。

第3話

“メールが届いています。メールが届いています。”

朝の心地よい時間を携帯電話から流れるメール着信音に起こされた

……

「はい、はい…配達ご苦労さま。ですつと……」

携帯に手を伸ばしながら、このメル着は……たしか娘からだと思いだした。

『お父さんへ。今月は何時帰ってくるんですか？

先月からお隣の智子ちゃんちのお父さんも単身赴任したけど、2週間おきに帰ってきてるよ！

いい加減にお母さんに謝って許して貰って、帰ってきなよ。

私も中学生じゃなく高校生になってるんだよ。もう5ヶ月も帰ってきてないじゃん。世間は今日から4連休だよ！（、、）』

娘も一人前になったもんだ。

心配してくれているが、夫婦の仲はそんなに簡単に修復出来るものじゃない。

子はかすがいと言うが……本格的にこじれると、なかなか、上手くいかないもんなんだよ。

と、ブツブツ言いながら、娘への言い訳のメールの中身を頭に浮かべていたところに、手元の携帯電話が着信音を奏で始めた。

ディスプレイに表示される相手を見てかなり戸惑いながら、通話ボ

タンを押した。そして…これが始まりとは、その時点では考えも及ばなかった。

第3話（後書き）

ご意見・ご感想・お待ちしています。

第4話（前書き）

だんだんと話しは進んでいきます

第4話

「はい、田中です。」

一瞬、何故だかわからない悪寒？が走ったような気がしたが…ゆっくりと考える間もなく、相手が喋りだした。

「伊集院です。危機管理対策本部の田中君だね。お休みの早朝に、誠に申し訳ない。」

電話の相手は、伊集院 剛。俺が働く会社のとっぺん（社長）だ。

働く会社とは、国内唯一の総合電気通信会社【ジャパンテレコム】である。

7年程前まで、国内には3社の電気通信会社が存在したが…相次ぐ値下げ合戦で互いに体力を失っていき、最後は国策に近いレベルで3社が合併させられた。と言ってもその時には、俺は外部の間だったので…新聞で書かれている程度の知識しかなかったが…何の因果か転職してお世話になっているのだ。

この伊集院と言う社長は、当時は通信会社を管轄する役所の大臣だった人物である。

元総理の曾孫で、アメリカの凄い大学を主席で卒業し、鳴り物入りで政界に入り一直線で大臣になり、末は総理と噂された人物だ。

確か、かなりの海外通で外務大臣の経験もあったと思うが。

野に下った理由も、自分の指導力不足で通信業界に混乱を招いた責任を取る。だつたはずだ。

対策本部会議で一度だけ会ったことがあるが、凄い迫力を持ちながら非常に明晰で、ありとあらゆる人を引き込む魅力のある人物だつた。

「名前が格好いいと見た目や実力も違うなあ。タ・ナ・カ・イ・チ・ロ・ウ・君!。」と(鈴木)本部長にイヤミを言われ、「たしか、社長とス・ズ・キ・本部長は同い年ですね。」
とバカな反撃をして地方で1年過ごした、しょうもない過去を思いだしちまった。

「で、申し訳ないが至急で九州に飛んで欲しいんだか……」

ヤバイ! ついついバカな回想してたら、社長の指示を聞き漏らしてしまった。

「もう一度、お願いしていいですか? 少し聞き取りにくいので……」
と恐る恐る切り出したところ……

「田中君の住まいのエリアは電波干渉地域かい? 私には田中君の声は鮮明に聞こえているんだがね。」

まあ、そんなことはどうでもいい。
非常にデリケートで特殊な事態……

イヤ! 問題なんだが、九州エリアで今後如何なる事態が発生しても、最低数週間は我社の通信設備や通信網が稼働出来るかを一両日中にチェックして欲しいんだ。

特に、携帯電話の無線基地のメンテナンスフリー期間が規定通りか? 規定内でも作業員が駆けつけなければならぬ可能性や作業員

を派遣出来ない際の稼働率とそれに伴い、規制しなければならない
トラフィック量や……………」

おいおい！俺は技術屋じゃないぜ！！と心の中で叫びながら……

「えーっ。社長……………」

そこところは、施設管理や運用管理部門の管轄でして、我々、危機管理対策本部は想定される災害などを検討して施策案を想定するだけでして、「いざ」が発生した場合は現場を把握している組織体
が取り仕切るのがベストな選択と……………」

社長の話しを遮って、意見具申かあ。減棒か降格は覚悟しなきゃ
なんねえだろうなあ。

また、女房と距離が出来る問題勃発だなあ。

毎度・毎度、これをやらかすから、人生上手く行かないんだよなあ。
長いもんにゃ、巻かれてりゃいいのによ。

なんて、自嘲気味に1人携帯電話を持ちながら頭をボリボリかいて
た。

「田中君！！」

来たかあ。減棒か？降格か？

まさか「首」はないよな？

「私は、君のその誰にでも自分の意見を言える。ところを買って、
今回の仕事をお願いしたいんだ！」

はあ？「お願いしたい」？社長が俺にお願い？新しいリストラ策
か？

「現地には既に、秘書室長の源五郎丸 君を向かわせている。彼か
ら詳しい情報を聞いてくれればいい。それと、この事案については、

社長直轄扱いで君には役員と同じ決済権限を与えるように、関係部署には通達する。部下は使えないが、源五郎丸君と配下のメンバーは使ってくれてかまわない。もう直ぐ、迎えが着くと思うので、暫くは向こうにいる用意をして向かってくれ。」

言うだけ言って、社長は電話を切ってしまった。

夢か幻か？なんなんだ？

しかも、秘書室長？社長に次ぐキレ者の噂だから……イヤミ一杯の生け簀かねえ野郎なんだがな。

（決して、特殊な名前に嫉妬してるんじゃないぜ）

考えてたら、外に車が止まったみたいだ。

有無を言わずに、巻き込まれて行く瞬間だった。

第4話（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております。

第5話（前書き）

なかなか本題に入らずにすみません。

第5話

俺は、空路福岡に入った。

慌ただしい移動の最中にとつと娘にメールを返すのも忘れていた。

自宅に迎えに来てから、必要最低限な事しか喋らない無表情な案内人がハンドルを握る高級セダンは、とあるビルの地下スロープを下っていた。

古めかしい外見とは裏腹に、スロープから見えるビルの壁はピカピカで、所々に監視カメラらしき物が設置されていた。

てつきり、ジャパンテレコム福岡支社に行くものだと思っていた俺は、無表情な運転手に何度目かの質問を投げかけた。

「そろそろ、どこに来たのか教えて貰えないかな？どうも我社の福岡支社ではないみたいだし……」
「やたら物々しい感じのビルだね」

「……………」

運転手には何の反応も無かった。

そろそろ、堪忍袋の緒が切れそうになっていた俺は、減速したカーブの途中でいきなりドアを開けて飛び降りるふりをしてみせた。

「ちよつ……ちよつと！待って下さい！」

運転手は、慌てた声の割には冷静に急ブレーキをかけながら、開けたドアを壁にぶつけて閉めると言う大技を披露してくれた。

おいおい！この車。かなり高いんじゃないのか？

て言うより、たかが災害対策に来た俺に対して大袈裟すぎやしないかい？

「もう少し我慢して下さい。数分で『イーター対策本部』にお連れしますので……」

と笑うのをこらえながら運転手は言った。

笑えるんなら最初から笑い顔みせろよ！と心の中で毒づきながら……

「『イーター？』って、何なんだ？」と運転手の肩に両手を置き耳元まで乗り出しながら訪ねた。

名前からすると、外国で発生した台風なんかが一番怪しいが……今の北半球は完全な冬だぞ！

台風なんざあ、何処にも発生していないはずだった。

「詳しい事をお話する権限は持っていません。本部で権限のある者から説明があるはずなんで……勘弁して下さいよ。それより危ないから手を離して下さい。」

「あんなアクロバティックな運転して、何で笑いをこらえて俺に返事をしたんだい？」

俺は両手に更に力を込めて優しく腹の底から低い声で訊ねた。

「見られてましたか！？」

チーフから、たまにとんでもない……いや！予想外の事をやらかす……い・いえ、される人物なんで、丁重におもてなしするように命令されてまして……その……予想外な行動をされたので、つい………」

命令？つてことは、自衛隊か！？

いや、自衛官はあんな運転技術は習わないはずだから、警官の線の方が確かそうだな。

何で、民間人の案内人に公僕が、わざわざ東京から福岡くんだりまでびったり寄り添うんだ？

フライト中に天候の異常を知らせるアナウンスも無かったし、車で走った福岡の街にもおかしな様子な無かった。

一体、どんな災害が近づいているんだ？

「着きました。マジに手エ退かして貰えます？」

また、無表情な案内人に戻った運転手の口元はキュッと一文字に結ばれていた。

へしゃげてない方のドアから外に出ると、

小さいうえにガリガリで貧弱な体に不釣り合いなデカイ顔の白衣の日本人のおっさん（拳げ句に見事なニコルソン禿げだが、似合ってねえ！）

と見上げるほどデカイ白衣の外人のおばはん（178センチの俺より頭二つはデカそうだから2メートル以上あるんじゃないやねえか？横幅も俺の倍はありそうだな……）が近寄って……

いきなり、おばはんにはグされた！！……

見方を変えれば「鯖折るかベアハッグ」だろう。

背中がミシミシとなる程の親密なハグから解放されて、おっさんの方を向くと、静かに右手が差し出された。

「柎つこです。遠いところをご足労頂き恐縮です。

熱い抱擁は、キャサリン博士です。」

ヒンヤリとした右手を握り締めながら

「ジャパンテレコム、危機管理対策本部、田中 一郎です。柊博士？から詳細はお聞かせ頂けるのですか？」

せつかちな俺は、今の状況がまるで見えない事態に多少イライラしていた。

「まずは、落ち着ける部屋に移動しましょう。キャサリン博士、例の映像を準備しておいていただけますかな。」

他の者はコード2の体制のまま待機しておいて下さい。」
貧弱な割には力強い声で指示を出し、ついて来いと歩き始めた。

第5話（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております。

第6話(前書き)

1000アクセスを超えました。

第6話

田中の乗った高級セダンがスロープを下る少し前、福岡の「イータ
ー対策本部」の研究所内のあるラボで……………

「ねえ、先輩？本当にこのH1N1亜種株の中に、犬に感染し凶暴
化させる突然変異体が混ざってると思います？」

若い研究者はマニピレーターを操作しながら、先輩に話しかけて
いた。

「グズグズ言わずに、培養を続けなさい！」

ユタ州の科学者が偶然に変異体を産み出したと説明を受けたでしょ
う？」

額に汗を滲ませマニピレーターを操作しながら、質問をした若い
研究者と幾つも年の変わらない先輩は答えた。

「あんたも、4日前のあの説明会で記録動画……………見たんで
しょ？」

「見ましたよ！まるでB級ホラーでしたよね？」

「人」がゾンビになって人を襲って喰うんですから。マジで…人肉
を食ってるところなんか……………」

「それなら、その後の捜査官の話しも聞いたわよね。わずか半日で
人口30000人の街を……………」

気化爆弾で吹き飛ばさないと感染を止められなかったのよ！

派遣された数百名の陸軍部隊も、この株を持ち出した特殊部隊2名
と科学者の助手名1以外全滅だったのよ！……………」

でも、聞いた限り助手の方は、助かったとは言えないと思うけどね」

眉間にシワを寄せながら、思い出すのちはばかると言う感じでメガネを外しながら、目頭をキツく揉んでいた。

「助かったとは言えないって微妙な言い方ですね。

ネエ、先輩。その助手さんの説明の時は、僕達は追い出されたけど、先輩は残されてましたよね？どんな説明だったんですか？」

「うーん……」。

どうせ一段落するまで外には出して貰えないんだし……

まあ、説明した方が安全かもしれないわね。

助手の人なんだけど……

どうも、「ゾンビ」みたいなのよ。

だいたい1時間に一度だけ1分程度心臓が動くらしいんだけど、脳波を含めてそれ以外の反応は皆無らしいわ。」

「先輩！！そ、その助手って、隣のバイオメディカルルームに居てるんですよ？

壁一枚離れたところに、「ゾンビ」が居るんっすかあ？」

「そうなのよね。私達のチーム。

主任が休みでしょ。

私が代理になっちゃったんだよね。

何せ隣でしょ。

何かあった時に知らないと対処出来ないしね。」

緊張感なく両手を挙げて「仕方なでしょ、業務命令なのっ！！」

「私達のH1N1亜種株からの変異株の特定と変異過程の追求とワクチン作成。ゾンビそのものからの抗体やワクチンの作成。手段は多い方が確実でしょ？」

ゾンビは、ベッドで完全拘束してるから大丈夫よ」

「そりゃあ、そうでしょうが…なんか、ヤバい感じがしません？」

でも先輩、対処っていったってどうするんですよ。

映画じゃないんですから……僕達は鉄砲持ってませんよ」

後輩は完全にマニピレーターを放り出して、興奮した様子で迫っていた。

「大丈夫よ。自衛隊の隊員さんが沢山居てるでしょ？デツカい鉄砲持って！いざなったら、バキューンと一発よ」と先輩は笑いながら右手を銃にして後輩を撃ちながら

「きゅうけい」と言い、コーヒーマーカーに向かって行った。

二人は休憩スペースでのんびりとまったりしながら

「先輩は今日で3日も詰めてて、ほとんど寝てないっしょ？」

今日は僕が変わりますからゆっくりと寝て下さいね」

「本当に？」

ありがたいわ。

柊博士は人類の為に早く見つけなければとおっしゃるんだけど、こっちも生身だからね。

正直寝ないとね」

「そっつすよ。もう上がって下さい。」

それから暫くして、彼女が準備を整えてラボから出ようとした時に内線がなった。

後輩が手で出て行つてと合図しながら

「ハイ、第3ラボ。山形です。有紀先輩つすか？有紀先輩は上がりました。はい、3日も詰めてたんです。」

肩をポンポンと叩かれ、後輩の山形が顔を向けると先輩の有紀が電話を貸せと手を伸ばしていた。

「代わりました。西尾です。いえいえ、遠藤博士こそ大変でしょう。これがなければ4ヶ月ぶりにご自宅にお帰りになれたんですから……え・ええつ?!」

まあ………はあく私で良ければ………はい………はい、3分後にドアの前ですね。わかりました。」

電話を置き、有紀は大きなため息をついた。

「先輩？どうしました？」

「採血に行く羽目になっちゃった。」

「さ・採血？バイオハザード？つすか？」

「違う・違う。お隣のゾ・ン・ビ・の採血。看護部が全員嫌がってたのは聞いていたんだけどねえ………ずっと遠藤博士が採血してたらしいんだけど………昼間に階段から落ちて………右手が使えないらしいわ。」

博士が3日間やってるけど特に危険は感じないそうだし………博士も

同席だしね

死んでるのに採血って言うのも変だね。」

努めて明るく話そうとはしながらも、有紀の顔は真っ青で引きつっていた。

流石に山形も代りますとは言えず。

「でも……他にも、柊博士とかキャサリン博士とかいるじゃないですか！何も先輩じゃなくなつて……」

「柊博士達は来客だそうだし、まあ、今日のラストオーダーってことかな？」

有紀が内線を気にしないでドアから出ていけば…

山形が勤務を交代せず一人で作業をしていけば…

もしくは、山形が採血に行っていれば…

遠藤博士が怪我をしていなければ…

田中達の飛行機が1本遅ければ…

この世に地獄は現れなかつただらう……

全ては

必然性のある偶然な
か

神々の思し召しなのか

悪魔の気まぐれなのか

人類は……未知の恐怖と遭遇することになる。

第6話（後書き）

ご意見・ご感想 よろしくお願いします。

第7話（前書き）

相変わらず くだい文章ですが……

第7話

由紀がメデイカルルーム前で待っていると、遠藤が小走りやってきた。

「いやあ。無理言って申し訳ないね。うちの雛形君（助手）も疲労でダウンしちゃったみたいなんだよ。昼から部屋に戻っててね、寝入っているんだろう、連絡が取れないんだよ。疲れているだろうから、わざわざ人をやって起こすのも憚りなくてね。……」

それで、色々と手配してみたんだが、他に頼む人がいなくて……

「

柘博士と二分する世界的なウイルスの権威が、恥じることなく真剣な顔で若い研究員に頭を下げている。

こんな実直な博士を知っているからこそ、由紀は断れなかったであろう。

「あのおー。一つ伺ってもいいですか？いつも、こんな時間に採血するんですか？」

由紀は遠藤を待っている間に、フツと気づいた疑問を聞かすにはいられなかった。

定期的に採血しているのであれば、遠藤に陶醉し、人一倍気を使う助手の雛形が、博士みずからが人探しをするような状況にするはずがない。

雛形自身が余程の状況なのか、イレギュラーかアクシデントで緊急に採が必要になったのか……

「そうか！心配してるんだね……実は……検体がここに

運ばれてきて5日しか経っていないので、まだまだわからないことだらけなんだが……

最初の2日間は、3時間おきに採血を行っていたんだが、16回の採血の分析結果はすべて同じだったんで、頻繁に採血する必要はないと判断し、毎日13時の採血としたんだ。

血液の詳細な分析やDNA解析からも、いまのところ有益な情報は入手出来ていない。

まあ、DNAの方はまだまだチェックするところは沢山あるんでこれからなんだが……

昼に雛形君が採血して以降、今まで死んだように……いや、実際は死体だから死んだようにと言うのはおかしいが、まあ、話しの便宜上「生き物」と前提して話すので切り分けて聞いてもらえるかね？」

由紀が頷くのを確認し遠藤は続けた。

「えっと……そうそう、昼に雛形君が採血してから、今まで死んだように反応がなかった検体に反応が見られ始めたんだ、1時間程前からかなり反応しているそうなんだよ。反応の原因を追究するためにも、採血から全部のチェックをしてから、柘先生に意見を求めようと思っているんだ。」

「腹あー、減ってんじゃないですか？」突然、遠藤の後ろから声が聞こえたと途端に、若い自衛官が現れた。

「空腹が……と言うのかね」

決して馬鹿にせず言葉を噛むように言い返した。この遠藤と言う学者は素人の意見すら真剣に受け止めながら、「空腹」という可能性

について頭のなかでフル回転で可能性を検討しているようであった。

「鈴木陸士長です。」

敬礼をしながら、その自衛官は話しを続けた。

「俺、学は無いつすけど、昔から「勘」は鋭い方なんつすよね。自慢じゃないですが、レンジャー訓練もこの「勘」で乗り切れたんです。それに、もう5日間、1日8時間近く「あいつ」の近くにいてるじゃないですか、先生と助手さんが生き物を扱うように話しをされているのを聞いたたら、「勘」じゃなくてもそう思っんじやないつすか？」

昨日の夜番のときも、様子を診にこられた助手の方に意見を求められたんで同じことを言ったら、助手の方も、『そうか、僕と同じ意見だね』とか言われてましたけど……
今も、本当はこの当番じゃなく休憩時間なんすけど、昼間の当番の奴に食堂で会って……聞いたんで見に来てみたんです。」

遠藤はメディカルルームのドアにICカードをかざしながら

「そうか……検討する必要があるかもしれないな。どちらにせよ、まずは検査からだな」

部屋の中には、何とも言えない匂いが充満していた。まるで、腐肉が部屋中に釣り下がっているような匂いだった。

「……」

「げっ……何だあこの匂いわ！おい山岡！いつからなんだよ……」

鈴元は毒づきながら警備をしていた自衛官に怒鳴った。

「士長おお。つい1時間ばかり前からなんです。博士に連絡した後から・・・バケモンが唾吐くみたいに、あちらこちらに・・・粘々するもんを吐き散らしているんです。凄エ臭いなんですよ。おまけのそこの靴見てくださいよ。」

その山岡と言う自衛官の数歩前には右長靴が床に立っていた。

「一番大きな粘々を踏んづけてみたら・・・長靴が床から取れなくなつて・・・臭いし、気味悪いし・・・」

その間中、検体（助手）は首を左右に振り、口から液体を飛ばしながら、皮製の拘束具がギシギシいうほどの勢いで暴れていた。

更に、「ううううう」を言葉にならないうなり声まで発し始めた。

「こいつ喋ってるのか？」

先生！それと他の方も下がって下さい。何かやばそうです。

山岡！アラート準備しろ・・・無線で何名か呼んでくれ！！」

鈴元は腰から拳銃を抜き、スライドを操作し初弾をチェンバーに送り込み、両手で拳銃を構え、検体に一步一步近づいていった。

山岡も指示された通り、操作盤に行き、全館アラームのコードを入力するとともに、耳のイヤホンから突き出たレシーバーに向かい。

「メデイカルルーム 山岡2士より、須永分隊各位！コードイエロ
ー・コードイエロー！」

緊急事態の可能性あり。装備を持ち参集せよ。

繰り返す、コードイエロー、緊急事態の可能性あり。装備を持ち参集せよ。

ルーム内は、鈴元士長、山岡2士、遠藤博士 他1名 4名在室。発砲時には注意乞う。

繰り返すルーム内は、鈴元士長、山岡2士、遠藤博士 他1名 4名在室。発砲時には注意乞う。」

「松下 了解！」

「徳永 了解！」

「須永だ！鈴元、山岡、松下、徳永でルーム内は対応しろ！残りはルーム左右で2名つつ待機。ルームからの距離は20M以上確保。個人の判断により発砲は許可する。撃つ時は間違えるなよ！訓練通り出来れば大丈夫だからな！」

飛び交う無線を聞きながら、山岡は89式小銃に初弾を送り込みながら、鈴元の後バックアップの位置についた。

「山岡！89のセレクターはバーストにしとけよ！俺が撃つまで発砲はするなよ！」

指示している鈴元の目前いきなり人が飛び出して来た。

「待ってくれ！今何が起きているのかを把握しておかないと、もしの場合に備えないと、日本が滅ぶ可能性があるんだ！！申し訳ないが協力してくれないか？」

遠藤であった。遠藤は鈴元の目の前まで絶対に引かない構えで立ち

はだかつていた。

拘束具のギシギシと擦れる音が響くなか、二人は睨み合った。

「わかりました。3分。いや2分だけですよ。」

メデイカルルームのドアが開き、松下と徳永が到着した。

「鈴木士長 外も配置もかんりよ……つと、な、なんなんだ、床がベトベトじゃないか？それにこの臭い」

思わず鼻をつまみながら、徳永が呻いた。

「こつちだ！徳永は右腕、松下は下半身、俺は左腕を押さえる！早くするんだ！」

徳永も松下も訳がわからないままに、鈴元の指示に従い、懸命に検体の体を押さえ込んだ。

「博士！早く！」暴れる検体を押さえつけながら鈴元は怒鳴った。

「山岡！拘束する紐を出して追加するんだ！早くしろ！」

あわてて山岡は、操作盤の隣のBOXから追加の拘束具を引っ張りだし、検体の周りで一番脆そうなところを見極めようとした。

「西尾くん！こつちに来て採血を始めて！右手の周りはネバネバがあるから、頭の方から、回って左手から採るんだ。早くこつちへ」

いきなりのことの展開に、パニックになりかかっていた由紀は、フラフラと遠藤博士の方に近寄って行き、博士が指す方向へ（検体の

上半身を迂回して左手に向かう。一歩踏み出した、そこに、首元の拘束を強化しようとした山岡が交錯した。

パニックになりかかっていた由紀にはもう一つ徹底的に運命つぎから見放されていたことがあった。仕事中のスニーカーではなく帰り支度が終わっていたので、ヒールを履いていたのである。

交錯した由紀は、何とか踏ん張ろうとしたが、あるうことが右のヒールが折れてしまった。

それでも、「人」の本能はバランスを保つために「手」を付くという選択を由紀の「脳」に命じたのである。

「手」を付くことにより、何とかバランスが戻った由紀であるが、バランスが戻ったという安堵感を感じる前に、経験のない痛みに襲われた。

同じ時、左腕を押さえていた鈴元は……なす術もなく傍観するしかなかった。

山岡と由紀が交錯する瞬間を、
バランスを失い手を付く瞬間を……
そして

「ぎゃ〜あああああ」強烈な痛みと反発するように引き戻された由紀の右手には薬指と小指がなくなっていた。

検体は、由紀の2本の指をボリボリと口の中で噛み砕いているのだ。
・・・

第7話（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第8話（前書き）

暫く主人公の田中さんが置いてけぼりになっちゃってますね。

第8話

由紀の悲劇の一瞬に、全員の手が止まり、加えられていた力が一斉に外された。

自分の右手をマジマジと見ながら、由紀は気を失い、あろうことが、検体の顔の上に倒れこんでしまった。

「ぐがあああああああつ」有紀の有り得ない悲鳴。

検体は由紀の顔に喰らいついた。

と同時に今までにない力で、獲物を掴もうとしたのであろう、両手・両脚の拘束具は千切れ飛んでしまった。

「うわあああああゝゝゝゝ。離せ！離せ！離せ！」

山岡が、泣きながら、駄々っ子のごとく由紀に喰らっている検体の口元に手を差突っ込み、必死に由紀の顔を剥がそうとしていた。

「ひいひいひいひいゝゝゝゝ」こんどは山岡の悲鳴だ。

検体にとっては、新しい餌が勝手に口元に来ただけである。勿論、山岡の指も検体の口の中で咀嚼されたのである。

噛まれた山岡は、訳のわからない言葉を叫びながら両手を振り回しコマのように、辺りぶつかりながら暴れ回っていた。

「松下！徳永！どうだ！」

パニックを起こしかけながらも、鈴木は『自分はレンジャーだ』と

心を奮い起こし、状況把握するために声を出した。

「松下 いけます。徳永2士は床で頭を強打した様子です。動きません。」

「博士は？博士？はどこだ？」 鈴木

「わかりません。見当たりません。」 松下

鈴木が博士を探そうと、検体から目をずらしかけた時、鈴元の「勘」が騒いだ。

「やばい！検体が起き上がるぞ！」

素早く、スウエーバックするように検体の掴みかかる手を回避し、立ち上がったが………そこに、半狂乱の山岡が突入して、鈴木は数メートル先に吹っ飛ばされた。

鈴木は、一瞬気が遠くなりそうになったところを、自分で舌を噛み、何とか意識を保とうとした。

20秒か30秒か？体制を整えるに要した。

拳銃を構えて立ち上がり、鈴木は自分の目を疑った。

女性が噛まれてから、3分も経っていないはずである。

まして、山岡に至っては分を超えた位のはずだった。

なのに、ゾンビが3体。

それぞれに、松下、徳永、博士に喰らっている。

右手で銃を持ち左手でそっと支え、左足を少し前に突き出し、両膝

を軽く曲げて目標の対してほんの少し身体を開き
ベッドレストに向かって、冷静なよく通る声で

「こちら、鈴元。各位へ。

コードレッド・コードレッド。

繰り返すコードレッドだ。

既に自衛官3名、事務官2名。計5名が喰われた。
噛み付かれると、数十秒でゾンビ化する模様。

これより可能な限り殲滅活動に移る。

オーバー」

いい終えるなり、向かってくる山岡に対して涙をこぼしながら鈴元
は引き金を引いた。

「ドン！ドン！ドン！ドン！」

鈴元の右肩が震える度に、通常なら人を止めるには十分な威力の弾
丸が腹部、胸部、肩、と次々に被弾する。

その度に山岡の身体は仰け反り、一旦動きは止まるが、死者に再度
の死を与えることは出来なかった。

「鈴元！須永だ。脱出しろ。

1人でやり合うな！

全員で迎えうつんだ！

撃つ時は、ブリーフィング通りに頭を撃つんだぞ！……………鈴元おお
あゝ」

須永分隊長の言葉は届いていなかった。

既に、鈴元の耳には「音」は存在しなくなっていた。

ただ、日々繰り返される訓練が本能的に実践されただけであった。しかし、訓練では、「頭」を撃ち向抜くという。ヘッドショットは想定されていなかった。

バイオメディカルルームの外。

「本部！本部！こちら、須永曹長。バイオメディカルルーム内でコードレッド発生。」

自衛官3名と事務官2名が検体に襲われ、ゾンビ化。繰り返す、建物内にゾンビ発生。

部隊を寄越してくれ。こっちは現在5名しかいないんだ。」

「こちらは本部。田坂だ。現状は把握した。2分隊向かわせた。そちらの布陣はどうなっている？」

「はい、ゾンビの拡散防止予防の為、A通路B通路両方向からの挟撃体制を取ってますが…正直、同士撃ちを考えると…」

「了解した。部隊はA通路側から進行させる。」

君達はB通路側に展開しろ。

防衛ラインを5分後に現時点から200メートル下げるんだ。心配するな！

各部屋はICカードがないと開閉出来ない。

ゾンビがICカードを使える訳ないだろう？

無線コードは 4 に変更だ。」

田坂3佐は自信たっぷりに答えた。

（俺は、このゾンビ騒ぎを無事に収束させて、もっと上を目指すんだ）

「了解。須永分隊5名、指示通りに防衛ラインを下げます。

無線コードは 4 に変更します。」

「こちら田坂。

了解した。

須永君、分隊の前面は君のご自慢の鈴元と松下を推薦するよ。以上。

「3佐。ご意見ありがとうございます。

しかし……松下はルーム内でゾンビに……

鈴元は、ルーム内から殲滅行動に出ると報告後連絡が途絶えています。」

田坂3佐は須永の報告に軽い目眩を感じた。

本部を引き受ける条件に、西部方面普通科連隊のNO1分隊 須永分隊を引っこ抜いたのだった。

田坂が戦術評価センターの資料から発見した。西日本で一番優秀な分隊のはずであり、この本部内の中心分隊なのだ。

しかも、鈴元と松下はエースなのだ。

田坂の計算は狂い始めていた。投入した2分部隊がゾンビを足止めしているところを須永分隊に後ろから襲わせるつもりであった。

須永は挟撃による同土撃ちを心配していたが、鈴元と松下はそんな条件は苦にしないはずであった。

「斎藤分隊、西脇分隊どうぞ！」

田坂は送り出した分隊に連絡を入れた。

「斎藤です。どうぞ。」

斎藤がのんびりとした声で返信してきた。任務は足止めと思っっている証拠だ。

「田坂だ！そちらの装備を確認したいのだが？どうぞ」

「ガーガー……たてもの……いちば……ガーガーあとで……」

どうやら、この本部ビルの唯一の弱点のバイオハザードエリアの入り口付近らしく、無線が途切れてしまった。

「青島2尉！聞いたか？須永んところの二人が計算出来なくなつた。代替案を10分で用意しろ」

指示された青島2尉はバタバタとスタッフに声をかけていた。

その中には、本来バイオメデイカルルームの通路前を監視する隊員があり、田坂の焦りが……本部内に伝染したのか？

メデイカルルーム前の監視体制にぽかりと空白が生まれたのである。

同じ頃、第3ラボの山形は、有紀の帰りが遅いことを気にしていた。荷物を置いていったので戻ってくるはずなのだ。

考えに考えた末、山形はメデイカルルームに向かった。

内線が繋がらないことが余計に山形を焦らし、何故繋がらないのか、焦りが想像力を奪っていた。

山形の有紀を想う気持ちが、更なる悲劇への幕開けとなることなど、誰か想像出来ただろう。

第8話（後書き）

ご意見・ご感想 よろしくです。

第9話（前書き）

2000アクセスを超えました。ありがとうございます。
これからも頑張って更新して行きます。

第9話

メデイカルルームの前に立った山形は、自分の右手に持つICカードを見つめながら……躊躇していた。

バイオハザードエリア自体が各部屋毎に完全防音なので、鈴元が放った銃声は山形の耳には届いていなかったが……

臭いがするのだ、腐ったような、なんとも形容しようのない臭いが

……

(俺が仕事を代わらなければ、有紀先輩は採血断れたんだよなあ。)

意を決して、山形はICカードをかざした。

シュツと小さな音がして扉が開き、山形の目前には、変わり果てた有紀が立っていた。

全身血だらけで、顔の右頬の肉がなく骨が見えている。

目は白く濁り

肌は青白く

何より……身体中から先程、嗅いだ腐臭が漂っていた。

「あっ！……ゆ・ゆ・き・せ……」

有紀の名前を呼ぶ間もなく。

数十分前までは優しく綺麗だった有紀は

「ウガアアアア…」と叫び、その面影を微塵も見せずに、躊躇なく大きな口を開けて山形の左首筋にガブリと噛みつき、一瞬のうち首の肉を食いちぎった。

首から吹き出す大量の血液は、比例して山形の意識を奪っていった。

山形の目に写った最後の景色は、部屋の奥で……口の中に拳銃をくわえたまま座り、その頭の後ろの壁に赤い模様をつけた自衛官の姿だった。

山形のせめてもの救いは密かに憧れていた有紀の手によって生命に終止符をうたれこと……
痛みを感じることもない素早い死の訪れだったことかも知れない。

山形の首の肉をクチャクチャと咀嚼しながら、それ以上食する訳でもなく

まるで、ゾンビの本能の中に食欲以外に種の保存、いや、種の繁栄がインプットされてあるかのように……

有紀は通路へと一步を踏み出していた。

通路の左方向の遠いところから、人の耳では聞き取ることが困難なほど微かなガチャ・ガチャと金属のぶつかる音につれられて、有紀はそのそりのそりと左手に向かい歩き始めた。

有紀に続くように、変わり果てた姿の、遠藤博士、徳永2士、元凶の助手が次々とドアから出てきて有紀の後を追った。

山岡だったゾンビは左膝が壊れているのか、少し遅れて現れ、大きく身体を揺らしながらも、まるで遅刻したかのように必死に、何か

に引つ張られるかのように……有紀達の後を追っていた。

そして、山岡の後を、あり得ない角度に、不自然に傾いた頭を揺らしながら山形が続いた……………

メデイカルルームの中には、身体中に噛まれた傷がある鈴元がうなだれるように壁にもたれかかっていた。頭の後ろの壁は真っ赤に染まっていた。

その足元には、額に小さな赤い穴と後頭部に赤い破裂傷がついた松下が静に横たわっていた。

そう、鈴元はバディ（相棒）の松下にゾンビとして人を襲う屈辱を阻止し

自らも、ゾンビに成り下がることを拒否し、最後の1発を人間の尊厳に使ったのだった。

その、鈴元の左手首には松下と自分のドッグタグ（認識票）が巻かれていた。

きつと、きつく握り締めておきたかったのだろう。

しかし、最後の引き金を確実に引く為に、躊躇して奴らの仲間入りをしていないために、巻きつけたのだ。

ドッグタグは、壮絶な状況だったにも関わらず。まるで、「人」としての尊厳のすべてが表されているかの様に、一点のくもりもなく輝いていた。

第9話（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第10話(前書き)

い。2500アクセスを超えました。頑張りますので楽しみにして下さい。

第10話

増援部隊

「隊長、やはりこのエリアでの無線連絡は無理みたいですね。」

分隊の副隊長である竹原曹長はレシーバを指で弾き、振り返りながら斎藤2尉に話しかけた。

「まあ、俺たちの任務は最悪でも、適当に弾をばら撒いてゾンビを足止めするだけだしな。そう緊張する必要はないんじゃないか？」

「ゾンビの突然変異で、ICカードを使いこなして待ち伏せされてたらどうします？隊長？」

笑いながら竹原は、隣の隊員に噛み付く真似をしていた。

斎藤2尉は、悪ふざけしている曹長を困った顔でみながら、かと言って強く注意も出来ずにいた。

竹原曹長に釣られて、残りの7名も緊張感なくふざけあっていた。

斎藤は、元々生真面目な事務屋だった。

その事務屋が2尉という階級で現場の分隊長である。

誰の目から見ても、何がしの失敗をやらかし左遷されたことは明白である。

だから、分隊内での人望はない。更には実戦訓練の成績は分隊内で最下位である。

殆どの部下は陰口を言っていた。

それを竹原が補い、庇ってくれている。

異動になってからは飲めない酒にも手を出し、段々と自暴自棄になりかけていた時に、竹原曹長が現れた。

竹原は俗に言う問題児だった。

レンジャーの資格を持ち、自衛官としての能力は高いのだが、強調性がなかった。

特に上官への反抗で何度も処分対象になっていたのである。

その竹原が言ったのである。

「聞いたぜ！ 基地の司令官の馬鹿娘にストーカーされてたんだって？」

心配しなくていいぜ。その基地には連れがいてるんでな。

他の隊員には箝口令らしいな。

相手が悪かったな、あの司令は娘『命』だかな」

訴えても誰も信じてくれなかった話だった。

その日から斎藤は竹原と行動を共にするようになり、そのうち自分の分隊の副長として引きずり込んだ。

（もちろん竹原が所属していた分隊長は、小躍りして竹原を譲ったことは言うまでもない。）

斎藤は分隊が機能し始め、竹原は階級をかざす上司から開放された。それ以降、中隊内では「奇妙なコンビ」の分隊といわれながらも、絶妙な指揮系統で中隊内での立場を築いていた。

ただ、竹原の悪ふざけだけになかなか慣れない斎藤だった。

「ガッ…ガッ…こちら田坂。ガ…斎藤分隊か西脇分隊 どうぞ」
雑音が混じりながらも無線が通じるエリアにさしかかったようだった。

「こちら 斎藤。電波状況が少し悪いが聞こえています。どうぞ」

本部と会話が始まった瞬間に分隊内の悪ふざけはピタッと止まっていた。

「こちら本部、青島2尉。3佐から引き継ぎます。
作戦行動を修正する予定。

斎藤分隊、装備の確認をどうぞ」

後少しと言うところですかよ！と心の中で毒づきながら……

「こちら竹原。2尉より引き継ぎ。
分隊の装備は、当初の指示通り。

M P 5
P 2 2 6

以外は通常の警戒装備（特殊警棒・コンバットナイフ・スタングレネード）どうぞ」

「こちら、青島 了解。89、またはM870所持者無しだな！どうぞ」

「こちら、斎藤。指示はM P 5・P 2 2 6と聞いている。何故、シヨットガンや自動小銃なんだ？どうぞ」

「こちら、青島。」

須永分隊の、鈴木、松下が死亡またはゾンビ化。挟撃作戦から突入作戦へ変更の予定。どうぞ」

「こちら、斎藤。了解。指示を乞う。オーバー」

斎藤は答えながら、竹原を見つめた。

「隊長！ヤバいぜ。状況はわからんが…鈴木や松下が手に負えない奴らなら、覚悟はしないとイケないぜ」

答えた竹原を含む全員が…ゴクリと唾を飲み込んだ。

「こちら、西脇。青島2尉 どうぞ」

「こちら、青島。西脇分隊の装備も どうぞ。」

「こちら、西脇。提案あり。」

うちは斎藤分隊や須永分隊より人数が多く、レンジャーがいない。突入には不向き、後方支援を希望する。どうぞ」

自衛官と言うよりエリートサラリーマン然とした西脇ならではの判断と提案である。

確かに、西脇分隊にはレンジャー資格保有者がおらず、一番不向きな分隊である。

「キツタネエ！」

と分隊の1人が手を壁に叩きつけた。

その隊員も、自分の分隊（斎藤分隊）が一番適していることがわかっているのだった。

「こちら、田坂だ。西脇2尉の提案を受けることにする。」

斎藤分隊は装備変更に向かい。

西脇分隊はメデイカルルームに向かえ。

西脇2尉！処分は免れないからな！どうぞ」

「こちら、斎藤。了解。直ちに装備変更に向かいます。」

言い終えない内に、竹原が全員を鼓舞した。

「任務達成で俺たちや、エース分隊だぜ！やるぜ！」

斎藤分隊9名は、回れ右し駆け足で装備庫に向かった。

途中、すれ違った西脇分隊の隊員は……うつむき誰1人、斎藤分隊に顔向け出来る者はいなかった。

第10話（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第11話 増援部隊 西脇分隊（前書き）

前書きを考える方が本文より難しいです。

この話からサブタイトルをつけました。

おいおい、1話から準々にサブタイトルを編集していきます。

第11話 増援部隊 西脇分隊

増援部隊 西脇分隊

斎藤分隊が横を駆け抜けて行く中、西脇2尉は俯いていた。

俯いていたが…それは決して後悔や懺悔の気持ちからではないようだ、何故なら、ニンマリと微笑んでいるからだ。

斎藤分隊の最後尾の竹原曹長が「カス野郎！」と吐き捨てた言葉をやり過ごしてから、おもむろに顔を上げ……

「よし。全員顔を上げいいぞ！」

西脇を除く13名の隊員が顔を上げた。

その中で、数名だけが唇を血が滲むほど噛み締めていたが……大半が微笑んでいた。

副長の加持曹長が笑顔で西脇と隊員を交互に見ながら

「流石！2尉。これで我が分隊は無傷で任務が終われますね。おい！みんな！隊長に感謝するんだぞ！」

ガハハハと笑い飛ばした。

加持曹長は、隊長が何らかの処分。更には自身すら処分されかねないことすら気にした様子はなかった。

「よし、前進するぞ。加持！本部に無線を入れておけ！」

「山口！福島！お前達は先頭だ。それと……福島から後ろの3名は10メートル後方からついてこい！」

指示を出し、分隊は進み始めた。

「あつ！待った！」

全員チャンバーに装填済みの初弾はリリースして、安全装置を入れておけ！誤射なんてごめんだからな」

（斎藤の手前発砲準備はしてたが、何時、誰がパニックになって乱射するかわからんからなあ。

ICカードを使いこなせない限り危険はないし、田坂は指令に押さえて貰えばいいしな、人生、ローリスク・ハイリターンだよな！）

隊員はおのおので作業を開始していた。

少し離れた位置に下げられた隊員達の間では、再上位の福島が指で黙ってと合図しながら……

リリースしたふりをし、3名もそれに習った。

「福島さん、あいつ（西脇2尉）俺達が不満タラタラなの知ってて後方に外したんですよ！」

若い山本は怒り心頭で福島に食ってかかっていた。

「しかも……あいつの強気の原因知ってます？どこかだの基地の指令の娘をたぶらかして、指令に取り入ってんですよ。今朝も写メを無理やり見せられたんっすよ。」

「いいから、放っておけ！」

「それより、須永隊の2人が殺られたってことは、残念だが俺達レベルじゃ、全滅ってことになるぞ。」

馬鹿（西脇とそれに従う隊員達）共は発砲準備すら解除し拳げ句に安全装置まで掛けてやるし……

兎に角、俺達4人は臨戦態勢でいくぞ。

セレクターはバーストにして、拳銃にも初弾をセットしておけよ。撃つ時は躊躇するな！

頭だぞ。ア・タ・マ、頭を潰さないで死なないらしいぞ！

よし、俺達は俺達で警戒態勢で行くぞ！

指示に10メートルプランして距離を置くぞ。」

そう、彼等は斎藤分隊が通り過ぎる際に情けなく、本当にうなだれていた者達だった。

「隊長！福永達へのお灸が後方下げでは緩すぎませんか？」

加持は西脇に近寄り耳打ちした。

「ほっとけ！斎藤んところから1人でも犠牲が出りゃ、あいつらも泣いて感謝するさ！」

西脇は自信満々に答え、それからヒソヒソと加持と密談を始めた。

山口と福島は、前方を監視するでもなく、共通のネットワークゲームの攻略法について議論しながらただ漠然と目標に向かい歩いていた。

「おっ！その角曲がれば後2ブロックじゃん！」と山口が言えば

「勇者は危険を顧みず、角を曲がった！そこにはホラーが5体、待ち伏せていた。グール（食人鬼）だった！」と福島が返し

「グールはICカードを使いこなせるようになっていた」と山口が返し

「お前、ゲームと実際をごっちゃにすんなよ。白けるじゃん」と福島はむくれた。

しかし、山口は偶然にも角を曲がった未来を言い当てていたのである。

第11話 増援部隊 西脇分隊（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第12話 西脇分隊の悲劇(前書き)

もう直ぐ4000アクセス!

楽しんで貰えるように頑張ります?

第12話 西脇分隊の悲劇

有紀以下5人（匹）のゾンビ達は、大きな声に向かい、のそりのそりと一歩ずつ近づいていたが……

「ウガツツツツツ」

と小さく唸り先頭を歩く有紀だったゾンビが止まった!?

まるで待ち伏せをするかのように、有紀がとまりその横に元凶の助手が並び、ゆらゆらと身体を揺らして停止した。

その横を、山岡と山形が追い越すように迂回して曲がり角の手前で立ち止まった。

まさしく待ち伏せの体制である。

種の保存や繁栄の本能なのか？

兎にも角にも狩人達は配置についたのだ。

そこに、知恵を持ちながらも愚かな『餌』たる人間が、警戒していれば十分に抵抗できる武力を持ちながら無防備に近づいていたのである。

福島は

「俺は未来の目を持つ勇者。イーグル・アイなんだよ。凡人は黙つてな。」

と、言い後ろを振り向きながら角を曲がり、山口の視界から消えたと思つた途端に……

「う・ううワアああ……ばっ、ばけも……
ぎっぎやああああい、いだああああい」

「ぎやああああ、や・やめでえ……」

絶叫する福島の声でした。

「何なんだよ。ふくしまあゝ、念の入った芝居だなあ！
それともICカード持つてるゾンビでもいたのか？」

福島の一人芝居と疑っていない山口はのんびりとしていた。

しかし、山口の指摘も
まんざらではなかったのである。

ゾンビの1人(匹)の山形の右手にはしっかりとICカードが握られていたのだから……

「山口！何があった？今のは悲鳴じゃないのか？」

加持が怒鳴るように聞いてきた。

西脇分隊は、ダラダラと行軍してたので、先頭の山口達と中ほどにいた、西脇や加持との間が30メートルほどに間延びしていた。

「大丈夫です。福島の悪ふざけです！直ぐに注意してきます！」

駆け出そうとした山口。

「待て！俺が行く。」

馬鹿野郎が！！
大目玉食らわしてやる！！

余りにも状況を考えていない悪ふざけに、普段は冷静な西脇がキレた。

「全員駆け足！俺に続け！」

（福島野郎！全員の前でこっぴどく、しばいてやるからな！）

悲しいかな、だらけていても、訓練された兵士達だった。

西脇を先頭に数秒で曲がり角を曲がったのである。

「！！！！！！！！」

一番最初に曲がり角に飛び込んだ、西脇は自分の目を疑った。

須永隊の松岡が変わり果てた姿で、その白く濁った目で西脇を、いや、飛び込んできた『生きた餌』をじっと見つめていたのだ。

祈る思いで足に力を込めて、急停止した西脇は

「たい、ガッ！」

後ろから追走していた加持に追突されて……ヨロヨロと、山岡の隣にいた山形だったゾンビの前に無防備に押し出された。

「ウツ……」と西脇が叫んだが、叫び声は……
ブッシュウウツツ……

噴き出した血の音にかき消された。首の頸動脈を食いちぎられていた。

西脇は最後の光景、襲ってきたゾンビの右手にICカードが握られていることの意味を誤解したまま、死んでいった。

本部

急な作戦変更の会議に召集された真鍋1尉は会議が終わり自席に戻る最中、何気ない光景の中つふつと不安を掻き立てられた。

「何だ？何が気に触る？」

真鍋は自分が何に引っかけたのか、懸命に意識を集中して考えた。

真鍋の目の前には監視カメラの画像がバラバラに18面映し出されているモニターがあり、建物内を15秒間隔でランダムに映し出していた。

「あつ！……。竹内、11番のモニターを一つ前の場所に戻して、停止させる！早く！」

怪訝な顔で竹内は作戦参謀の一員である1尉の指示を実行した。

「な、なぜ……。だ？誰が？……」

や、やっちまったぞ！」

「竹内、全館にコード・レッドを出せ！
今直ぐにだ！」

責任は俺が持つ！

早くしろ！」

戸惑ってあたふたしている竹内を突き飛ばして、隣にいた隊員が操作パネル飛びついた。

「田坂3佐！青島2尉！来て下さい。」

どこにいたのか、田坂が直ぐ横に現れた。

「どうした？真鍋1尉」

「メデイカルルームのドアが開いています……11番のモニターです。」

真鍋はモニターの1つを指差していた。

「なっ！なんてことだ。」

口をワナワナと震わせて田坂は唸った。

「全館アラーム用意出来ました！」

隊員は真鍋ではなく、本部責任者である田坂に向かって報告し、スイッチに指を乗せていた。

「ま、待て、全館アラームは駄目だ。パニックが発生する。」

「駄目だ！
解除しろ」

「3佐！

ゾンビが……」

通路に放たれんですよ！鈴元や松下でも止めれなかったじゃないですか！」

真鍋は初めて上官に逆らった。

「駄目だ！

アラームは許可出来ん。」

真鍋は思わず、腰のホルスターの拳銃に手をかけた。

「誰に対して拳銃を抜くきだ？」

と青島が真鍋の手首をガツチリと掴んだ。

「青島さん！青島さんからも言うてくださいよ！

今なら、事務方を退避させてから、火力で一気に蹴散らせます。

ゾンビを増やしたら駄目なんだ！

ユタでも、ゾンビの数に負けたと報告されているじゃないですか！」

青島は静かに警務隊員に目配せをし、真鍋を引き渡した。

警務隊員に拘束され、部屋の外に連行されながらも、真鍋は言い続けた。

「今なら、人の数の方が圧倒的に多いんだ。

奴らにやられ始めたら、あつという間に数が逆転するんだ！

わからないんですか？

日本を破滅させるんですか！田坂さんっ！青島さん！………」

閉じられた扉が真鍋の訴えを退けた。

「西脇隊。

エマーゲンシー！

コード・レッド！

コード・レッド発生。

ゾンビがメデイカルルームから出た可能性がある。」

青島が無線で西脇隊を呼び出していた。

「3佐！メデイカルルーム内の画像。1番に出します。」

「……………いない！？誰が開けたんだ？」

呆然と田坂はつぶやいた。

「こちら、青島。西脇隊どうぞ！」

西脇分隊

最初の犠牲者は西脇であった。

直ぐ後ろを追走していた加持は2番目の犠牲者だった。

指揮官を失った部隊は為す術なく、ゾンビの餌食になるしかなかった。

「隊長が殺られた！」

「副長も駄目だ！」

雪崩のように曲がり角に突入してきた7名の内4名はぶつかり合いながら床に倒れ、何とか3名のみが応戦体制をとれたが、全員がパニックに陥っていた。

「撃て！」

「撃つんだ」

口々に叫びながら、隊員達はMP5マシンガンをゾンビに向けて引き金を引いた。

「食らえ！」

「死にやがれ〜っ」

「?????.....!!」

そう、悲しいことに3名のマシンガンから弾丸が発射されることはなかった。

先程の西脇の指示が……裏目に出たのだ。

西脇と加持を襲った2匹以外の4匹が……

唸り声とともに……立ち尽くす3名と、起き上がろうとしていた1名の隊員に遅いかかった。

4箇所から大きな悲鳴と血飛沫が飛び散った。

襲われている4名を後目に、床に倒れていた残りの3名が、立ち上がり、這いつくばり、逃げようとしたところ、西脇と加持を襲い終えた、2匹が襲いかかった。

第12話 西脇分隊の悲劇（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第13話 西脇分隊 福永組（前書き）

なかなか、主人公の再登場までたどり着きません。

第13話 西脇分隊 福永組

皮肉なことに、西脇に反抗した福永と3名は、本体より離れて行動させられていたために、曲がり角まで後10メートルのところまで、立ち尽くしていた。

その時に、青島からコード・レッドの無線が入ったのだ。

「こちら、福永1曹。既にゾンビと遭遇。隊長以下8名が殺られました。」

「！！！！ 青島だ！直ぐに斉藤分隊を向かわす。10分いや6分持ちこたえられるか？」

（わかんねえよ！事件は現場で起きてんだが……現場は曲がり角の先なんだ！）

「こちら、福永。こちらは4名です。一列横隊で退却しながら弾幕を張るしかありません。1分でも早く頼みます。」

吹き出る汗を袖口で拭い

「酒井！木村！矢野！覚悟決めろよ！」

俺と酒井。

木村と矢野がバディで行く。

リロードは声を掛け合え！」

一歩・一歩後方に下がりMP5を構えながら、福永は怒鳴った。

（良子、明美、元気だな。良子、明美をたのんだぜ！）

「こちら、斉藤。状況は把握した。
竹原と数名を先に向かわせる。

残りは装備をM870に替えて駆けつけるから、何とか持ちこたえ
ろ。」

「こちら、須永。我々はメデイカルルーム方向から攪乱に出る。

福永。すまん！我々が気づけば良かったんだが…」

「了解！今から交戦に入ります。」

曲がり角の床に人影が見え、そして、ゾンビが現れた。

（今の時点で曲がり角から約20メートル強か！？
もう少し距離をとるべきなのか？

引きつけて狙うべきなのか？

クソッ！戦術訓練じゃ習ってねえことばかりじゃねえかよ！

てか…ゾンビと戦う想定 of 訓練なんてなかったわな。）

「俺と木村が撃つ！酒井と矢野はそれぞれのバックアップ位置につ
け！

いいか！お互いに干渉しない程度に距離を置くからな、少し離れる
ぞ」

福永は指示をだしながら、更に後方に開きながら動き始めた。

曲がり角から距離にして25メートル。

「撃てえ」

言いながら、福永はMP5の引き金を引いた。

タンタンタン！3発の弾丸が銃口から飛び出し、ゾンビに当たり、当たった数だけゾンビが仰け反った。

（クソツ！簡単に頭にや当たんねえなあ）

よく狙ったつもりだが、弾丸は肩付近に当たっただけだった。

横目で見た限り、木村も頭には当てられなかったみたいだ。

第2射を躊躇していると、次々にゾンビが曲がり角から現れた。

鈴元からの報告の通り現れたゾンビは、つい数分前には仲間だった奴らである。

「わああああああ」と叫びながら木村がフルオートでMP5を打ち始めた。

仲間がゾンビとなって現れたのに耐えれなかったようだ。

MP5は1分間に800発も撃てるマシンガンである。

数秒で30発の弾倉は空になった。

「リロード！」と叫ぶことも忘れて、空になった弾倉を外し、新しい弾倉をセットし、初弾をコッキングした。

木村がリロードしているのを見て、思い出したように矢野が木村の

前に出て、射撃をする。

矢野はフルオートで狙いも付けずに、闇雲に撃っている。

2人が撃ち終えた60発で、偶然に頭にあたつて、永遠の“死”を迎えたのは、僅かに1体だった。

頭に当たらないことで、木村と矢野は焦り、あるうことが、ゾンビに近づいて撃とうとしゾンビ目掛けて駆け寄って行った。

せつかく、リロードの隙に発生する無防備な時間帯に対する安全を考えて確保した距離が一気に失われていく。

「木村っ！矢野っ！駄目だ！距離を取れ！近づいちゃ駄目だっ！」

言いながら福永はゾンビに向かい引き金を引いた。

しかし、完全に我を忘れた2人は、5メートルという近距離まで接近していた。

（ヤバいぞ！近すぎる）

福永は走り出していた。釣られように酒井も走り出した。

木村と矢野は撃ち始めた。

興奮している2人は、頭を狙うことを忘れ、腹を中心にした上半身に弾をバラまいていた。

弾が当たる度にゾンビは仰け反り、動きは止まるが直ぐに両手を前に突き出し、餌となる人間を掴もうと、ヨロヨロと歩き出した。

「カチツ」と音が鳴り2人の弾倉が空になった瞬間にゾンビが襲いかかってきた。

先頭にいた矢野が腕を掴まれ、必死に抵抗していた。

木村は、寸でのところでゾンビの手を回避し、数歩だけ下がったが、あつという間にゾンビに囲まれた。

「な・なんて……力だ！」

抵抗していた矢野はゾンビの圧倒的な力に徐々に不利な形勢になっていった。

福永は、木村と矢野を見比べた。

どう見ても矢野は手遅れだった。

その横を酒井が走り抜けあろうとことか、木村を取り囲もうとする3体のゾンビに、ドロップキックを放った。

2体のゾンビが吹っ飛んだ瞬間に、福永のMP5がもう1体のゾンビの額を撃ち抜いた。

(流石にこんだけ近いで当たるなあ。しかし、数が多すぎる。)

酒井は素早く起き上がり、近寄ってきたゾンビに回し蹴りを浴びせ、木村ともに、福永に向かい合って駆け出した。

ゾンビが1体、腕を伸ばしてきたが、ギリギリのところかわした2人は福永の横を猛スピードで駆け抜けていった。

福永も、負けじと2人を追いかけるため、走り出した。

福永の背中から、矢野の絶叫が聞こえた。

(すまん！矢野、許してくれ。)

必死に逃げ、バイオハザードエリアの入り口で、休憩を取る事にした。

直ぐに、助けが来るだろう。

「何か……身体が凄く痒いんですけど？」

入り口を開けた時に、木村が言い出した。

「どこだ？」福永が近寄ると

「特に、首の後ろが……ずがえだざあか……」

木村が突然に狂ったような口調なりガタガタと震え出した。

木村は、そのまま床に倒れ込み体中をかきむしりながら、額を信じられないほど強く床にぶつけ始めた。

「木村さん！」

酒井が駆け寄ろうとしたところを、福永が制した。

「見ろよ。首の後ろ。」

福永が寂しそうに言った。

「???.....あれって!!！」

首の後ろが腐り始めているようだ。

「どうやら、噛まれる以外でも.....傷つけられたら感染するのも知れないな。」

福永は静かにMP5を構えた。

「でも.....まだ生きてます。さっき.....噛まれた連中は直ぐにゾンビになったじゃないですか？
俺達たつぷり3分は走りましたよ？」

福永は、ピタリと照準を合わせながら

「高校すらギリギリの俺にわかるはずないだろう！
その高校だつてもう30年も前なんだぞ。お前の方がこの間まで現役じゃないか。」

言い争っている内に、木村はピクリとも動かなくなった。

「福永さん？動かなくなりましたよ。どうでしょう?？」

酒井はオロオロとしている。

「お前なあ.....ゾンビにドロップキックするくせに、オタオタすんなよ！先ずはだな.....いきなり起き上がって教われればたらかなわんから、仰向けにするか?？」

「触るんですか？」

「この際だから、木村にや悪いが……よっつと！」

福永は、足の甲を使い器用に木村をひっくり返した。

「福永さん、亀じゃないんすから……あんまり意味なくないっすか？
しかも、顔を見えてたら撃ちにくくないっすか？」

「なら、お前が考えろよ。文句ばっかで汚ねえぞ」

「えーっつ」

と言いながら、酒井はMP5の銃口で木村を突っついていた。

突然、木村の目が開いた。

白濁した目で、酒井を見つめながら、いきなり銃口を掴んだ。

「でたああああ！」

思わず酒井はMP5を手放し、やおら、木村の頭にローキックを浴びせた。

長靴が10センチ程頭にめり込んでいる。無論、さすがのゾンビも即死した様子だった。

福永はMP5を構えまま、固まっていた。

「お前……えげつない殺りかたすんなあ。てか、自衛官なら武器を

「使えよ」

「すみません。自分、実家が実践空手の極道会なんで、身体が勝手に反応するんっす。普段や訓練ではは反応しないんっすけど……」

頭をかきながら首をすくめる酒井だった。

「まあ、素手でゾンビを殺っちまうんだから、お前が最強かもな……」

「さあ、竹原さん達に合流するぞ」

福永は酒井とともに走り出した。

第13話 西脇分隊 福永組（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

第14話 須永分隊 応援（前書き）

ご無沙汰してます。3話分のデータがぶっ飛びショック状況の中、予定外の仕事を押し付けられて……ヘトヘトで立ち直りに時間がかかってます。長い目で見てやって下さい。

第14話 須永分隊 応援

「こちら、須永。我々はメデイカルルーム方向から攪乱に出る。福永。すまん！我々が気づけば良かったんだが…」

「了解！今から交戦に入ります。」

須永は、振り返って部下全員の顔を順に見て、言った。

「俺達は、鈴元、松下、山岡、徳永を助けられなかった！」

「福永達は命に代えても助けるぞ！」

本田、俺、稲本、長谷部しんがりは阿部で出るぞ。撃つ時は躊躇するな！

元は……「ヒト」だったかも知れないが……

今はバケモノだと思え！」

本田を筆頭に全員が駆け出していった。

バイオメデイカルルームの前を走り抜ける際。

ちらりと目をかすめた、鈴元と松下の亡骸に、須永は心の中で敬礼し、強く決心した。

（スマン！きつと迎えに戻るからな！少しの間二人つきりにするぞ！）

もう1ブロック先と言うところで、無線から青島の声が届いた。

「こちら、青島。須永曹長！至急返事を！」

無線は隊の全員に聞こえており、先頭の本田がスピードを一気に落とし、隊はものの数メートルで停止した。

須永は、自分の人差し指と中指で両目を指差し、そしてゆっくりと前方を指差しながら、本田と稲本に右方向と左方向を警戒する様に指示した。

「こちら、須永です。どうしました？」

「こちら、青島。

よく聞いてくれ。

監視カメラの映像を点検していたのだが、先ほど君達が待機していた、2ブロック先に岡田博士がいらっしやるんだ。

非番のずなんだかに……調べ物をしてたらしいんだ。……

「……………」

沈黙に耐えきれずに阿部が無線に割って入った。

「すみません。それは俺達に、岡田博士の保護に迎えてことですか？」

「スマン！」

この非常事態なんだ。

遠藤博士がああなってしまった以上、岡田博士は最優先保護対象者の中でも、トップ3なんだ。

柊博士とキャサリン博士は警務隊が保護に向かった。
至急、岡田博士を保護しろ！」

「福永さん達を見殺しにしろって言うんすか？」
納得が出来ずに阿部は青島につっかかっていく。

「……………」

「命令だ！阿部3士」

青島は非情な声で言い放った。

「なら、そつちから隊を出せばいいじゃないっすか！何も、俺達じやなくても……」

阿部はまだ納得が出来ずにいた。

「青島2尉、了解しました。我々は岡田博士の保護に向かいます。
保護した後はどちらにお連れするのですか？」

須永は口々に文句を言う部下の1人1人の目に「黙れ！」と目配せしながら、拳を血がにじむほど握り締めていた。

「岡田博士は第3研究室にいらっしやる。
保護したら、そのまま、第2格納庫に行くんだ。」

「第2格納庫？ですか。お連れしますが…格納庫では行き止まりになるのではないですか？。」

隊員全員がお互いを顔を不安げに見合っていた。

「緊急の脱出口があるんだ。」

格納庫のC-2のエリアに行ってくれ。
右奥の壁沿いにコンテナがあるはずだ。

コンテナの開閉番号は情報端末に送信しておく。一回こっきりのワ
ンタイム・パスワードだからしくじるなよ。」

情報端末とは、各分隊の隊長と副隊長及び通信要員の左腕に装着さ
れている、箱型の小型コンピューターである。(今のスマートフォン
のデータ通信専用版みたいな物である。)

「ちなみに、格納庫側からしか開閉操作が出来ない……………
其処までは君達だけで、やるしかないからな。」

「こちら、須永。了解しました。
情報端末データリンクさせます。」

情報端末を操作しながら、須永は続けた

「内側からの操作ですので、博士は本田と稲本の2人で外に出しま
すので、迎えを寄越しておいて下さい。
引き渡し後に直ぐに、現場に戻ります。」

「……………」

「2尉、聞こえていますか？」

須永は自分のインカムを指で軽く叩きながら尋ねた。

「コンテナは地下駐車場に直結している。

補充兵2名と軽装甲機動車を2台用意しておく。君達は、そのまま
別の施設まで岡田博士を警備して貰う。

行き先は補充兵に伝えておく。以上だ。」

「ちよっ…？青島2尉！」

通信は一方的に遮断され、情報端末にはデータが届いた証として、ランプが僅かに緑色の点滅を繰り返していた。

(クソツタレ！鈴元や松下の亡骸も回収すら諦めると言うのかよ！)

ガン！！本田が壁を叩き、うつむいた眼からは涙がポロポロと落ちていた。

「助けにも行けない！」

鈴元のアニキの亡骸に手を合わせる事も出来ないなんて……あんまりじゃないかよ！

なあ………？」

誰にともなく本田は叫んでいた。

「みんな、聞くんた。いつも、鈴元は何んて言ってた？任務から目を背ける奴は？」

「全員でデコピンっす」

本田が涙を袖で拭いながら答えた。

「鈴元さんのデコピンは痛いからな。弔い合戦より任務って言われるぜ。」

長谷部が、本田の肩を抱きながら、無理やりの笑顔でみんなに言った。

「長谷部……よく言った。」

須永は長谷部と本田の肩に手を置きながら、部下の1人の顔を覗き込んで……

「鈴元と松下に後ろ指さされる訳にはいかんからな。行くぞ。」

鈴元と松下に敬礼っ！」

全員が、バイオメディアカルルームの方向に向かい敬礼をし、順にもと来た通路に駆け出しに行った。

第14話 須永分隊 応援（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第15話 田中一郎 おいおいどっなってんだ(前書き)

すみません やつとことろ 更新です。

気長にお待ち下さい

第15話 田中一郎 おいおいどうなってんだ

田中一郎

妙な具合になっちまったなあ。

朝一番に迎えにこられたと思ったら、都内をグルグルと連れまわされた挙句に、福岡に着いたのが夕方だもんな。急いでるんだか？ついでに迎えに来たんだか、わかりやしねえなあ。

「柊 博士！

歩きながらで結構なんで、簡単にあらましかでも教えていただくわけにはいかんのでしょうかねえ？」

俺は、柊 博士の背に向かって問いかけてみた。

柊 博士はクルリと向き返り、ニコリと笑いながら、

「我慢の出来ないお方みたいですねえ。分かりました。

キャサリン博士先に行って用意をお願い出来ますかな？

まずは、映像からの方が分かりやすいかと・・・

あらましは道々説明しときますので」

キャサリン博士はうなずきながら、小走りで先を急いで行った。

「田中さんは、映画とかは良く観られますかな？」

映画？んなもん観てるほど暇じゃねえよ。

作り物より現実の方がえげつないことばっかりだつてえのを知らないのかよ！と言う言葉を飲み込みながら

「いやあゝ。あんまり観ないですね。子供が小さいときにセーラームーンとか言う戦う女子高生の謎のようなアニメ映画にはつき合わされましたがね。」

大体、『事实は小説より奇なり』がモットーなもんで。すみませんね。」

「ならば、想像力はお有りの方ですか？」

特に、異常な状況は受け入れられるお方ですか？」

何が言いたいのかわからんが・・・少なくともアンタよりはえげつない地獄を見て来たし、この世で一番怖いのは『人間』てえのは知ってますがね。」

「想像力ですか？」

まあ、今の仕事は一応、想像力がないと被害規模などが想定できないので、普通の者よりは、想像力はあると思いますが・・・」

「『ゾンビ』は信じられますか？」

ゾ・ゾンビ？映画の前ふりがあるから、ブードゥー教のゾンビじゃないよな？

「映画の『ゾンビ』ですか？」

確か、ロメオとかロメロとか言う監督が作った映画に出てくる奴ですよね？

人間を喰う、腐った死体ですよね？

俺が中学位の時に日本で公開されたと思いますが・・・
まあ、『ヒト』が『ヒト』を喰うってえのは、理解できますがね。

『ゾンビ』ってえのは理解に苦しみますね。」

「ほう！『ヒト』が『ヒト』を食べることを理解出来ると？」

「どこかの空軍の飛行機が墜落して2ヶ月ほどして発見された事故で、なかったでしたっけ？」

仲間を喰って、生き延びたってえのが…

確か？『カニバリズム』とか言うんですよね？

それに、佐川君の『パリ人肉事件』なんかもそうじゃなかったでしたっけ？」

「なか・なか！

博学じゃのう、田中さんは。」

ホ・ホ・ホと笑いながら気味悪い話しをすんじゃねえよ。

何でこう科学者ってのは変な奴が多いのかね？

「今回、君に来て貰ったのも、その『ゾンビ』のことなんじゃよ。」

はあああああああ????????????????????

このおっさん、おかしいんじゃないか？

研究のしすぎで狂ったのか？

とは言えずに、切れそうになる声を押し殺して

「えっ と。博士のお話では

この日本に『ゾンビ』が居てる。

その『ゾンビ』が暴れ回る可能性がある。

自衛隊や警察の無線だけでは、通信手段が心もとない。

通信会社にその脆弱で心もとない部分を補完させるために、専門家のシミュレーションが必要ってことですかねえ？」

嫌味たっぷりに聞いてやったが・・・真顔で答えられちまったぞ？

「いやあゝ。話しが早い！」

流石に、伊集院君が推薦するだけの人物じゃわい！」

また、ホ・ホ・ホと笑ってやがる。

「2週間程前なんじゃが、アメリカのユタ州の免疫学者が、インフルエンザワクチンの開発の過程で、H1N1亜種株の中から、犬に感染して凶暴化させる突然変異体を作り出してしまったのじゃ。」

インフルエンザワクチンの『H1N1』などは最近のニュースで頻繁に取りざたされているので、説明はいらんじゃろ？」

確かに、今年は毒性の高いインフルエンザの流行、いや、世界的なパンデミックが噂されていて、うちの会社でもインフルエンザの流行時の対策を練った時に、インフルエンザウイルスは嫌と言うほど本で読まされたっけ・・・

しかし、インフルエンザウイルスは、鳥・豚・猫・馬じゃなかった

か？

犬に罹患するのなんかあったか？

「通常は、犬は罹患せんのが……このウィルスは罹患するだけではなく、感染した犬は100%発症し、とてつもなく凶暴になり、主に、人間を襲うのじゃ。」

実際に、その科学者の飼い犬が感染して、その犬に奥さんが噛まれてしまったの。」

「もしかして、その奥さんが『ゾンビ』になっちゃったんですか？」

なんか、まさしく映画の世界観だと思いつつも、聞かすにはおれなかった。

「その通りじゃ。噛まれて感染し、『ゾンビ』になるまでには半日程度と推測される。また、『ゾンビ』に噛まれた者も僅かな時間で『ゾンビ』に変わり果てるのじゃ！」

オイオイ！物騒な話しじゃないかよ！

でも、テレビのニュースにもなっていないし、映画みたいにアメリカ全土に感染は広がってないじゃないか？

「マスコミにも出てないし、映画みたいにパンデミックになってない。と顔に書いてあるぞい！」

その通りじゃ、初期の段階でアメリカ軍が封じ込めたのじゃ！

しかし、アメリカ陸軍2個中隊（約550名）と発生地（全住民）3000人）の内、生還者は3名だけじゃった。」

「それなら、ウィルスはなくなったんじゃないですか？」

封じ込めたのなら、当然のことを聞いたただけだ。

「いや、生還者は、デルタ（特殊部隊）の2名と科学者の助手の1名じゃった。

兵士は問題のウィルスの変異株を持ち帰ることに成功したんじゃない。

助手は、残念ながら、救出後に『ゾンビ』化が始まり……」

オイオイ！生きてる？って言うていいのかわらんが……取り合えず動く『ゾンビ』が1体でも残ってんのかよ！あぶねーな！

「助手の方だが、ウィルスの抗体を研究するために、この建物の中のバイオルームで経過観察をしているのじゃ」

はあああああああああああああああああああ?????????
???????

何で、アメさんのミスを日本人が日本で尻拭いしてんだよ！

てか、もしもの時には自衛隊なんかじゃ手に負えないんじゃないのか？

第15話 田中一郎 おいおいどつなつてんだ(後書き)

ご意見・ご感想 宜しくです

第16話 伊集院 剛 1週間前(前書き)

なかなか 定期的な更新が出来ません。
挙げ句に、添削漏れめありそうですか…
大きな気持ちで…大目に見て下さい。

第16話 伊集院 剛 1週間前

伊集院 剛 7日前

深夜。

「そうか。間違いない情報なんだな？

……………！

イヤ！

今のところ、君がそれ以上嗅ぎ回るのは得策じゃないな。

うん・うん……

私から補佐官に電話して確認するよ。

ハーバードで同期だったし、通商の時に貸しがあるから、何とか口をこじ開けさせるよ。

党の連中や閣僚の中でも知らされていない者には、くれぐれも気づかれないように頼むよ。

そうか、君と防衛長官だけか、からさわ烏沢君（首相）にもまだ知らされていないんだな？

判った。

また、連絡するから、暫くは他言無用だぞ！」

ジャパンテレコム社長の伊集院 剛は、目頭を強く揉みながら、深く椅子にもたれこみ……

揉まれて真っ赤になった眼で天井の一点を穴があくほど見つめていた。

蔵前翁くろまへは何を考えているんだ？

一歩間違えれば、日本は滅びかねないんだぞ……伊集院は心の中で叫んでいた。

伊集院は何かを決心したのか、おもむろに、机の上のインターホンを操作しながらも、頭の中では、自分がこれからしなければならぬ1日の行動を目まぐるしいスピードで考えていた。

「はい、源五郎丸です。どうなされましたか？」

コール音1回で相手の声が受話器から聞こえた。

こいつは、いつ寝てるんだろう？

早朝・昼間・深夜……コール音が2回以上鳴ったことがなく、電話口に現れる。

関心しながらも、伊集院は注意深く、相手の声が寝起きなのか、意識がはっきりしているのかを読み取るうと耳をすましながら……

「夜中にすまない。

内密な話があるので、秘匿通話に切り替えて貰えるかな？

同時に、私のファイルサーバにもアクセスしてくれ。

パスワードは、今携帯に送った」

相手の返事が聞こえる前に、ブーーンと耳障りな高周波音が聞こ

えた。

ジャパンテレコムが政府や自衛隊・警察関係用に特別に用意している盗聴が出来ない二重化デジタル暗号回線に切り替わった。

ただ、自衛隊や警察に提供している暗号とは違う自社で開発した暗号化方法を利用しているところが若干違うが……

「切り替えました。大丈夫です。」

パスワードも届きました。

直ぐにアクセスします。

アクセスには2〜3分程かかりますのでご了承下さい。」

源五郎丸は静かに答えた。

「早速だが、1週間前にアメリカのユタ州で問題が発生したんだ。なんと言えばいいのか……」

次の言葉を探している間に、源五郎丸が切り出した。

「ユタの件ですか？」

それならば、極小的なバイオハザードのエンデミック（地域流行）と報告を受けてます……」

「……………！？」

伊集院は、声にならない声を上げていた。

国家・与党の中枢にあらゆる情報網を持つ彼すらも、今しがた聞か

された情報だと言うのに、源五郎丸はまるで、四半期の経営報告書を読み上げるかの様に淡々と切り出した。

「発生から1時間程度で、偶然バカンスの途中で立ち寄った、ペンタゴン（アメリカ国防総省）作戦部の佐官が遭遇して、かなり早い段階で軍が投入されました。

おおよそですが発生から3時間程で投入された模様です。

規模ですが……

米統合特殊作戦軍から
レンジャー2個中隊。

デルタ（特殊部隊）2個分隊が派遣されましたが
作戦行動から6時間後に80%の隊員が罹患し、他地域にアウトブ
レイクの可能性が極めて高くなり………

アメリカ空軍の

F-22が8機3編隊

F-16が8機3編隊

で地域一体を

第一派がディジーカッター

第二派がサーモバリテック（燃料気化爆弾）

第三派がMk77爆弾

で爆撃。

更に、C-130ガンシップ5機

A-10、15機

アパッチヘリ 20機

ヘリはA-10が夜間要撃には適してないので、陸軍ナイトストーカーズが夜間要撃にブラックホークで参加した模様です。

で、爆撃後に動く物全てを無力化。

爆撃とその後の要撃が夕方から夜間に及んだため翌未明から

デルタ1個中隊

SEALS4個小隊で

破壊出来なかった、地下鉄などの地下地区を搜索し殲滅したとの事です。

地上部隊は、先に投入された558名の内デルタ2名と民間人1名が生還。

後続部隊は、地下鉄線路内で感染体約200と遭遇し、デルタから30名SEALSから20名が戦死しましたが感染体は殲滅したとの事です。

夜間要撃から未明までは特殊作戦群第19特殊部隊が約1000名で街を取り囲み包囲したので、感染体が市街には出ていないと判断されています。

街は山などに囲まれていない平野部だったのと、隣街まで100kmと離れていたのも、情報操作も問題なく処理された模様です。

表の情報はこれぐらいですが……

どうも、感染体が一体捕獲されたいらしいのですが……

これ以上は掘めておりません。」

何が表の情報だと言うのか？

伊集院が受けた報告より詳細であった。

「い・いつもながら、君の情報網はどうなってるんだろうな？

私の情報より詳細じゃないか！

参ったな……………」

「すみません。」

直接会社への影響は考えられなかったのも、明日にでも報告書を用意していたところだったのです。

特別、社長がご関心を持たれるとは……」

流石の源五郎丸も伊集院の意図を計りかねていた。

「公安の外事1課は軍の動きまで把握しているのかい？

そこは、統合幕僚本部の管轄じゃないのかね？」

伊集院は、源五郎丸を自社に拾った時の事を思い出していた。

同時、腹心の姫山警察庁長官から

キレ者なんだが、部下の失態を庇い、ヤバい状態で警察庁公安部では庇いきれないスゴ腕がいる。
きつと役に立つ奴だと。

更に、伊集院が引き取る事で関係者からの圧力を抑えることが出来るし、なにより『公』から『私』への異動で情報に制限がかけれることが関係者が一番望む解決策であり、地下に潜りでもされたら…

…

とたつての依頼で引き取つたのだ。

ただし、伊集院は源五郎丸に一つ条件を出していた。

「信用出来る奴達を引き込んで、何処にも負けない情報網を築け。
ただし、もう国家の後ろ建てはないからな。」

源五郎丸に会つた瞬間に

こいつは情報の世界でしか生きれない奴だ。

と伊集院は感じたのだ。

それならば、『私』の範囲で最高の情報網を作らせて、企業としての情報戦を任せれば良いのだ。

源五郎丸は伊集院の期待以上の成果を挙げ続けていた。

「仲間が一騎当千と言つんでしょうか？

私と同じで一匹狼ばかりなんで……」

いつもと同じようにはぐらかしながら源五郎丸は答えるのだった。

「社長！……………」

冷静沈着な源五郎丸が、思わず、声を張り上げた。

伊集院のファイルを見たのだ。

「そうなんだ。先程の君の報告の中の感染体だから……………
3日後に福岡の柊博士の元に届くらしいんだ。」

しかも、お膳立ては、かの 蔵前翁ときたもんだから……………

国内…いや、合衆国大統領でも、阻止は出来ないだろう。

唯一は貴子夫人ぐらいだったのだが……………」

蔵前翁とは

齢90歳を超えてなお、国内はおろか海外にまで影響力を持つ人物である。

莫大な資金を元に、世界中に関連会社を持ち、フォーブスに掲載される、世界トップ10社の半数の社長の首を、一声で変えられる実力者である。

一説には、その豊富な資金は「徳川埋蔵金」や「ヒットラーの隠し財産」など、どこかに「ある」と噂される謎めいた資金の行き着く先となっている。

「なぜ、蔵前翁がこの事件を嗅ぎつけたのか？
何を目的にしているのか？が見えないんだ」

伊集院はストレートに疑問をぶつけた。

「事件の件は多分、ゲ・リ・・タウンゼント卿でしょうね。」

タウンゼント卿は現英国政府の大きな後ろ建ての一人ですし、卿の息子は英国情報部の部長ですから…

情報は入手出来る立場にあります。

またこれだけの情報をリークする危険を負うんですから、見返りもそれなりと考えられます。

それらから考えて、多分目的も推測は出来ませんが……」

源五郎丸は自信たっぷりにはロイズ保険機構の最高責任者の名を挙げた。

だけでなく、目的まで推測出来ると言い張った。

「源五郎丸君、タウンゼント卿だと言う根拠はなんだ。」

天下のロイズ保険の最高責任者だぞ、彼は……

しかも、蔵前翁の目的まで分かると言うのかね？」

「実は、先月のメキシコ湾沖のIBP社の油田事故でロイズと言うかタウンゼント卿は、壊滅的な保険支払いが発生するのです……

公式にはロイズ保険は受託していないと声明を出していますが……

IBP社がかなりの高額な保険料を提示し、タウンゼント卿と数名の実力者が密かに受けたんです。」

契約書の写しも見てますんで間違いはありません。

既に、我社のロイズに出資している分は引き揚げさしてますが……

ご存知の通り、ロイズ保険は、金持ちの集団が自己資金で保証しているものですので、今回のタウンゼント卿を含めたメンバーが破産すれば……

ロイズは再起不可能になります。

多分、蔵前翁から、資金を捻出するか……

メキシコやアメリカからの非難の声を鎮めて貰うか？

まあ、両方でしょうね。」

「目的はなんだ！

それだけの金を出すほどの目的なのか？」

知らないことばかりの事実を聞かされた事と、既に今の話から目的が分かってしまった伊集院はかなりイライラしていたが、勘違いであって欲しいと願いを込めながら源五郎丸の推測を訪ねた。

「実は、かなり以前から翁の計画らしきものは掴んでいまして、目立たないように妨害工作はしていたのですが

最近、セキュリティの担当者が遣りにくい相手になりました……

半分は出し抜かれている次第です。

申し上げにくいのですが…

そのう……蔵前翁と社長は、ご親族の筋にあたられますので……

実は、貴子夫人のご遺体は茶毘に臥されずに、冷凍保存されている様子なんです。

社長、葬儀の時にご遺体に会われましたか？

ー

そうなのだ、蔵前翁と伊集院は親族の関係にあった。

宰相の家系と日本一の実力者の婚姻による、親族関係は、影響が強すぎるためトップシークレットとして扱われていた。

しかし、血生臭い理由の政略だの政治だのでなく、純粹な気持ちから結ばれた蔵前翁と貴子であった。

貴子は、伊集院の母の妹であり、早くに母を亡くした伊集院にとっては叔母であり育ての母でもあった。

物静かだが芯の強い美しい叔母だった。

数多くの婚姻の誘いを、伊集院のために断り続けて、蔵前との婚姻は40を大幅に過ぎていた。

しかし、幸せな結婚生活も10年が経ち、伊集院が政界に初当選したと

同時に重い病に倒れ1年ともたずに他界したのである。

政界1年生の時代には、貴子の育てた息子だと、影から支え続けた蔵前であったが、伊集院の実力が自分のバックアップなど必要がないことを悟ると、自然と伊集院との距離をおき、表社会からひっそりと身を引いたのである。

その後、唐突な表社会からの引退を受け日本の黒幕と呼ばれ出されたのだ。

「確かに、薬の副作用で恥ずかしいからとの遺言と言われた……

貴子さんを蘇えらせる？

と言うのか？

彼女は亡くなっただぞ！

たとえ、蘇っても、

『ゾンビ』でもいいと言うのかっ！」

思わず、伊集院は電話口に向かい大声で怒鳴っていた。

「社長！

落ち着いて下さい。

何も、ゾンビにするなんて…突拍子過ぎますよ。
多分、ゾンビへの変異の過程から蘇りや不老不死の研究への、糸口を掴むためだと思われれます。

我々の間では、翁の蘇りや不老不死の研究への、のめり込みは有名ですし、かなり怪しげな研究にも資金を出されていますから。

しかし、この、柊博士は社長もご存知でしょ？

遺伝子工学とウイルス研究の世界第一人者ですよ。

しかし……万が一施設外にアウトブレイクした場合は……
今の日本の自衛能力では、初期対応に失敗したら……

取り返しのつかないことになりますね。

……………」

そのことについて、二人はお互いに受話器を握ったまま、一声も発せられなかった。

第16話 伊集院 剛 1週間前(後書き)

ご意見・ご感想 お待ちしています

第17話 伊集院 剛 1週間前？（前書き）

少しずつ 更新のペースを上げて行きたいとは思っています。

11000PVを超えました。

ありがとうございます。

第17話 伊集院 剛 1週間前？

伊集院 剛

「米軍は600名近い犠牲者がたんだな？」

沈黙を破ったのは伊集院であった。

「もし、同じ条件下で自衛隊が対応していたならば、どの程度の被害規模かシュミレーションは可能か？」

「シュミレーションは可能です……」

しかし、米陸軍レンジャー部隊であれば自衛隊のレンジャーでもひきはとらないでしょうが……

デルタ分遣隊やSEALSなどは 自衛隊では、同等の能力を有する部隊はありません……

しかも、決定的な違いがあります。 自衛官の殆どが、『人』に向けて、発砲した経験がありません。

また、保有する弾薬量も怪しいです。

さらには、福岡と今回のユタでは、地形が違い過ぎます。

同じエンデミックでも、アウトブレイク（拡大）の伝達スピードは比べものにならない速さになるでしょう。

私も、軍関係はあまり得意にしている訳ではありませんし……

戦闘シミュレーションなどは完全な専門外なので一度、調べてみます。」

流石に、公安警察の経験者である。専門外などとは言いながらも、素人の伊集院には最もな説明に聞こえた。

「わかった。君はシミュレーションを中心に、最適と思われる、初期対応方法を検討してくれ。くれぐれも、情報が漏れないように頼む。」

指示を出して、電話を切ろうとした伊集院は、あらためて、受話器を強く握りしめ

「源五郎丸君、この情報はどの辺りまで知れ渡っていると判断すればいいんだ？」

……
「難しい質問ですね。」

私が得てる情報からの判断ですが福岡の件までを知っているのは……限られていると思います。

おそらくは

アメリカは、大統領や補佐官と中央情報局（CIA）長官、国土安全保障省（DHS）長官、国家安全保障局（NSA）長官。ぐらいかと。

日本国内であれば、
蔵前翁サイド。社長と社長の情報源。 柊博士とその関係者。

情けない話ですが、防衛省情報本部にいたっては、ユタの大規模な戦闘行為すら、NSAからの、イスラム過激派系の流れを汲む新興宗教集団の、特殊作戦群第19特殊部隊への大規模な自爆テロという説明で丸め込まれています。

唯一、私の古巣の警視庁の公安 外事1課長が、色々と嗅ぎ回ります。まあ、あまり穿りだされる前に私の方から釘を刺しておきませんが・・・

。 感染症の噂の件は、かなり広がっていると思われます……………

未知の生命体と思われる『ゾンビ』ですので、既にアメリカ国内には各国の情報員が、ゾロゾロと活動を始めています。

幸いなことに、『ゾンビ』という特殊すぎる対象だけに、各国とも友好機関同士でも一切情報交換が無く、全員が暗中模索状況です。

どの国もかなり活発に行動していますが、特にといえば

イギリス情報局秘密情報部（SIS・旧MI6）。

ロシア対外情報庁（SVR・旧KGB）。

ドイツ連邦情報局（BND）。

フランス対外治総局（DGSE）。

イスラエル諜報特務局。
モサド

中国は国家安全部と人民開放軍参謀部第二部。

朝鮮人民軍総参謀部偵察局。

韓国の国家情報院（旧韓国中央情報部 KCIA）

変り種ですが、先ほどのタウンゼント卿のロイズ保険。

もう一つが、ちょっと厄介なんですが、EC最大手の製薬会社のユニバーサル・サイエンスケミカルも情報線に参戦しているんです。

ここには、この10年間でドイツ連邦情報局を超一流の機関に育て上げた、ゲルト・マイアー元長官がいてまして、

第一線からは退いたと思ってましたが何故だかこの件に限って最前線で指揮を執ってます

こんなところかと思われませう。

矢継ぎ早に繰り出される、情報機関名など、一般人の伊集院には覚えられないはずも無く……

「兎も角、その、たくさんの情報機関が、一歩間違えれば日本に土

足で乗り込んでくるんだな……

先ほどのシミュレーションに追加して、各国の情報機関の詳細とそのヘッドの人物評価、想定される投入される情報員やチームの概要など。

また各の情報機関への対策方法など。

無理を言うが朝早めに、そうだな、10時には何人か信用の出来るメンバーを揃えて対策を検討したいので、9時に資料を持ってきてくれるかな？

最後に、そいつらに対抗する手段を教えてくださいと助かるんだがな……」

大きなため息をつきながら、相手の返事も待たずに伊集院は電話を切った。

確か、防衛長官は姫山君だったよな。一緒に悩んで貰うとするか。

休む間も無く伊集院は、受話器に手を伸ばしていた。

第17話 伊集院 剛 1週間前？（後書き）

ご意見、ご感想 お待ちしています。

第18話 伊集院 剛 6日前(前書き)

少しリアリティを求めて書く内容の一部を調べてたら……

(・・・)？ 自衛隊の管轄省庁が、庁から省に変わっていたことを完全に忘れてました。

いまさら訂正とはいかず更新を優先したいので……

防衛長官 防衛大臣と読み換えて下さい。

すみませんです。

第18話 伊集院 剛 6日前

伊集院 剛 6日前

約束の時間より1時間ほど早く、源五郎丸はジャパンテレコムの本長室に到着していた。

約1時間後、別々に東京に連れてこられた4名が順次一室に案内されていた。

「おう、これはこれは、かみおか上岡知事（福岡県）ではありませんか。

久しぶりのご対面が何とも言えない妙なところですね。

貴方も伊集院氏からの要請でこちらに来られたのですかな？

私も忙しい最中だったんですが、伊集院氏のためのお願いと伺ったものですから、早朝にも関わらずはせ参じたんですよ。

偶然にも昨晚、都内で官房長官にお会いしていましたものでね。」

先に室内に案内されていた、横山（福岡市）市長は大袈裟な仕草で上岡に握手を求めてきた。

「お久しぶりです。夏の選挙以来です……か。」

遠慮がちに握手に応じながら上岡は答えた。

横山は、前市長の贈賄事件による失職の市長選挙で当選した、経済

通で在京の辛口コメントで有名な元人気アナウンサーである。

無所属、無党派を標榜しているが、選挙前には上岡に対して、側面支援と協力を求めてきていた人物である。

上岡は所属する政党の県連合などを紹介したが、微妙な政策の方向性の違いなどは大きな障害とはならなかったが、言葉の端はしに見え隠れする人を見下した態度や虚栄心の強い人物像は、残念ながら当選が確実視された人物であろうとも、県連合として受け入れられず、党の推薦すら断られてしまったのである。

必然的に、当選後の横山は党に対してあからさまに嫌悪感を示し、事あるごとに政策に反対を声だかに叫んでいる急先鋒であり、上岡に対しても逆恨み状態なのである。

姫山防衛長官と伊集院さんからのたつての要請とは言え、横山さんかあと顔にださないように気をつけながら、心とは裏腹に

「夏の選挙では、たいしたお手伝いも出来ませんで、申し訳ございませんでした。」

「いやいや、こちらこそ無理なお願いをしまして、お手を煩わせてしまいましたなあ。」

そこまでの無理をする必要は無いと思っていたんですが、私を必要としている福岡市民の事を考えるとね。確実にしたかったんですよ。

「
まだまだ、自慢話を聞かされることを覚悟しながら、上岡は用意されていた席に座り無造作に机に置かれていた、缶コーヒーに手を伸

ばしていた。

扉が開き、若い自衛官が二人の人物を部屋に案内してきた。

「おっ！上岡さんじゃないですか！知事も連行されてきたんですか。一体何が起こってるんですか？」

新たに入室した2名は、西郷 福岡県警本部長と野口 福岡県公安委員会委員長であった。

「西郷さん！連行されたんじゃないでしょうが。アンタもワシも伊集院君に請われてきたんじゃないやろうが！！」

「もう、野口さんは、二言目には伊集院・伊集院って。

野口さんは伊集院シンパだから何の疑問も持つてらっしゃいませんが、考えても見てくださいよ。

夜中に叩き起こされて、パトカーで陸自の福岡駐屯地。

そこから、ヘリコプターで空自の築城基地 ついき (飛行場)。

YS-11輸送機に乗り換えて埼玉の人間基地 いるま (飛行場)。

そこからは、車で都内に入ったかと思えば、どこかのビルの地下3階の秘密の扉みたいなのところか、今度は地下の小型モノレール？でここまでですよ！

ここは、法治国家の日本ですよ。まるで映画の世界じゃないですか！

拳句に、案内している自衛官はこちらの問いかけには一切答えないですし……。

途中で、野口さんが伊集院さんに確認の電話を入れてくれたから、信じてついて来たんですよ。」

不満が一気に噴出す格好で、西郷県警本部長はまくしたてた。

「まあまあ、西郷君も落ち着いて。」

しかし、知事に市長に県警本部長、公安委員会委員長という面々がそれぞれ集められたということは公安上の問題が福岡で発生すると言っことなんでしょうかね。野口さん？

伊集院さんから、何も伺ってらっしゃらないのですか？」

上岡は、興奮している西郷本部長を諭しながら、自身も疑問に感じている招集された理由を考えながら野口に尋ねた。

野口は、元東京地検特捜部の責任者だった人物である。退任後公安委員の要件である、任命前5年間に警察または検察の職務を行う職業的公務員の前歴のない期間が経過したところを見計らって、伊集院が口説き落とし、姫山警察庁長官（当時）上岡の要請で福岡県公安委員会に招いたのだ。

就任早々に野口が横山市長の前任者の贈賄事件の摘発に尽力した結果、福岡財界の大きな膿みを絞り出すことができたのだった。

「いや残念ながら、何も聞かされておらんじゃよ。しかし、この年寄りを夜中にこのような乱暴な手段で東京まで引きずりだしたの

だから、余程のことだと腹を括って望んだ方がいいと思うがね。」

野口の真剣な眼差しに、二人はゴクリと唾を飲んだ。

「あ・・・・・・・・。」

伊集院氏がどれだけ功績と人望をお持ちとしましても、既に政界から野に下られて6年程たたれてますよね。今は一介の通信会社の社長だというのに・・・・・・・・。公人たる我々をこのような非常識な方法で集めるのはいかなものなんでしょうかね？

まあ、幸いに、私は福岡市民の安全のための陳述とであれば日本国内何処にでも話しを聞きに行きますがね。今回、伊集院氏とパイプが出来れば、ジャパントレコム的大型コールセンターの誘致などもやりやすくなりますので。

確か・・・・・・・・知事は福岡ではなく鹿児島を担いでらっしゃいましたか？」

横山の狙いは、ジャパントレコム的大型コールセンターの誘致か！それで、伊集院さんの盟友の官房長官に取り入りを画策して東京にいたのか！

「何をくだらんことをくっちゃべっておるんじゃ。夏の市長選の有権者向けの単なるPRじゃろうが！大型コールセンターの誘致より、ユニバーサル・サイエンスケミカルの工場誘致のほうが多くの雇用を産み出すことが出来たのに

君のスポンサーのインペリアル・フューチャー製薬（国内第1位、世界第7位）いや、帝国・未来ホールディングスの梶原社長に遠慮しただけじゃろうが。」

もともと、芸能上がりのアナウンサーめが！と市長に対する評価が

低い野口は遠慮なく吐き捨てるように言った。

「な・なにを、おっしゃるんですか？ 私は市長として、市民の安全を考慮にいれて、危険な薬品工場の誘致を断腸の思いで断念したのですぞ。ましてや、ユニバーサルは前市長への贈賄事件の背後に見え隠れしていることはお忘れですか？」

怒りと屈辱で顔を真っ赤にしながらも、横山は何とか野口に一矢を報いようと反論した。

「まあ・まあ お二人とも、こんなところで福岡者同士の内輪揉めはよしましょう。」

仕方なく仲を取り持とうとする上岡が二人に割って入ろうとした途端に、扉が開き、年配の自衛官が入って来た。

「遠いところをご足労いただき、申し訳ございませんでした。また同行していた者達も、お連れすること以外の情報は与えておりませんでしたので、さぞや、不愉快な想いをされたかと存じますが重ねてお詫び申し上げます。」

ご挨拶が遅れましたが、私、統合幕僚監部 織田陸将補です。」

自衛官らしくなく、敬礼ではなく全員と握手をしながら

「早速ですが、長官と伊集院氏が別室でお待ちしておりますので、お連れいたします。」

一向はエレベーターに乗り込み、上昇していった。

チン！

と軽い音がなり滑らかにエレベーターが停止し、扉が開いた。

エレベーターの前には、目を見張る美人が笑顔で待ち構えており、軽く会釈をしながら

「ようこそ、ジャパンテレコムへ

秘書室のアスカ・D・ガードナーです。

社長がお待ちでございます。

長らくお待ちせしませて申し訳ございませんでした。」

上岡は、肌の色が透き通るほど白く、整った目鼻立ちで、まるでファッション誌から抜け出した様なその女性に目を奪われてエレベーターを一步出たところで立ち止まってしまった。

トン！と軽く突き飛ばされて正気にかえった上岡の横を通り過ぎた野口は、アスカの横を通り過ぎ肩をポン！と叩き、アスカにだけ聞こえる小さな声で

「デビルフェアリーの嬢ちゃんまで出張ってきてるようじゃ。僕の命もあと僅かなようじゃな。」

上岡君！ボヤボヤせずに伊集院君のところに行くぞ。

嬢ちゃん、さっさと連れて行ってもらえんなか？」

アスカは、野口にかけられた声など気にする様子もなく

「いちばんでいけます。」

と一同の前を優雅に進んでいった。

「では、その方向で行くと言つことによろしいですね。」

「烏沢君と真弓君には僕から根回ししておく。」

厄介なのが、国民義友党の星野さんだが、落合さん（国対委員長）や、谷澤さん（経団連会長）がいくら信用出来ると言つてもこれ以上の情報拡大は防ぎたいし……

背に腹は変えられないな……

毒を食らわば皿までと言つしな……

よし！多少、荒っぽくなくても構わないから、君の方から切り崩す手立てになりそうな情報を出して貰えるかな？」

「解りました。」

それなら、新入社員でも交渉成立出来るネタが山ほどありますんで……

社長が星野さんに直々にされますか？」

ニヤリと笑う源五郎丸を見て

こいつが敵に回ったら、俺もヤバいことになるんだらうなあ。とい
らぬことを考えながら

「俺がするわ。」

君に任せたら、星野さんが可哀想だしな。」

源五郎丸は、少し残念そうな顔をしながら

「かしこまりました。14時頃に引導を渡す場を設けます。」

トン・トン・トンと控え目なノック音がして、たつぷりと5秒ほどの間があり、扉から、アスカの淡麗な顔が覗いた。

「お連れしました。お通ししてよろしいでしょうか？」

源五郎丸が立ち上がり、招き入れるために扉に向かった。

一同が介して、簡単な挨拶が済み、用意された椅子に腰掛けた途端

「昨晚、真弓さん（官房長官）からお電話をいただきました、いや、実はお電話をいただく数時間前に伊集院社長をご紹介いただけないか相談を差し上げてたんで、すっかり期待してしまいました。しかし、この面子を拝見したところ、かなり政治色の濃い会合の様ですね。」

若輩者ものが差し出がましいですが、一言よろしいでしょうか？」

一つ咳払いをして、横山は座を仕切る様に得意げに続けた。

「伊集院社長は、政界を離れられて既に6年近くお経ちだ。」

ご存知の通り、政界も日々、新旧の入れ替わりが行われております。ここにおられる上岡知事など、その最たる人物です。2年前まではバラエティーに引つ張りだこの、若手イケメン弁護士だったのですから……

この場でどんな政治的なお話しをなさられるのかは存じあげませんが……

政治は我々にお任せいただいて
社長は財界人として経営者として、
例えば私が表明している、福岡雇用再生計画の特別行政地区での大企業の部門誘致などをご検討いただくなど、私企業として、行政をバックアップしていただければ助かるのですが……

今回の様な、一昔前の秘密主義的な大袈裟な会合など無意味ではないですか？

今の有権者は開かれた行政を望んでいることは、マスコミの調査でも明白ですし……」

伊集院は、源五郎丸とアスカに目配せをしながら

「横山市長。ご高説ありがとうございます。」

老兵がでしゃばり過ぎたみたいですね。肝に銘じておきますよ。

コールセンターの件は、担当役員に検討させることをお約束しますよ。

今日の会合をご内密にお願いしたいことと、幾つかご協力いただき

たいことがありますので……

別室で、ご説明させますので………

アスカ君。

横山市長を楠田常務の部屋にお連れしてくれ。

追って、誰か説明に伺わせるから

横山市長、ご多忙の中すみませんでしたね。」

伊集院は既に横山がその場にはいないかのように、他の3名に話しかけ始めた。

慌てて言い訳をする横山は、アスカに追い立てられる様に、部屋から引きずり出された。

「さて、お集まりの皆さん。心して下さい。」

神妙な顔で伊集院は切り出した。

第18話 伊集院 剛 6日前（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしています

第19話 番外編 横山 陥落（前書き）

本編には、あまり影響がないですが……
後味が悪くなるといやなんで、この日の横山市長を最後まで追っかけました。

リアリティにこだわってみたら……

どんどん登場人物が増え続けて、平凡な名前の田中一郎さんが埋もれいきそうです。

暫くは、伊集院さんと源五郎丸さんにお付き合い下さい。

第19話 番外編 横山 陥落

別室に案内された後も、横山はブツブツと言いつきを呟いていた。

そんな横山を冷めた目で眺めていたアスカのポケットの中で、携帯電話が微かにバイブレーションし着信を知らせていた。室長（源五郎丸）か、と思う間もなく、アスカの右耳に装着されていたBluetooth無線のイヤホンマイクが通話開始の信号音を奏でた。

「D。^{デエ}」

アスカは符丁の様にミドルネームの頭文字で応えた。

「Mだ。^{エム}市長は大人しくしているか？」

「しきりに自分を正当化する独り言をブツブツと唱えてますが……」

「Bestrafungだ。」

「ya！」

お仕置きだけでいいんですか？」

つまらなそうな声でアスカは答えながら射るような目つきで横山の背中を睨んだ。

（殺してしまうほうが楽なんだけどなあ……
あんなに無防備……簡単に始末出来るのにね

ザ・ン・ネ・ン・！)

「な？な・なんだ？」

経験したことがないゾクリとした感じに、自然に冷や汗が流れ、横山は思わず後ろを振り返った。

そこには、ニツコリと優しい笑顔を見せて電話をしているアスカがいただけであった。

「思い過ごしか……」

と思った瞬間に、股間の湿りに気付いた。迂闊にも軽く失禁してしまったのだ。

恥ずかしさで顔を真っ赤にしている横山に、アスカが近づき

「先ほどのご説明の件ですが……私の方でお伝える様に指示がありましたので、よろしくければ、こちらにどうぞ。」

とアスカは応接のソファアを示しながら、自分は常務の机に回り、パソコンを起動し始めた。

股間の湿りが気になり、モジモジしていた横山に対して

「何か匂いませんか！？」

臭いですよねえ。

申し訳ございません。後ほど、清掃員を呼びますので暫くご辛抱い

絶対に盗撮なんて出来ない……………んだ……………」

涙を流しながら抗議する横山を尻目に、アスカの手にあるマウスは、次の映像ファイルをクリックした。

「……………」

それから、30分に渡り、横山の異常な性癖の映像は十数本に渡り映し出された。

「これが……………最後のファイルで……………」と

最後のファイルがクリックされた。

都内の有名料亭の一室の映像であった。

先ほどまでの異常な顔でなく、市長の顔に戻り死角にいる人物と談笑していた。

「いやあ〜福岡の田舎モンなんて、簡単にコロつと騙せましたよ。

先ずは、予定通りにどこかの大手企業を1〜2社誘致したら、ミレニウム・フューチャー製薬の国内最大の工場を誘致します。

いきなりは、批判が帝国・未来ホールディングスに集中するといけませんからね。

社長はそれまでに、中国と詳細を詰めていただければ。
簡単に細菌兵器の開発と言いましてもね。」

ブチン！と画像が切られた。

恐る恐る、画面から目を離しアスカの方を見る横山。

アスカは、腰に両手あてて、投げ捨てるように一声、言い放った。

「ウ コまみれの変態くうくん。」

ウ コだけなら、見逃してあげてもいいけどね。

中国と細菌兵器は駄目よねえ。

国家反逆罪になっちゃうよ。」

一生逆らうことは出来ないと悟った横山は、大きく頭を垂れた。

「扉を出たところに矢吹^{やぶき}っておっさんが居てるわ。」

この瞬間から、アンタは矢吹に従ってもらうわ。福岡に戻ったら、秘書は全部首にしてね。

取り敢えず、矢吹がついていれば、身の安全は大丈夫よ。」

裏切ったら、今の映像ファイルは、ファイル交換ソフトで、ネットに流すからねえ。」

で…あんたの首は、ア・タ・シ・が取りに行くからねえ。」

シツシツと犬を追い払う仕草で横山を追い払いながら、アスカは舌なめずりをしていた。

(小心者は裏切る可能性が高いから、楽しみだなあ。)

第19話 番外編 横山 陥落（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしています。

第20話 伊集院 剛 6日前 ? (前書き)

なかなか話しが前進しないですが、しばしお付き合い下さいませ。

第20話 伊集院 剛 6日前？

「さて、お集まりの皆さん。心して下さい。」

神妙な顔で伊集院は切り出した。

「ちょ・ちよと待って下さい。」

西郷が焦り気味に発言し遠慮気味に続けた。

「少しいいですか？

参加者はこれだけですか。」

伊集院は無言で頷いた。

「伊集院さん。

姫山防衛長官。

織田陸将補。

上岡知事。

野口さん。

あと…伊集院さんの部下の方？……

えっ？えっくえ？げ・源五郎丸外事1課長？ですか？

それで……さつきから私の死角にはかり位置してたんですね？

おかしいと思ってたんですよ。

絶対に顔を見せようとしなから

源五郎丸がニヤリと、人差し指と中指を立てて右の目頭にあててふざけたように敬礼をした。

「なんだ、西郷君も含めて、皆顔見知りじゃないか！

で何か問題があるのかね？西郷君。」

不思議そうに伊集院が尋ねた。

「いえ。顔見知りとかの問題じゃないんですが……

お集まりの皆さんですが…

織田さんには姫山長官。

野口さんには上岡知事。

源五郎丸さんには伊集院さん。

と言った具合に、命令権者がいらっしやいますか……

私だけ、警察官として単独で参加しなきゃならないんですか？」

困惑したように、西郷は姫山と源五郎丸を見て助けを求めた。

「県警本部長への命令権は、上岡君。知事の君じゃないのか？」

伊集院は上岡を見ながら尋ねた。

「いえ、残念ながらよく誤解されますが……違います。

体的には、野口さんの公安委員会が管理していることになっていますが……

実際の指揮命令権者は警察庁です。

多分、アメリカのＴＶドラマの影響でしょうね。

県知事は、単なる給与支払権者です。

今回のお話しがどのような内容かが把握出来ないの……一概には言い切れませんが、西郷君の立場からいけば、管区警察や警察庁にお伺いを立てないと動けない状況と推測出来ます。

ましてや、西郷君を含めて警視正以上は地方警務官と言い、任免権は……国家公安委員会ですし給与も国庫からです。

そこらへんのことは姫山さんが一番詳しいとおもいます。……

差し置いて、失礼しました。」

上岡は、姫山の方に軽く頭を下げながら説明した。

「先輩。抜かりました。内容に気が取られてて……そこまで気が回リませんでした。」

確かに、西郷君の立場なら、管区警察局か長官に相談しないと動くに動けないですわ。」

頭をボリボリとかきむしりながら、片手で真っ赤に充血した眼の目を押さえながら、姫山が答えた。

会議を始める前から、小さな問題が山積みつてことか！

官僚的縦組織の弊害だな。しかし、俺もアメリカの刑事ドラマに影響されてたんだなあ。

伊集院は、心の中で毒づきながら源五郎丸の方を見て

「警察庁を介入させると官僚事になって計画に大きな狂いが出ると思っただか、君の意見は？」

そもそも、君なら最初からわかっていたはずだよな？

今まで、黙ってたところを見ると、何か策があるのか？」

「確かに社長のおっしゃる通りです。

最悪のシナリオで想定した場合を考えるとこの点だけは、その場で可及的緊急処置でムリムリで乗り切るしかないと思われまます。

それを事前に準備するんですから……誰かが、泥水をすすするしかないですね。」

最悪の想定の意味がわからなくても、誰が、泥水をすすする役を押し付けられたかは、全員が瞬時に理解した。

「社長。西郷君の年齢と階級はご存知ですか？」

唐突に源五郎丸が全員の思考を断ち切るように質問を始めた。

「西郷！お前の年と階級を社長に説明しろ。」

「説明たって……言われても……」

34歳で警視長つすけど。

俺、まだまだ若いんですよね。

結婚もまだなんすよ。

正直、泥水はすすりたくないっす。

冷や水くったキャリア警察官なんて……再就職の口ないっすからね。

「

それなりに親しい間柄なのであろう。源五郎丸の先輩面した言いぐさに、西郷はまんまと引つかかって会話に引きずり込まれていた。

「ね！社長。

こいつ、拝命して僅か10年で、上は監と総監つてところまで登ってるんです。

しかも、10年間で8枚も始末書を書いててです。」

多少芝居がかつた口調だが、西郷が稀にみる出世をしていることは明らかにになった。

「警視長で、福岡県警本部長？ 福岡は大規模県警なんだから通常は警視監が本部長ではなかったか？」

よほど、警察庁で期待されてるみたいだな！」

伸びた顎髭をさすりながら、姫山が唸った。

「はあ、期待されてんのか？ 追い出されたのかは微妙なんですが…

…」

今度は西郷が頭をボリボリ掻きながら返事をした。

「お前さんは将来、警視總監も夢じゃないくらい期待されておるわい！」

その、短気とお気楽なところを治して、素直にワシの助言に耳を傾けて、老兵の知識を吸収する努力をすればな……………
じゃがな、今回のコレを乗り切らんことには、どうしようもないよ
うな気がするがのう。」

横合いから野口がチャチャを入れてきたが、元東京地検 特捜部長
も西郷に対して高い評価をしていた。

西郷君には申し訳ないがそれだけ高い評価を得ているんなら、もし
無事済んだ場合、姫山君や真弓君からの口添えでなんとかなるだろ
う。

まあ、うちで引き取るというのも一考かもしれんな。

伊集院は楽観的な思いを振り払いながら

「西郷君の置かれている状況は充分にわかった。
それを踏まえ、今から『ある』物をお見せするので、どうするかは、
皆さん個人個人の判断にお任せする。」

源五郎丸君。」

「では、今から数分間。ある映像をご覧くださいます。」

質問などは、見終えた後にまとめて伺いますので……………

映像はハンディカムクラスで撮影された物なので、多少見にくいか
もしれません。」

言語はすべて英語ですので……………」

説明がおわるや否や、室内の証明が落とされて、壁の一部が左右に開き、大型の液晶パネルがあらわれた。

鮮やかなブルーバックの画面が一瞬乱れたかと思っただ途端に

天井らしき物が映り、数発の銃声と怒声や悲鳴や混乱した人々の声が入り混じった乱れた映像が現れた。

それは、戦争映画のワンシーンに想える映像であった。

『怒声・悲鳴、無数の銃声。』

銃声は？拳銃じゃあないな？自動小銃か？ならば軍隊か？
内乱制圧？犯罪組織への強襲？』

西郷は瞬時に眼から入力された映像を無意識に分析していた。

《映像の音声は英語ですが…和訳です》（筆者）

「少尉！ハンセンが殺られた！

南西のブロックの角からわんさか出てくる！

誰か寄越して下さい！」

「もちこたえろ！こっちも、ドリー・テリー・アンドレ・キッドが
殺られた。」

「こちらシティ（作戦中コールサイン＝本部）
チャリー、ブラボーと連絡が途絶えている。」

アルファから2分隊を探索に出せ！」

「こちら、アルファ。無理です。奴らが多すぎて、防戦で手一杯です。既に半数が殺られてます。」

「デルタのマリオだ！問題の研究室で、『例の物』を確保した。同時に研究助手も確保。退却するから、援護を頼む。大至急だ！」

「シテイだ。研究所の北北東1キロのところに、開けた公園がある。そこにブラックホークを2機向かわせる。そこまで来れるか？」

「マリオだ！こちらはまだ無傷で4名居てる！何とかするから、必ず寄越してくれ！15分で行く。」

「少尉！ドアを突破されました。2階に避難、ウアー、止める！止める！離せ……」

バン・バンと拳銃音が鳴り響いた。

画面が慌ただしく動き、天井から室内に変わった。どうやら、少尉のヘルメットにカメラが設定されており、ヘルメットを被り直したようだ。

映し出された、まさにその瞬間に部屋のドアが開き、血だらけで顔の半分が裂けた人間が、右手を前に延ばしつつ、フラフラと歩み寄ってきた、左手は肩の下辺りから無くなっていた。

「Shit!」

少尉はM4カービンを、入ってきたそれに向けて引き金を引いた。飛び出した弾丸は、額に小さな穴を穿つたと同時にそれは床に崩れ落ちた。

しかし、同じような、普通であれば死んでいておかしくない傷を負った、人間が次から次へと部屋の中に殺到してきた。

動きは早くないどころか、かなり緩慢なため、少尉は次々にその頭を打ちぬいていたが、カチンと引き金が空撃ちし、銃弾が尽きた。

M4の弾倉が映し出された。リロード（弾倉交換）をするために空になった弾倉が外れされた瞬間に、激しくもみ合う音が聞こえ、同時に、画像が激しく揺れ動き、高速で不規則に部屋のうちらこちらが映し出され、最後は壁の下がグルグルと映されて、やがて止まった。

そして悲鳴が聞こえ、止まったカメラの先には、ヘルメットの持ち主である少尉が仰向けに倒れており、彼が攻撃していた残りが数体覆い被さり、あるうことか少尉の身体にかじりつき、一心不乱にその肉を咀嚼していたのである。

ブツリと映像が止まり。

一同が啞然としているなか

「新手の映画のPRではありません。

1週間ほど前に、アメリカのユタ州で発生した、新手のウイルスが原因と思われる、バイオハザードで現実に起こった作戦行動です。

米統合特殊作戦軍から

レンジャー2個中隊。

デルタ（特殊部隊）2個分隊を派遣。作戦行動から6時間後に80%の隊員が罹患し、他地域にアウトブレイクの可能性が極めて高くなり……………

アメリカ空軍機と陸軍ヘリコプターで空爆。

翌未明から

デルタ1個中隊

SEALS4個小隊で

破壊出来なかった、地下地区を搜索し殲滅したとの事です。

地上部隊は、先に投入された558名の内デルタ2名と民間人1名が生還。

後続部隊は、地下で感染体約200と遭遇し、デルタから30名SEALSから20名が戦死しましたが感染体は殲滅したとの事です。

「

詳細は画面を見ていただければとパソコンを操作した。

「人口はどれ位の都市なんですか。」（西郷）

「約3000人の小さな街です。」（源五郎丸）

「警察は？アメリカならSWAT（警察特殊部隊）とかなかったんですか？」（西郷）

「50名ほどの警察署だったので、軍が介入した際には全滅だったようだ」（源五郎丸）

「レンジャーとデルタにSEALS。が600名で押さえられなかったんですか」（織田）

「ご覧の通りです。」

街とその周辺の地図を出します。面積は約160K?です。」(源五郎丸)

「こんな小さなエリアで……僅か人口3000の住民と600人の精鋭部隊が半日で全滅と言うのか」(上岡)

「しかし、さっきの化け物は……映画とかと同じ『ゾンビ』とかいうやつか?」(野口)

「今のところ、映画の『ゾンビ』と同じと思って支障はないと思います。」

見事に映画の『ゾンビ』の特徴と一致します。

- 1・動きが遅い
- 2・人間離れた怪力
- 3・致命傷は頭部または頸椎のみ。

映像はまだ他にもありますが……気分を害されるようなものばかりです。」(源五郎丸)

「えーっと、2点確認させて下さい。」

映像の中で……聞き違いかもしれませんが『例の物』を回収したと言う兵士の声があったようですが、『例の物』ってなんですか?

それと、一番の疑問なんです……

1週間前の遠く離れたアメリカのユタ州の事件で何故?我々が?夜中にあんな特殊な方法を使って今日?ここに集め

られたんですか？

呼び出した方は一応民間人ですが

ここには、我々より先に防衛庁官と將軍？がいらした。

我々を案内したメンバーも道具も場所も自衛隊関係でした。

私達を何に巻き込むつもりですか？

伊集院社長？」（上岡）

「流石に元辣腕弁護士だな。

既に、集まってもらった皆は逃れられない運命なんだ。

知らぬ間に何事もなく過ぎ去るかもしれない……

知らぬ間に命を落とす災難にどっぷり浸かるかもしれない……

だが今なら、対策を立てられる可能性がある。

引き返したい奴は部屋から出ていってこれていい。

ただし、他言だけはするな。

さあ、10数える間に決めてくれ。

時間が惜しいんだ。」

第20話 伊集院 剛 6日前 ? (後書き)

ご意見・ご感想 お待ちしております

第21話 伊集院 剛 6日前？（前書き）

インフルエンザのくだりは、Wikipedia 引用（適当に作品にマッチするように変更してます）です。

なかなか 6日前から話しが進まずに申し訳ありません。

第21話 伊集院 剛 6日前？

「10・9・8・7・6・5・4・3・2・1・0……………」

カウントダウンが終わった後たつぷり10秒待って、伊集院は一同を見回し満足げに頷いた。

「ありがとうございます。信じていましたよ。」

「相変わらずじゃああなたは……………」

いつも微妙に核心は見せずに、喜ばしたり、不安にしたりして、次のカードを見たい気にさせよる。

上岡君の質問の核心には一つも答えておらん。

さて、皆、腹は決まったようじゃから、カードを見せて貰えるかな？

何故、我々なんじゃ？

我々？ではなく、福岡なのか？

たまたま福岡に我々がいただけなのか？

何故、今日なんじゃ？

『例の物』とは何んなん

じゃ？？」

野口が代表で疑問をぶつけた。

「焦らしてしまい、申し訳ありません。」

順を追って説明しよう。

惨劇は今ほどご覧いただいた通りだ。

始まりは、ユタ州のある科学者。

ご存知の通りこの冬は新型インフルエンザのパンデミックが噂されている。

さらに、新型は鳥インフルエンザウイルスからの変異で極めて毒性が高いと予想される。

ウイルス研究者や科学者は、この新型インフルエンザのワクチンを開発出来れば、地位と名声と金銭が手に入る。

しかし、ワクチンを作るには、発病させるウイルスが必要だ。

同時に、抗体を持つ実験体があれば、抗ウイルスの開発にさらに近づけることが出来る。

ユタの科学者が、何故、流行が噂される鳥インフルエンザの5N1Hではなく、過去のスペイン風邪で有名なH1N1亜種株を選択したのかは定かではないが、彼は奥方がボランティアで行っていた、野犬矯正施設に保護された野犬で実験を繰り返していたみたいだ。

これは、先ほどの兵士の連絡にあった、『例の物』を回収する付属として命令されていた、研究者のパソコンのハードディスクから再現された情報だから間違いはないだろう。

これは推測と、源五郎丸君からの受け売りだが……、インフルエンザウイルスはRNAウイルスであるため、突然変異率が高いと言われている。

RNAウイルスとはレトロウイルスとも呼ばれ、ゲノムRNAをいったん逆転写酵素によってDNAとしてコピーし、そのDNAから遺伝情報を読み出すタイプだそうだ。

で、この逆転写酵素の悪戯により、同じ宿主に2種類のインフルエンザ・ウイルスが感染した場合、

ウイルス・ゲノムが分割される際に遺伝子の再集合が起こる時に、遺伝子組み換えが起こることがあり、

これにより、病原性のなかった亜種がヒトに対して病原性を持つようになるらしい。

また、ある種の動物にのみ感染するという選択性は、主にウイルスが持っているヘマグルチニンの種類によって決まり、

ヘマグルチニンのアミノ酸配列が1つでも変化すると、標的細胞への感染能力に大きな変化が起こるそうだ。

ヘマグルチニンとは、ウイルスの表面上に存在する抗原性糖タンパク質で、このヘマグルチニンの働きによってウイルスは細胞に感染するらしい。

話しは少し代わるが、犬インフルエンザは馬インフルエンザの原因となるH3N8亜型のようなA型インフルエンザウイルスの、いくつかの亜型を原因とし発生したと2004年に報告されている。

そこから見て、研究者はヘマグルチニンのアミノ酸配列を操作し、宿主を変えながら逆転写酵素の悪戯がA型のH1N1に起こるまで何度も実験を繰り返したと考えられるそうだ。

で、肝心の『例の物』とは……………

彼が見つけたしたウイルスだ。

正確に言えば、彼が培養していた《H1N1亜種株》なんだが。

しかし、回収はしたが、どうも、当日か前日の作業記録を入力後に偶然に変異したウイルスの可能性が高いらしい。

こいつは、その日1日の結果をまとめて夜間に記録していたうえ、かなりの記憶力の持ち主らしく、メモ類は一切取ってないらしい。

ハードディスクを回収する際に、研究者の助手が救出され、彼の意識がはつきりしている間の話であり、ハードディスクの物理的な情報も同日の未明に最後の記録があることから、間違いないと判断されている。」

一気に説明した伊集院は喉の渴きを癒やすために、一口お茶を啜った。

「続けてもいいかな？」

これだけなら、大した問題ではないんだが……………

実は、保護された助手が感染しており、保護先の施設内で発症した。保護された折りに、複数の引っかき傷と、歯形の後があったことを、デルタの隊員が気づいていて、ヘリコプターが安全地区に入ったところで2名の隊員の命と交換に拘束に成功したそうだ。」

伊集院は、一旦、言葉を切り全員の顔を真剣に見回しながらこれからは本番だとわかるように、少し大きめな声でゆっくりと語りだした。

「つまり『ゾンビ』が1体、拘束された状態で存在すると言ったのだ。」

その拘束された『ゾンビ』が……

明日か、遅くとも明後日には……

福岡の《 柊 研究所》に運び込まれる。」

「そ・そんな！馬鹿げたこと……政府は認めたんですか！！」

声を震わせ、上岡が椅子から立ち上がり、姫山防衛庁官に掴みかけらんばかりの勢いで迫った。

「上岡くん!!」

信じられないほどの怒気を含んだ、伊集院の声が飛び、一瞬上岡はたじろいたが、今度は、伊集院をキツと睨みつけた。

「許せません！直ぐにでも、総理に会って止めさせます。」

駄目なら、マスコミに発表します。

源五郎丸さん！邪魔をしないで下さい。」

扉に向かい歩き始めた上岡の腕を源五郎丸が掴んでいた。

「上岡さん、落ち着いて下さい。

別に止めるつもりはありませんよ。

ただ、最後まで社長の説明はお聞きになられた方がいいと思いますよ。」

何故、民間人の社長が皆さんにご足労いただいたと思います？」

「上岡君。憤慨する気持ちは僕も一緒じゃ！」

しかし、徒手空拳ではのお。

このさいじゃから、暫く、伊集院君の話しを聞いたところで損はないかと思うのじゃがのお。」

何とかその場は野口が納め、伊集院の説明は続けられた。

「上岡君、私も君と思いは一緒だ。

続けるぞ。

俺は、感染力の福岡への移送の件の情報はさる政府要人……

今更隠してもしかたないか、……真弓官房長官から受け取った。

多分、彼が防衛長官自体のコネクションだろう。

彼の意見では、彼から私に情報がもたらされ、私が動くことを意図しているのではないかと言っている。

これは、真弓君の想像通りだった。

アメリカの大統領補佐官を電話で吊し挙げたら白状した。

時を同じくして、そこにいる姫山君も、アメリカ軍司令官から情報を得たらしい。

情報というより、未来の生物を横取りされた腹いせの連絡だったらしいが……

何故、私であるかの説明が必要だな。

御子柴 貴子と言う女性がいた。

彼女は、幼くして母を亡くした俺の育ての母であり叔母だった。

俺が大学に進級した年に自分の役目は終わった、これからは自分の道を歩き始めると言い結婚した。

その相手が……

蔵前 振一郎。だ。

結婚して10年が過ぎようとした頃に、叔母の身体に異変が起こり、1年と持たずに亡くなってしまった。

叔母が亡くなって暫くして、蔵前さんは面舞台から身を引き、その後には皆さんのご存知の通りだ。

フィクサー

黒幕

平成の黒い黄門さま

世界一の金持ちで世界一のケチ

何通りの呼び名があるかは知らんが……

大層な悪役と呼ばれているな。

俺も、ここ10年ほど会っていない。

その蔵前さん

いや、蔵前翁と言うのが一番適しているかな？

蔵前翁が、『ゾンビ』を手に入れるために、持てる力をすべて解放したんだ。

こうなったら、アメリカの大統領でも阻止は出来ないな。

そこで、同族人でかつ身内の俺に、思いとどまらせる役を押し付けてきたんだろう。

そんな簡単なことでいいのなら、百だろつが千だろつが、電話ぐらい何度でもするんだが

深夜からさつきまで、かれこれ50回は蔵前翁にかけてみた。

一応、身内だけが知っている番号。

源五郎丸君が把握している番号。

もちろん、非合法と言われるが……会社のデータベースも全部調べ尽くしたが……

駄目なんだ。繋がらないんじゃなく、回線自体が解約されているんだ。

唯一、源五郎丸君が、探ってくれた携帯電話の番号だけが生きていたが……」

頭を振り、手を振り、最後にはお手上げのポーズで伊集院の話しは終わった。

「伊集院君、何故？蔵前翁は『ゾンビ』なんぞに興味を示しているんだ？

まさか、細菌兵器だの世紀末創設だの

世迷い言ではあるまいな？」

「野口先生……」

「先生は止めると言っておるじゃろうが！儂はもう単なる爺じゃよ
言いにくそうに源五郎丸が助け舟をだした。

「私の方からご説明差し上げましょうか？
あの話しはあくまでも仮説の一つでしかありませんし……」

伊集院は源五郎丸に対して軽く頷いた。

「蔵前翁と御子柴貴子さんは、俗に言われる政略や後妻などと言う物ではなく、極々、一般人と同じような恋愛結婚だったそうです。

お二人とも初婚でした。非常に仲がよろしかったと財界では有名だったそうです。

蔵前翁には、その膨大な『財』目当てに近寄る者が多く、騙され続けており非常に人付き合いが悪くなっていた頃だそうです。貴子さんと一緒になられてからは、打って変わって元々の明るい人物に戻られたそうです。

伊集院社長も、貴子さんが育てられたお子さんと言うことと優秀な人物であったことから、執拗に後継ぎとしてアプローチがあったみたいです。

今の評判と180度違いますか……

非常に純粋な方だったんでしょう。

本題に入りますが……その純粋さが、貴子夫人を失うことにより変化があったと思われれます。

夫人を愛するが故に、夫人のご遺体を茶毘に伏さずに、冷凍保存されたのです。

さらに、厳密に言えば、もう数時間も保たないと言う時に冷凍保存に踏み切られました。ようは生きている時点で冷凍したと言うこと

です。

当日、学界では異端児として相手にされていなかった。

ロシアのウラジミール博士に膨大な研究施設を用意したフシがあります。

後年、博士の冷凍保存方法は、冷凍精子や卵子の基本技術の元になりましたので……、有効的な処置であった可能性があります。

それから蔵前翁は、蘇^{よみがえり}りや不老不死の研究に莫大な私財をつぎ込まれてます。

流石に、世界的な経営者だけあって、怪しげでも研究には投資されてますが、眉唾ものの、カルト宗教や呪術など否科学的なことには一切関わっていません。

今回の『ゾンビ』も蘇るプロセスの解明ではないかと推測しています。

柊 博士は遺伝子工学やウイルス研究の世界的な第一人者ですし、それ以外にも、

同分野の遠藤 毅郎博士

岡田 雅之博士

キャサリン バース博士
など、金に糸目をつけずに世界中の研究施設や大学からヘッドハンティングしています。」

「愛する妻を蘇らせるために、『ゾンビ』を国内に持ち込むと言っ
ことですか？」

間違ってる！狂ってる！」

「確かに、狂っているんだろう。」

でも、誰にも阻止することが出来ないんだ。

補佐官も手をこまねいていただけではなく、FBIに細菌テロと言
う口実で、入手した情報を分析し輸送ルートをHRT（人質対応部
隊）に強襲させたが、同士にアメリカ軍司令官の指示で動いていた
陸軍にも、同じ情報が流さずして派遣したデルタ分遣隊と同士討ち
になったそうだ。

その後、蔵前翁から大統領に、これ以上介入した場合は、2日以内
にダウ平均を35%下げる分の株を世界中の取引所に流す。と脅し
が入り、香港で一部が実際に売りに出されたそうだ。

アメリカが情報戦で完全に出し抜かれている理由なんだが……

源五郎丸君の調べでわかったんだが、アメリカやイギリスやロシア
の頑固者であるが故に冷遇されていた腕利きの情報員だの諜報員だ
のが10数名、所在がわからないらしい。

十中八九、翁にスカウトされたと思われる。

我々も上手く立ち回らないと、翁の組織にいいようにあしらわれる
だけになるんだ。」

第21話 伊集院 剛 6日前 ? (後書き)

ご意見・ご感想 お待ちしています。

第22話 伊集院 剛 6日前 ? (前書き)

なかなか 更新が出来ずに申し訳ありません。
どんだん話しが深みにはまって行きそうで……
自分でも困ってます。

気長にお付き合い下さい。

第22話 伊集院 剛 6日前？

「現時点で、この件に関しては我々が最も詳しい状況にある。

悲しいかな、政府や国の情報機関をひっくるめて僅かにここにいる8名……と官房長官の9名。

いや、正確に言えば源五郎丸君の部下で何名かいるが……

アメリカがあてにならない上に、国内でもこれ以上情報が拡大したら、対策をうつどころか、対策すると言う選択肢を説明し納得させるのに、必用以上のパワーを裂くことになる。」

伊集院は、全員が話しの内容を整理出来たかを探るように見渡した。

「ECや中国、ロシアはどうなんですか？」

裏の世界で名だたる、イギリスやロシア、ましてや中国が掴んでいないはずがないと確信を持って、西郷が尋ねた。

源五郎丸がパソコンを操作しながら

「画面を見ていただけますか。」

画面には、現時点での情報の相関図が記されていた。

「なるほど、日米は関係者と言える者達で、噂をEC圏とロシア、中国、北朝鮮、韓国が嗅ぎ回っておるんじゃないな。

若干イギリスがリードといったところか……

しかし、世界最大手のロイズ保険とEC最大手の製薬会社のユニバ

「サル・サイエンスケミカル？は何故なんじゃ？」

野口が目を細めて画面を見ながら質問をすると、画面が切り替わった。

「ほ、ほうー。」

ロイズのタウンゼントの馬鹿者が、蔵前翁を巻き込んだのじゃな！そんなことをしても、あの油田事故は…後数ヶ月は治まらんじやろ。蔵前翁が介入したとしてもタウンゼントは破産しかないじやろうに。はて？流石の半蔵もユニバーサル・サイエンスケミカルはお手上げかのお？」

納得した顔で、野口は源五郎丸をに顔を向けた。

「はい。残念ながら……………」

源五郎丸は首をすくめて降参のポーズをとった。

「確か、この製薬会社には、ドイツ連邦情報局（BND）の元長官のゲルト・マイア・君がおらんかったかのお？」

半蔵にとっては、今の自分があるのもマイア君のお陰じゃしな。恩師の方が一枚上かのお？」

顔と声は笑っているが、眼光だけは鋭く画面から離さずに野口は言った。

「はい。今回ばかりは分が悪いです。」

この時点でのマイアの介入もさることながら……………」

源五郎丸が言葉に詰まった。

「これ以上、悪いことなんて、そうはないように思いますよ……………先

輩」

西郷が気をつかい源五郎丸に声をかけた。

「源五郎丸君が話し辛いことみたいなので、俺から説明しよう。

野口さんみたいに、源五郎丸君の公僕時代を知っているわけではないので詳細なところは省かせてもらうが、元々、蔵前翁の『蘇り』や『不老不死』については、かなり怪しげな研究者や団体に資金が流れていたそうだ。本来、会社とは完全に無関係なことなんだが……まあ、俺の親族と言うことや財界・政界への影響力が高いと言うこともあり、蔵前翁が暴走しないように、源五郎丸君の判断で密かに監視および適当な妨害を行っていたらしいんだ。

ここ2年に渡る妨害だったが、流石に素人の翁も気がつき始めたらしく。それなりに対策をうってきたらしいが所詮は素人。源五郎丸君の方で騙された不利をしながらも、ポイント、ポイントで妨害を続けたいらしい。

しかし、4ヶ月前から状況が一変した……

妨害工作が頻繁に裏をかかれる様になり、とうとう先月、一番阻止したかったキャサリン・バース博士の加入を許してしまったんだ。

その頃にやっと、翁の側についた軍師が判明した。

名前はホアン・チャン。アメリカ国籍のベトナム系中国人だ。」

「ホアン・チャン!? ホアン? …… あっ …… !

半蔵の兄弟子じゃったホアンか?

そうそう、ベトナムからの難民ながら、ハーバードからFBIに入って、マイアー君のところに研修で来ておった! 彼かあ。

そりゃ、半蔵も分が悪いわのお。」

野口はさも面白そうに続けた。

「ホアン君と半蔵は確か、2つ違いじゃったかのお。半蔵。お前は幾つになった。」

「37です。それと、自分には拓也たくやと言う親から貰った立派な名前があるんですが……。いい加減に半蔵は止めて貰えないもんでしようか。」

無駄だとは思いつつも、苦笑しながら源五郎丸が野口に頼みこんだ。

「だめじゃな。単なる情報屋なら本名で読んでやってもいいが……。あの事件以来のお前さんはまさしく、服部半蔵気取りじゃからのお。まあ、気持ちは分からんでもないが……」

いまだに、さっきの嬢ちゃんみたいな別嬪さんを手元に置いているようじゃのお。」

意味ありげに源五郎丸の願いは一笑にふされた。

「脱線してしまったのお。マイアー君から聞いた話しじゃ、二人は彼の弟子の中でも最上位だそうじゃ。」

『静のホアン』に『動のゲン』

二人で、マイアー君がてこずってたネオナチ一番の過激派グループのラインハルト一派を殲滅して、ネオナチを壊滅状態にしたんじやからのお。

半蔵にとっては、実の兄以上の存在じゃったからのお。

はて？何故、ホアン君が蔵前翁の元にいとるんじや？」

「ホアンは……」

結婚したんですが、子供には恵まれませんでした。どうも、原因は彼の難民時代にあったようで……。結局、里親として3人の子供を引

き取って育てていたんです。

1年程前に、長女のリーシェちゃんが原因不明の病気で倒れ、3ヶ月後に意識不明の植物状態になったんです。

しかも、入院していた病院は偶然にも翁の配下の病院でした。

もちろん、この病院も翁の大事な研究施設の一つでした。

本当の理由はわかりません。

膨大な医療費に困っていたホアンを翁が引き入れたと見るのが最も落ち着きますが……

俺のカンでは、翁の蘇りや不老不死の研究結果で自分の娘を助けようとして、翁を利用してるんだと思います。金だけで、ホアンがFBIを捨てるとは思えないですからね。」

残念そうに声を絞り出して源五郎丸は答えた。

「すみません！段々と話しがズレて行ってるような気がするんですが……伊集院さんには何か『策』があつて、我々を集めたんではないんですか？さつさと、本題に入っただけませんか？

それ次第では、僕は僕なりに判断しないと行けないことがありますんで。」

上岡が、ピシヤリと言いつつ放った。

「そつだな。あらかたの登場人物もできつたみたいだからそろそろ本題に行こうか。」

源五郎丸君、例のスライドの用意をしておいてくれ。」

「さて、問題をはつきりさせようじゃないか。」

1・2日以内に『ゾンビ』が福岡市内に運びこまれる。しかし、現時点では誰にも止める手立てがない」

「ちょ・ちょと待つて下さい。
未知の病原体を国内に持ち込んだから、何らかの法律なりで、規制が出来るでしょ？」

上岡が異議を唱えた。

「通常の相手ならな。

しかし今回の相手は、あの蔵前翁だぞ。しかも、ブレインのホアンはアメリカの情報機関さえ、手玉に取る強者だ。翁は既に大統領に脅しをかけているんだ。

どういうことか分かるかな？」

上岡が困った顔をして、西郷や野口に助けを求めるように視線を投げた。

「そのところは私が説明した方がいいみたいですね。」

姫山が会話に割って入ってきた。

「アメリカ軍は、陸・海・空軍に海兵隊・沿岸警備隊と5軍編成になってます。その中でも海兵隊は、海外での武力行使を前提とし、緊急展開部隊として行動し大統領の勅命で作戦行動を行うことが出来る上に、議会にも事後承諾でいいんです。」

（数年前までの定説でだったようですが…誤訳であると言うのが現在の見解だそうです、物語的に都合が良いので…利用しました。）

「つまり、大統領は海兵隊なら自由に派遣出来ると言う訳ですか？」

上岡が、そんな馬鹿な！という顔をしながら続けた。

「まるで、大統領個人の軍隊みたいじゃないですか！」

「まあまあ、上岡知事。そうカリカリされんで下さい。法的な解釈などはさて置いて、事実、アメリカ軍の海兵隊ルートで日本に向かっているんです。」

先ほど、私のところへアメリカ軍司令官が嫌みの連絡があったと話が出たでしょ!?

軍司令官の頭越しに大統領から海兵隊に指示が出てて、海兵隊も大統領名を笠に着てやりたい放題の無理難題を空軍・海軍の輸送部隊に押し付けてるみたいです。」

少なくとも、海・空で延べ20程のカモフラージュした輸送作戦が繰り広げられています。」

先ほど、源五郎丸君とも検討したんですが、急に明後日に呉にブルーリッジ（揚陸指揮艦・第7艦隊旗艦）が表敬寄港なのですが、我々の認識ではブルーリッジは沖縄沖で訓練作戦中だったはずなので。」

本土から空軍機でフィリピンに、そこからは、海軍か海兵隊の輸送機が大型ヘリで沖縄に、そこでブルーリッジへと思われれます。途中で福岡にヘリで運び込むつもりのようなのです。」

何かを言いたそうにしている、上岡を手で制止ながら、姫山は源五郎丸に目配せをした。

画面は切り替わり、左反面に簡単な組織図、右反面に九州と沖縄の地図が表示された。

「検討している案はこの通りです。基本的に、米海兵隊に主導権

を渡さずに、自衛隊を中心に警備体制を取ります。

幸いに、九州には対「北」の部隊として、西部方面普通科連隊（W Air）や津島警備隊が駐屯しています。

自衛隊内では、レンジャー資格保有者の多い部隊ですが、流石に米軍のデルタみたいにはいかないでしようが、今回は起こり得る事態が事前に予測出来るので万全の体制を敷くことが可能かと考えています。

手薄になった場所と、中国や北朝鮮には、第7艦隊の緊急演出か何かの口実で展開させて牽制します。

遅からず、中国や北朝鮮も情報を掴むことでしょうし……」

姫山は言い終わり、質問を待った。

「終研究所に駐在する自衛隊の数ですが2個小隊と記載されていますが、何名位なんですか？」

「今回は任務の特殊性から、1班7名。1分隊が2班で14名。1小隊を4分隊で56名で編成します。

2個小隊ですので、112名。これに、特殊作戦群の第3科（作戦立案、部隊運用）より管理部隊として1分隊、14名。合計126名です。

この内、警備や実戦には西部方面普通科連隊の隊員を中心とした6分隊（86名）が24時間体制で研究所内を警備します。」

「なるほど。で、私が呼ばれた理由が分からないのですが、警察は何をすればいいんですか？」

西郷が、困惑気味に質問をした。

「西郷は、福岡県警の前の所属は、警視庁のSAT（警視庁特殊部隊）の管理官だったな」

源五郎丸の質問に『ハッ』とし西郷は、伊集院と源五郎丸の顔を交互に見つめた。

「福岡県内でのSATの出動の場合は、本部長の指揮下に入る。という事を言いたいんですね。」

「ついでに、福岡の1班だけでは物足りないので警視庁のSATからも応援させろという事ですか？」

「せいかりい！。流石は西郷くん。SATと2班と銃器対策課、機動隊で警察としての緊急部隊を組織してほしいんだ。」

源五郎丸はPCを操作し、次の画面を写しだした。

「SAT2班と銃器対策課と機動隊で、この範囲を警備ですか？九州管区の機動隊総員でも400名（連隊規模）です。」

県警本部の第1機動隊の総員135名では全然足りませんよ。交替勤務のことも考えないといけませんし

警視庁のSATからも、どうやって1班を福岡に連れてくるんですか？

それより、警察はかまいませんが。

平時に自衛官が武装して県内で活動する事についてはどうするんですか？下手すると、野党の星野さんあたりが騒ぎ出しかねませんよ？」

「警察庁、警視庁、国家公安委員会は僕たちに任せてもらえばいい。」

僕も、元警察庁長官だし、今の、長官や警視総監、国家公安委員長も全員伊集院派だから、問題はないよ。」

姫山は任せると言わんばかりにグツと立てた親指を突き出した。

「自衛隊の武装での警備については、『治安出動』と『国民保護等派遣』で行くつもりだ。」

伊集院が全員に言い切った。

「『治安出動!』……………」

それがどれほどの意味を持つのか分かっているのじゃろっな?

伊集院君! 大変な決断じゃぞい!」

凜として野口の言葉が室内に響いた。

第22話 伊集院 剛 6日前 ? (後書き)

ご意見・ご感想 お待ちしています

第23話 伊集院 剛 6日前 ? (前書き)

相変わらず、なかなか先に進みませんが、お付き合いのほど 宜しく
お願いします。

第23話 伊集院 剛 6日前 ?

「まずは、国民保護等派遣で口火を切り、自衛隊および警察の特殊部隊を召集する。」

この国民保護等派遣において自衛隊が果たす役割として、非難誘導、食料および飲料水などの物資の供給、医療活動など多岐に渡っているが、その中でも、NBC汚染対処、汚染除去なども想定されているんだ。

釈迦に説法かも知れないが、上岡君や野口先生にも知っていたかなければならないので、NBCとは、核(Nuclear)生物(Biological)、放射性物質(Radiological)を指している。

厳密には化学(Chemical)を含めてCBRNと言うのが現在の定説らしいが、日本ではNBCの中に生物・化学兵器と定義されている。

このNBC汚染対処および汚染除去を逆手にとって、汚染防止の目的で行こうと考えている。

国民保護等派遣での、自衛隊の権限は、警察官職務執行法の避難等の措置、犯罪の予防及び制止、立入、武器の使用の権限を行使する警察官相当の権限を行使できる事になっており、警察のSATなどの特殊部隊と同時に召集することで、自衛隊の通常の個人装備は利用出来ると思っている。」

<国民保護等派遣：改正自衛隊法第75条（国民保護法並びに自衛隊法の一部を改正した法律）により自衛隊に新たに加わった行動類型。>

「同時に、姫山君の方で『治安出動下命令前に行う情報収集』を発令してもらおう。」

＜改正自衛隊法 第79条の2：防衛大臣は、事態が緊迫し命令による治安出動命令が発せられること及び小銃、機関銃、砲、化学兵器、生物兵器その他その殺傷力がこれらに類する武器を所持した者による不法行為が行われることが予測される場合において、当該事態の状況の把握に資する情報の収集を行うため特別の必要があると認めるときは、国家公安委員会と協議の上、内閣総理大臣の承認を得て、武器を携行する自衛隊の部隊に当該者が所在すると見込まれる場所及びその近傍において当該情報の収集を行うことを命ずることができ（79条の2）。＞

「最終的には、こんなことは起こってはならないことなんだが、バイオハザードが発生した場合、すなわち『ゾンビ』による被害者が発生した場合、研究所内で鎮圧が可能であったとしても、アウトブレイクの可能性が0%ではないと判断して、即時に、『知事による要請による治安出動』を発令し、待機部隊を展開させる。厳密には発令を前提に部隊を配備するんだが……」

＜改正自衛隊法 第81条1項・2項：都道府県知事は、「治安維持上重大な事態につきやむを得ない必要があると認める場合」には、当該都道府県の都道府県公安委員会と協議の上、内閣総理大臣に対し、部隊等の出動を要請することができる（81条1項）。＞

内閣総理大臣は、都道府県知事による要請があり、「事態やむを得ないと認める場合」には、部隊等の出動を命ずることができる（同条2項）。＞

「但し、大きな問題点がある。」

治安出動は、それ自体が警察力のみでの治安維持が不可能となった場合と自衛隊法 第78条にされてる通り、文字通り警察機構の面子が丸つぶれになる。

過去、1960年代の学生運動や労働争議の際に、何度か治安出動の請願が地方議会で可決され、治安出動が検討されたことはある。

しかし、実際に治安出動が発令されたことは一度もない。破壊活動防止法と並んで、治安維持における「伝家の宝刀」と呼ばれている所以だ。

その「伝家の宝刀」を抜かねば……。

日本はゾンビ映画みたいな世界になってしまう。

また、もし治安出動が出されたら、国民の心には警察力の失墜と言う大きな傷が残るだろう。」

一気に伊集院は語った。

「治安出動。……………ですか。」西郷。

警察官にとって、戦時でもない時に治安出動が発令されるのは、断じて許されない事であった。

国家と国民の平和のために治安を預かっているのは警察なのだ。

それが、警察官と言う激務を支えている部分なのだ。

ましてや、自分は、全国28万人の警察官の中でも、ほんの一握りのキャリアなのだ。

その自分の志は決してブレてはいけないのだ。

しかし、西郷の心は迷っていた。

先ほどの映像である。

日本の警察や自衛隊などでは雲泥の差で実戦経験が高い、アメリカ軍が600名以上で抑えきれない事態を、県警レベルで抑えられるかなど、小学生にもわかる答えだ。

ましてや、日本の警官は通常は予備弾薬すら持たされていないように、実弾での射撃訓練も年に数度あれば良いほうである。

「西郷君。

警察官としての葛藤は理解出来るよ。

ただ、今の君には決断して貰うしかないんだ。

さつきも説明したように、警察庁長官や国家公安委員会は私が押さえる。最早、根回しの状態ではなく、動かないと行けないんだ。

君にが、福岡県警を一枚岩にしてもらいたいんだ。」

姫山が身体を乗り出して、西郷に息が届く程近くで力説した。

「しかし、しかしですよ。本当にアウトブレイクしたら……

警察どころか自衛隊でも、抑えるられないんじゃないんです？

西部方面普通科連隊や対馬警備隊の人数でどうやって福岡をカバーするんですか？

ねえ、野口さんから何か言っして下さいよ。」

西郷は野口に向かって、助けを求めた。

「たしかに、西郷君の言うことにも一理あるわな。

織田さんじゃったかな？

研究所内に、西部なんたら隊やレンジャーやらが警備すると言われとつたが……

アウトブレイクした場合の策はあるのかね？」

織田は、姫山、源五郎丸、伊集院と3名の顔を順番に見て、誰からも異議がないことを確認した。

「福岡駐屯地に第1空挺（約500名）を集め待機させます。

同じく駐屯地の元々のコア部隊、第19普通科連帯（通常時250名）も待機させます。

福岡市内には、未使用の公共施設を中心に西部方面普通科連隊（約200名）を配置し、対馬警備隊は、SATの装備品を装着して、臨時の警察の特殊部隊扱いで、県警本部か県庁に待機させます。

沿岸部には米軍の艦艇を一隻用意し、海兵隊3個中隊がフル装備で待機。

コタの生き残りのデルタも1個中隊で待機です。

山口県側も、九州にアクセス出来る場所、陸路はJR各線と関門橋と関門トンネルに30分以内に封鎖出来るエリアに部隊を待機させます。

港や海沿いは、海自のあぶくま型護衛艦に特別警備隊（SBU）を1小隊（2個班）16名体制で臨検体制をとらせます。

また、海上は手薄になりやすいので、海上保安庁の『はてるま型巡視船』2隻に特殊警備隊（SST）を配置し、海自の補佐に充てます。

更に、広島、安芸の第43普通科連隊、岡山、勝田の第13特科隊も即応体制で待機させます。

福岡の部隊についてですが、西郷さんと相談の上、対馬警備隊は別として、駐屯地の半数の部隊は警察と言つか、西郷さんの指揮下に入れるつもりです。

勿論、私も自衛隊側の責任者として、福岡の西部方面普通科連隊に随行します。

あと、北九州市にも特殊作戦群（約300名）を置きます。」

「北九州市と山口県側とに兵を配置するとはどういう事ですか。」

上岡が怪訝そうに質問した。

「はつきりと言いますと、感染体が抑えられなかった場合も想定して、本州への空路、陸路、海路を全て遮断し、感染を封じ込めるつもりです。」

織田は躊躇せずに言い切った。

「きゅ・九州を見捨てるのか！

そんな馬鹿な作戦に同意出来るか！

維新の時と同じように、政府はまたも九州を滅ぼそうというのか！」

上岡が慌ただしく立ち上り、今にも泣き出しそうな顔で叫んだ。

興奮した上岡の前にスッーと冷えたペットボトルが滑ってきた。

「知事。落ち着いて下さい。」

源五郎丸は、上岡がペットボトルに気づいた瞬間に声をかけた。

更に、怒声をあげようとした上岡はタイミングを外されてしまい。

言葉を飲み込むしかなかった。

「知事、誤解しないで下さい。福岡を、いや、九州を見捨てるんではありません。」

救い、感染を断ち切るために封鎖が必要なんです。

考えてみて下さい。密室同然の新幹線に感染体が1体でも、紛れ込んだらどうなります？

あっという間に車内に広がり、停車駅の広島や大阪で感染が広がり、その感染がまた、輸送機関でさらに遠方に拡大していくんです。

パンデミックが発生します。

本州に広がれば、九州を救うなど不可能です。

九州だから、感染を封じ込めて、救助出来る可能性があるんです。」

源五郎丸が一言・一言、かみしめるように説明した。

「しかし、しかしだよ。もし、もしも感染がアウトブレイクして、市民に被害が出たら……」

しかも、それを私は事前に知っているんだぞ！

市民にどんな顔で告げればいいんだ？

残念な結果になりました。とでも報告するのか！

そ、それより、さっきの映像をマスコミを使って、全世界に流せばいいじゃないか！

流石の、蔵前翁も全世界を敵には回せないだろう？

ねえ！野口さん……

なあ！西郷君！」

野口も西郷も一言も返せなかった。

二人は気づいたのである。翁、いや、ホアンの企みに。

「公開すれば、地下に潜られます。

最悪、都内、いや本州で研究が始まり、間違いがあつて、アウトブレイクしたら？」

日本国内どころか、飛行機や船舶に感染体が紛れたら、全世界に広がってしまいます。

どこに潜られたかわからなければ、誰も対策が打てなくなります。ましてや、ホアンが陣頭指揮を取ってるんです。」

源五郎丸の説明に反論が出来ずに、上岡は、ただただ、拳を血が滲むほど握りしめるしかなかった。

「福岡や九州を犠牲にはしないが、多少の痛みは覚悟しろ。と言うことじゃな？」

先ほど、大統領は脅しに負けたのかと思つちよつたが……流石にしたたかじやのう。脅されたふりじゃつたんじゃな？」

「そのベトナム難民から這い上がったホアンって人ですが。

そこまで。九州の人達を犠牲にすることすら躊躇しないほどの人物なんですか？」

西郷は、映し出された各部隊の配置図から目を離さずに、源五郎丸に尋ねた。

「非情ではあるかもしれないな。冷静に分析し最大の効果を考えるタイプの人物だ。

それと、ベトナム系中国人だが……ベトナム難民ではない。

公式には、アメリカ国内ではベトナム難民の方が都合がいいから訂正してないだけで、本当は、カンボジアで、クメール・ルージュ

の大虐殺から逃れたと本人に聞いたことがある。」

「クメール・ルージュの大虐殺から生き延びたんですか。

……まだ、ほんの子供の時代ですよね、時期的には……

つまり、ホアンの作戦に必要な条件とはこう言うことなんですね。

研究する場所は、海に囲まれた島国。

多国籍の人員が出入り出来る環境。

ある程度高い水準の現地人が確保、物資もですかね。出来るところ。つて条件ですか？

適合するのは、日本、イギリス、オーストラリア、ハワイぐらいですか？」

「その通りだ。西郷。

ただし、それだけでは70点だな。

研究を継続するには、南半球は気候が真逆だから除外だ。

国内諜報機関のしつかりしているところでは、研究が長引いた際に発見される可能性が高い。

同様に、国内に大規模なテロ対策部隊があれば、強襲される恐れがある。

つまり、ハワイ、オーストラリア、そして、イギリスもダメなんだ。

全ての条件が、日本を指しているんだ。

多分、最終的には、俺の存在かも知れないな。

ホアンが必要とする対策を、想定して寸分なく実施出来るのは俺だけだからな。

どんなに、翁に力があるうが、ホアンが知略家だろうが、一国の軍隊を自由には使えないからな。

しかも、今や民間人の俺をきっちり土俵にあげやがったしな。」

「全力を尽くして天命を待つしかないのじゃな。

上岡君、西郷君。

我々は後戻り出来ない船に、好もつが好まざろうが乗ってしまっておるみたいじゃ。

運命からは逃れられん。

儂で良ければ、煮るなり焼くなり、なんどでもしてくれればいいわい。

先の短い老いぼれじゃが、役にはたつじやろう。

上岡君、西郷君、儂でよければ変わりにどんな泥でも被ってやる。

踏み出すしかなさそうじゃぞ。」

福岡は？九州は？日本はパンデミックから逃れられるのか？

第23話 伊集院 剛 6日前 ? (後書き)

ご意見・ご意見 お待ちしています。

第24話 伊集院 剛 6日前 ? (前書き)

すみません。公私とも非常に忙しく、平均睡眠時間4時間で……
更新どころか執筆もまともに来ていない有り様です。

第24話 伊集院 剛 6日前？

圧倒的な事実と野口の発言によって、必然的に場は全員が容認した状態になった。

「俺と姫山君は今から、総理と官房長官に今の内容を伝え、協力させに行ってくる。」

その後、警察庁長官と国家公安委員長、警視總監にも協力させてくる。

皆さんは、ご苦労だが地元に戻られ用意を始めていただけないだろうか？

午後には国民義友党の星野さんに会って、脅し…いい、いや…協力を求めてくる。

源五郎丸ファイルのネタでお願いに行くから、断れば政治家生命を絶たれるんだから、心配しないでいただきたい。

それと、マスコミの重鎮の年寄りにも色々と耳打ちに回らないとな。

「

「あつ！ぶ、部下になんと説明すれば……」

上岡は決断がつかず、説明出来るはずがないのを承知で無理難題と思われる要求をした。

「上岡さん、一応私の方でシナリオは用意していますので、ご安心下さい。」

この中に入っております。

疑問などありましたら、書類に記載されている番号に連絡頂ければ計画立案チームの者に直通で繋がりますんで…

野口さんと西郷にも。」

源五郎丸が3人に無造作にアタツシユケースを手渡した。

上岡は泣きそうな顔で震える手を必死に押さえながらアタツシユケースを受け取った。

「皆さんの警護。

まあ、まずホアン側が現時点で接触や妨害などしてくるはずはありませんが、無関係第三者や不慮の出来事が起こってもなんですので

……

織田さんのところから、特戦群のメンバー3名をつけてもらいます。

」

源五郎丸が織田に合図をしながら伝えたと同時にドアが開きスーツ姿の3名が入ってきた。

（自衛官？しかも特戦群って？どう見たってちょっと体格のいい、サラリーマンじゃないか？

いつから、自衛隊の隊員が身分を隠して民間で活動してたんだ？

たく！うち 警視庁 の公安の情報もしれたもんだな！）

訝しげに警官の目で3名を観察している西郷に対して

「西郷さんはご存知なかったかも知れませんが……

警察庁との合同のプロジェクトですね。

政府要人の紛争地帯への同行用のSP要員を自衛隊から出すことになり、その訓練の一環で警察庁に出向する前に自前で自衛官の匂いを消してるんです。

その一期生達です。

丁度1年を民間企業で過ごして、来月から警視庁で訓練の予定だっ

たんですが、源五郎丸さんからの要請で3名を引っこ抜いてきたんです。

警視庁での研修はまだですが、既にアメリカでシークレットサービスの基礎6週間の研修は済んでますし、警察手帳も交付された立派な警察官ですので、今回の任務には影響はないと考えています。

まあ、納得しろとは言いませんが…

この先、お互いが縄張り争いしても仕方ないと私は思いますがね」

織田が3名を紹介しながら説明した。

福岡行き旅客機の中…

手配されたゆつたりとしたファーストクラスの座席で3名は思い思いの姿勢で、源五郎丸から渡された資料を読んでいた。

（たった？これだけ？）

上岡はもう一度資料を確認したが、やはりシナリオと呼べる物はこの1枚だけであった。

1・複数のテロリスト組織がイデオロギーの垣根を超えて手を結び、世界規模でのバイオ（細菌）テロを計画しているとの情報がある。

2・細菌の種類や感染方法は不明。新たに開発された新種の細菌と思われる。

3・断片的な情報では試験的なエンデミック（地域流行）計画の後にバンデミック計画に移行すると思われる。

4・消息筋からの情報であり、政府として情報の信憑性を確認を急いでいる。

5・エンデミックという計画を信じれば、離島や島国での計画実施が懸念される。
6・管理職以上を対象に上記の説明を行うこと。また、職員としての守秘義務を再確認させること。（但し反発を招く程強い強制は行わないこと）

7・報道発表については現状では国民の不安を掻き立てるだけなので様子を見て発表するので、出来る限り口外はさせないこと。

8・この状態に対して、警察・海上保安庁などの法執行機関及び自衛隊で全国的な警戒活動を行う。特に、北海道、四国、九州は地理的条件が整っているので本州より高い警戒体制になる。

たったこれだけの8項目で？どうやって管理職を納得させるんだ？知事としては県職員だけじゃなく県議会に対しても対策をとらないいけないの？

あの五月蠅い議員達がこれで納得するはずがないじゃないか！

上岡は心の中で毒づきながらも、頭をかき乱し抱え込んでいた。

その上岡の体をフツと人影が覆った。

「失礼します。」

「考え事をしているんだ！邪魔しないで……」

相手に答えながら、顔を上げた。てっきり、キャビンアテンダント

だと思つていたところそこには、予想外に若い女性がニッコリと微笑んでいた。

（あつ！伊集院さんの秘書の娘！……でも少し雰囲気が違うけど、いや〜綺麗だ）

先ほどの会合場所に案内してくれたジャパンテレコム 秘書課のアスカ・D・ガードナー（デビルフェアリー）に瓜二つの女性であった。

口をポカンとあけている上岡に対して女性は少しムツとした怒りの表情を向けて一言

「アスカとお間違えではないでしょうね？私、ジャパンテレコムの戦略統合室 ヒトミ・E・ガードナーです。アスカは双子の妹ですので、お間違いなくお願いしたいですね。」

綺麗な顔に似合わず冷たい声色で言い放ちながら、上岡に断ることも無く横の座席に座り込んだ。

そして、大きな澄んだ声で遠慮することなく

「福岡空港までの間ですが、計画立案について質問があればお伺いしてお答えするように指示を受けていますので、質問などありましたら、何なりとどうぞ」

なるほどな、ファーストクラスに俺達だけとは不思議なもんだと思つていたけど、貸切みたいだな。しかし、双子って……一卵性か？全然違いがわからねえな。

西郷はふざけた様子でヒトミに手を振りながら愛想を振った後に野口に振り返った。

「野口さん。何だかわけのわからないことに巻き込まれていませんか？俺達？この先どうなるでしょう？」

野口は頭が痛むのかヒトミが現れて依頼ずっとコミカミを抑えながら、うつむいてボソボソと独り言を言っていた。

「どうしたんですか？野口さん？気分でも悪いんですか？何か飲み物でも用意させましょうか？」

あっ！君いゝ、何か冷たい物はないかな？」

笑顔で近づいてくるCA対して、おもむろに顔を上げた野口は

「何でもいいから、一番強い酒を持って来てくんか？」

「お客様、ご気分が優れない時にアルコールは……」

CAが困った様子でいると、彼女の後ろからヒトミがウオッカの瓶を野口に差し出してきた。

「ご気分が優れませんか？」

ニッコリとした笑顔の中に心配する表情をのぞかしているヒトミに對して野口は一言。

「Ultimate angelとDevil fairyの dangerous twinsに遭遇して笑っていられるほど、わしゃ、世間知らずじゃないんでな！」

「まったく、半蔵の奴は……二人共揃えとは。アスカとは仲直りしとるんじゃない？ イスラエルの二の舞はないじゃろうな？」

ヒトミは横から何事かと二人を見比べている西郷に気づかれないうちに、決して笑みは絶やしていないが、底冷えするような冷たい眼を野口に向けながら

「えええええ……野口さん、イスラエルのことご存知なんですか？ もう3年の前のことですよ……。もうあんな馬鹿なことはありませんよ……。来月には25のおばさんになっちゃうのにい……。」

その22歳の小娘がイスラエル諜報特務局の7割を姉妹喧嘩で壊滅状態にしたんじゃないか！

と叫びたい気持ちをグツと飲み込んで

「半蔵に迷惑をかけんように、姉妹は仲良くするんじゃないか！」

投げ捨てるように言い、野口はおもむろにウォッカの瓶を口に傾けた。

わけがわからない西郷は

「兄弟喧嘩はよくないねえ。血を分け分身みたいもんじゃないか！俺にも妹がいてさあ。3つ下のくせにまあ生意気で……。」

「あまり飲み過ぎないで下さいねえ。」

西郷の必死にその場を変えようとする努力を無視してヒトミは手のひらをヒラヒラさせながら席に戻っていった。

一人取り残された西郷は…静に下を向いて…

どうせ、俺なんか…といじけるしかなかった。

暫くすると黙々とウオツカを煽る野口の横で、感心したり唸ったりしながら西郷は書類に没頭していた。

「で、議会対策にはどんな手段で？」

「今日の別便で、弊社の特殊クレーム対応係から5名のベテランが、各議員に接触します。100パーセント黙らすことはお約束出来ません。」

「ぼ、暴力とかじゃないだろうね？」

「大丈夫ですよ。二人は50過ぎの女性ですし…まあある意味、情報暴力の暴力かも知れませんが…」

「情報の暴力？」

「人には絶対に他人に知られたくないことが一つもない人はいないそうです。室長のうけおりですが…」

休憩とばかりにカップの珈琲に口をつけながら、ヒトミは満面の笑みを上岡に投げかけていた。

ずっと眺めていた欲求に打ち勝ち上岡は質問を続けた。

「マスコミ対策はどうするんです？」

「テレビやラジオは、今日中に社長と室長が脅し、いや、説明と協力依頼に行きます。」

同時に姫山さんと真弓さんが新聞社と出版社に…

三流出版社やゴシップ誌などはアスカが率いるチームが対応します。まあここに対応される会社は可哀想ですが…

インターネットプロバイダー

IPSは社長の一声で、問題のある書き込みは即時削除します。」

「なんで…一介の私企業が、こんなに手早く情報操作が出来るんだ？伊集院さんがその気になれば、クーデターも可能じゃないか？」

数々の質問の答えを聞き思わず上岡は唖ってしまった。

「当然ですわ。社長が政界にいらしたら間違いなく総理大臣ですし、腹心の室長は日本一、世界でも5本の指に入る情報通ですから…二人とも、その力を個人的に使うことなど毛頭考えていらっしやらないから、人がついてくるんですわ。」

上岡の疑問が不思議とばかりに首を傾げながらヒトミは答えた。

「まあ…確かにヒトミさんの言われる通りではあるが…実際に直面したら流石に不気味なもんだね。」

無理やりな笑顔で上岡は話しのお茶を濁した。

「あっ！」ヒトミが唐突に声を上げた。

「室長から伝言があるんです。いくらマスコミやネット対策をしても、4〜5日が限度だと…」

そこから2日以内ぐらいに何らかのアクションがないと、勝つてに

不安な様子だけが独り歩きするそうなんで…ギリギリのタイミングとして1週間くらいのところから、情報を小出しにして行くので、タイミングに合わせてシナリオを届けるとのことでした。」

「届ける？何故？なんだい、今渡してもらっても変わらないんじゃないのかな？」

「さあ？私には分かりかねますが…。情報戦略は日々変化しますし、知事も下手に台本を知ってしまうと素の反応が出来ないからじゃないでしょうか？」

（全く、言われる通りだが…この会話自体完全にヒトミさんに主導権を握られてコントロールされてるな。まだまだ、僕も修行が足りないな。）

上岡が自嘲している間に、ヒトミは席を立ち書類に納得がいかず、何度も書類を捲り直す西郷に近づいていった。

「何か、腑に落ちない部分がありますか？」

出来る限り思考を邪魔しないように細心の注意を払ったヒトミの喋り方であった。

「いや。このページに記載されている、警視以上にも関わらず情報を通達してはならない5名のメンバーについて、理由がかかれていないんだよ。」

特にS A Tの副隊長と公安の係長は信用が置ける人物だと思うんだが……

この二人を外すのは難しいなあ。説明がつけにくいんだよね。部下からの信頼も厚い人物だしね。」

「その5名はエスです。」

「エス？」

「はい。エスです。」

「エスって、公安の奴らが使うエスって理解でいいのかな？」

「はい。5名とも、俗に言う“スパイ”です。」

「馬鹿な！他の3名は…そこまで親しくないが、副隊長と係長は…
…警視庁からの出向者で、身元調査も完璧なはずだ！」

第24話 伊集院 剛 6日前 ? (後書き)

ご意見、ご感想 お待ちしております

第25話 伊集院 剛 6日前 ? (前書き)

すみませ〜ん

やつと・やつとの更新です。

2ヶ月以上 睡眠時間 4時間に耐えます。ご理解下さい。

で：今回、西村寿行先生の小説の組織と名前を拝借しております。
先生のファンの方がいらしたら、イメージを壊してすみませんです。

しかし、公安の係長を誰に拘束させりゃいいんだ？……」

「そのことの対策についてはいいんですが、書面に残すわけにはいきませんと言つ室長の伝言で……」

他言無用で聞いていただけますか？

流石にエスに選ばれるだけあって5名ともかなりの情報を知る立場におられます。

その点を逆について、通常のシナリオ以外に別シナリオを用意します。

5名以外に、副本部長や参事官、SAT隊長に対しては、別の情報を与えるんです。」

「別の情報？……！畏を張るのかい？」

「遠からず近からずです。」

中国と北朝鮮は既に感染体のことは感じており、世界各地で情報収集を進めています。

今回の目的は原則的には2つです。

まずは福岡から監視の目を離させる。

次に両組織の国内活動の実質的な責任者をあぶり出す。可能であれば責任者ごと組織も潰します。

現時点では責任者の一歩手前までしかたどり着けていませんので、このチャンスを利用することです。」

「き・君い！」

只でさえ説明が困難な状況において、対諜報機関活動まで追加すると言っのかい？

県警の公安課員を係長の頭飛ばしで動かすのは到底無理というもんだよ。

ましてや、刑事部は面が割れてるし…

本庁のメンバーも係長なら…大概は知ってるだろうし…

監視体制なんて組めやしないよ！

二人とも拘束するしかないって。」

西郷は新たな面倒事は頭っから拒否したい気持ちに勝てなかった。

「副隊長を拘束された場合によっては、ご家族は見捨てると言っご判断ですか？」

（あちゃー！忘れてた！副隊長の奥さんとお孫さんが相手の手の内何だったな。

待てよ、なら副隊長は此方に引き込んだらいいんじゃないか？）

名案とばかりに西郷は声高に自案をヒトミに説明した。

「無理ですね。それってバレたら相手に取っては裏切り行為になりますよね？」

それより、副隊長には今のままで協力を続けてもらいます。

今回は黒幕の特定が出来ればいいだけですから。相手がわかれば対策も打ちやすいですので…

まあ、様子を見て副隊長は異動になるでしょうか……

それよりは、確信犯的な係長の方が面倒です。

残念ですが…救いようはないですね……」

「き・君はいともあっさりと言っただね。」

刑事が刑務所に入るってえのは…

想像を絶する目にあっただよ！」

「知りすぎた係長を刑務所に送るだけで、両組織が納得されますかしら？」

口封じは当然の処置ではないでしょうか？」

冷酷なことをさもありませんと軽く言い放つヒトミを凝視しながら

「君、日本は法治国家だよ。いくら、公安の事案とは言えども…殺すとかなど論外だよ」

「案外と甘ちゃんなんですな。」

呆れたと言わんばかりにヒトミは肩をすくめた。

「まあ、どちらにせよ。西郷さんはあまり気にされなくていいと思

いますわ。

既にお二人は室長が手配されたチームによって……

24時間体制の監視下に入ってますので、西郷さんはきつかけを与えていただくだけですから……

キャリアさんが、こんなに甘いから、ここは（日本）は諜報員の天国なんですかね〜」

ヒトミは完全に、西郷を小馬鹿にした態度をとっていた。

（仮にも、日本の警察組織のキャリアに向かって、この女 アマなんて口聞きやがるんだ！）

歯軋りしながら、睨みつける西郷を無視してヒトミは言葉を続けた。

「先程の別情報ですが……
ある程度事実を混ぜます。

まず、ゾンビみたいに発症すれば人喰いになるウイルスが作られて、実際に数千人の街で発病し軍が鎮圧を試みたが失敗に終わり、秘密裏に感染者ごと街を焼き払った。

アメリカ軍の特殊部隊が原因追求のために感染者を1名確保したが、確保された感染者は現在軍の監視下になく謎のごとく行方不明であり、これには何らかの組織が関与している可能性がある。

また、設備面やバイオテクノロジーの先端性の関係で日本のどこかに秘密裏に研究対象（軍事利用かテロ利用か不明）として連れてこられる可能性が高い。

公安外事課からの情報では関西地方に新しく埋め立てられた。『マリンアイランド』（国家事業で、ほぼ福岡県の2倍の広さの埋め立て地で、経済特区地域として国内外のバイオテクノロジー関連企業が集まり、街自体が多国籍市街地化している）に感染者が運びこまれる可能性が非常に高い。と警戒されている。

この地区は、経済特区として各企業にある程度の自治権を与えられているからであり、さらには、本州とのアクセスは5？に渡る連絡橋のみなので、最悪の感染拡大が防げる点からも最適な条件と考えられる。

しかし、大都市圏にそんな事態の可能性があることを公には出来ないで、新型の細菌テロの可能性という情報にすり替えて、九州地区に偽装的に警戒態勢を取り、順次に世論を安全でした、問題は発生しませんでしたと誘導していく。

同時に、マリンアイランド内の企業には、順次臨検に入れるように法案化していく。

つまり、実際の危険に対処するための部隊を整備しながら、対諜報機関には危険は九州に存在するように見せかける情報戦略であり、本来の最大危険地域を関西である。とし、全然関係のない関西地方を囿にして情報収集に集まる諜報員やその枝（協力者やエス）を監視し組織自体を可能であれば一網打尽にする作戦です。

また、この作戦自体は友好国の諜報機関にも説明は行わず、作戦自体にリアリティを持たすために友好国も騙す。と言う説明になります。

勿論、アメリカ・イギリス・ドイツ・中国・北朝鮮にはこちらの意

図通りに情報が伝わることになります。

実務については、本庁（警視庁）公安特科隊【西村寿行先生！隊名お借りします！】を投入されるそうです。

本体は関西に投入されますが、若干名は九州にも（念のため）投入されます。

公安特科隊は、府警や県警の指揮下に入らず、各科員の独自判断で行動します。

確保した人物の拘束が必要な場合のみ、留置処理を行いますか…

その際は、麻取（厚生労働省・麻薬取締事務所）の身分と施設を活用することと、府警・県警とは完全に一線を引いて行動する。そうです。」

西郷が話しについてきて、理解出来ているのかを探るようにヒトミは一旦喋ることを中断し、西郷をじいつと見つめた。

「公安特科隊？そんな組織は本庁の公安にはないぞ。ってか聞いたことないぞ？」

今回のための特別編成か？」

「聞かれたことありませんか？」

確か、公安関係者の中では公然の噂の……

たしか、『公儀お庭番』とかって噂されてませんか？」

ヒトミの台詞にハツとした西郷は…

「あ、あれは、公安課員が日本の暗部と警察の暗部を牛耳っていると言っ自負に自惚れないように……」

公安課員を律する組織があるらしいぞって言う、新人向けの……
公安部の都市伝説だ！……のはず？……

ほ、本当に特科隊つてのがあるのか？」

「さあ？私は、たんなる通信会社のOLですから……」

クスツと想いだし笑いをしながらヒトミ答えた。

（中郷さんや伊能さん、突然に表舞台に引つ張り出されたから……怒るんだろうなあ。

北も中国もかわいそう。あの二人相手じゃねえ〜

まあ、私やアスカよりはいいのかも知れないけれど……）

ヒトミの思い出し笑いを侮蔑と受け止めた西郷は、血の気がなくなるほど強く両拳を握り締めながら……唯一の抵抗のごとく、出来るだけさり気なく

「まあ、先輩が立案したんだから……」

魑魅魍魎が現れたつて不思議じゃないな。

その内に、秘密結社に仮面ライダーだって言われかもしんないしな。

更に覚めた眼でみつめられた西郷は

（こんな若い女性に仮面ライダーは通じないか）

と無駄なジョーダンに自己嫌悪に陥っていた。

「ご理解いただけただけでしたら、詳細を説明させていただいても構いませんか？」

一は同福岡に到着し、ヒトミはとんぼ帰りで東京に、他の者は慌ただしくそれぞれの職場に戻り、この難解な作戦が無事に終わることを信じ、部下や秘書に幹部職員 of 招集を命じていた。

夕刻に幹部への説明が終わり上岡は、横山市長に面会を求めて、協力を要請しにいった。

つい、半日前に会った時とは別人のように協力的な横山に違和感を感じながら、影のように一緒に同席している、初めて見た秘書の暗いイメージに気をとられながらも、全面的な協力の確約が取れた。疲れ果てた上岡は、自宅に戻る車中で深い眠りに落ちていた。

同じころ、上岡とも横山とも一線を引く市・県議会の議員達は、各自の後盾から紹介された訪問者に、一人ずつ全面的な服従のごとくの協力を確約させられていた。訪問者が去った後、議員達は各々で物に八つ当たりしたり、涙を流し神頼みを行い、何とか自分を落ち着かせる努力を朝方まで続けたていた。

一方、西郷は幹部職員への説明後の対諜報機関対応の別シナリオの説明に汗を流していた。

東京

「これで、準備万端かな？」

流石の伊集院も疲れた顔を見せていた。

「そうですね。後はホアンからの接触を待つ事と、まだご相談はしていませんでしたが、現場にジョーカーと言いますか……ダークホースと言いますか？」

この先つて流石に予測不可能なんで、こちら側の人間で何にでも対応出来そうで予測不可能な人物を予備知識無しで送り込みたいんですが……

ただ、この人物が一般入社なんで……」

「一般入社？イリーガルでもなく。軍や法執行機関や諜報機関崩れでもなく？」

アスカやヒトミでは駄目なのか？」

「Ultimate angelとDevil fairyのdangerous twinsですか？まあ、それでも構わないんですが……」

私のイメージは、今回ばかりは、軍や圧倒的な戦力だけでは太刀打ち出来ないんじゃないかと……

人間の持つ基本的な生存本能を、関係する者にいつの間にか植えつけてしまうような存在が必要なんではないかと……」

「なるほど……その人物の詳細ファイルは？」

源五郎丸は、『田中一郎』と記載されたファイルを伊集院に手渡した。

「田中一郎か……確かに不思議な人物だったな。」

伊集院は、ファイルを

捲り始めた。

と同時に、源五郎丸の携帯電話が静にバイブレーションを起こしていた。

見知らぬ番号表示に、ニヤリと笑いながら、源五郎丸は隣室に向か

って歩き出した。

「ゲンだ。ホアンか？」

また、歴史は1歩 歩みを進めた。

第25話 伊集院 剛 6日前 ? (後書き)

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第26話 源五郎丸 拓也 5日前(前書き)

連投です。

仕事の合間に……せつせと書きました。

もう少しペースを上げていくよう 努力しますのでお楽しみにして
下さい。

第26話 源五郎丸 拓也 5日前

「ゲンだ！。ホアンか？」

後ろ手に扉を閉め、しっかりと首に巻きつけられているネクタイを外しドカッとリクライニングシートに座り込み、相手の返事を待ちながら、1本の煙草に火をつけ紫煙を深々と吸い込み、身体中にニコチンの快適な刺激が廻る感触をじっくりと味わっていた。

「久し振りだな、マイブラザー。激務に後の一服の時間はもついいかい？」

警察を辞めても相変わらずだな。特に2匹のドラ猫を飼いならすとはすごいじゃないか！どんな手口を使ったんだ？」

「ホアン。娘さんは・・・リーシエちゃんは気の毒に思う。しかし、だからと言って感染体を日本国内に連れてくるのはいかなものかな？」

「リーシエ？ああ、あのベトナムの娘か？かわいがってやったのに変な病気で入院しやがったんだぜ。おかげでFBIでの稼ぎも何もあつたもんじゃねえや。」

金がかかりすぎて・・・ワイフはいかがわしい店での仕事まで考え始めやがるし、蔵前 翁に出合ってからやつと俺にも運が回って来たんだ。もう入院費も気にしなくていいしな。

おっと！昔話しのために電話したんじゃないんだがな。

九州の柘 博士の研究施設に、例のモノを運びこむ予定なんだが・・・やはり日本国内ではおおっぴらに銃器を担いでの警護は難しいし、偏屈な柘 博士の許可も大変なもので・・・

何かあったら、困るだろう？蔵前 翁のルートで政治屋を脅してもよかったんだが、やはり信頼できる相手と組まないとな。

その点、ゲンなら安心だよ。

既に、頼みもしないのに自衛隊の選りすぐりを集めて対策を考えてくれてるんだからな！

柊 博士の手前もあるから、指揮権はそちらに譲ってもかまわないぜ。条件とは言えないが博士および研究所でのデータについては、日本も共有してかまわない。但し、データは常に2日遅れとさせていただくがね。

そうそう、俺のことはゲンが一番知っているから・・・
2日間の間にサーバのデータを廃棄したりウイルスを仕込んだりしないのは分かってもらえるかな？

情報戦略で2日間は大きいからね。さすがのゲンでも取り返すのは厳しいだろうね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「返事がないところをみたら、OKと判断してかまわないのかな？
では13時に六本木の『ダウト』に僕の代理人を向かわせるから詳細は彼から確認してくれ。」

一応、彼は現在の僕の右腕なんでね。まあ、ゲンの7割程度の力かな？」

「ホアン。貴様が出て来いよ。代理とは話しは出来ないぜ。」

「駄目、駄目。ドラ猫ちゃん達に僕を襲わせるつもりだろう？無駄死にするつもりはないからね。」

それに、こちら側もそれなりに助っ人を用意してあるんでね。」

ドラ猫に対抗しないといけないんで、それなりのチームを用意したんだぜ。」

聞きながら、源五郎丸の頭の中では目まぐるしく動いていた。待ち合わせの状況に対する数種類の対応策、dangerous twinsに対抗出来そうなチーム編成の傭兵等のチームのうち最近動きの少ないものや居場所の把握できないものなど……

「ニムロド（ヘブライ語で『我々は反逆する』）。西側ではニムロッドの方が通り名としてはいいかな？」

新たに啜えた煙草が、静かに唇から離れて床に落ちることに気がつかずに、ホアンの発したチーム名を何度も頭の中で繰り返した。

「な・なんで……なんで、よりによってニムロドなんてチームと組んでるんだ!!」

お前は、そこまで腐っちまったのか？おい！ホアン！何とか言いやがれ！」

ニムロド：その手段を選ばない作戦行動で作戦成功率は100%であるが、同時に作戦対象外の人物の殺害や建物の爆破、人質や拉致した対象者への性虐待や拷問などなど、傭兵の世界でも一番の嫌われ者部隊であった。ただ狂ったように汚れることのみ快感を得る狂気のチームであった。

特に、その残忍なチーム気質は2年前のロシアマフィアとの麻薬販

売ルートの奪い合いで発揮された。

その手法は、何の関係もない地方のロシア人の赤子を誘拐し、マフイア幹部数十人の自宅前に捨て子を装い、その実、赤子の体内に液体爆薬を仕込んだ、赤子人体爆弾であった。液体爆弾の開発や実験、そして犯行の実施までに及んだ犠牲者の赤子は数百人にのぼるといわれている。

そして、その作戦以降、世界中の傭兵チームを敵にまわす結果となり、来る日も来る日も追いかけまわされ、チーム員は半数以下の4名になってしまっていた。しかし、その4名自体がニムロドの中心の兵士であり、4人になって以降、1年2ヶ月の間に13の傭兵チームを返り討ちにしていた。

「ゲン！何を言っているんだ？散々教えただろう？

作戦行動には、最適なユニットを選出し上手に使いこなさなければいけないんだ。

今回、君の手駒の dangerous twins に対抗できるチームを選択した場合には彼らしかいなかったんだよ。

丁度、彼らは逃亡に疲れきっていて・・・楽になりたい。でも普通に死ぬだけでは嫌だ。最強の敵と殺りあいたい。と切望していたんだ。

成功の暁には、永遠の『生』しかも、彼らが望んでいた。最も汚れた『生』につながる『死』を約束しているんだ。

そう・・・成功の報酬はゾンビなのさ。4人とも目の色を変えているよ。

ドラ猫には十分に注意させたほうがいいんじゃないか？」

「ホアン！本当に、性根まで腐っちゃまったのか？日本国内でニムロドが活動してみる、死者の数は数百ではすまないぞ！

何でだ！何故、そこまでするんだ？そんなことでリーシェちゃんが喜ぶと思っっているのか？ホアン！！！！！！」

「黙れ！黙れ！黙れ！黙れ！リーシェが何故原因不明の病気になったのか教えて欲しいか？

俺たち夫婦が引き取る前の話したが、リーシェの住む町に日本の企業が工場進出したんだ！

大手企業に海外生産に切り替えらそうだとかで、起死回生に工場進出だったそうだ。

利益！利益！利益！で、工場の廃液はそのまま川に流され続けた。

その化学物質の影響でリーシェはリーシェは……………

興奮してすまなかった。

その工場は既に閉鎖・取り壊しされている上に会社自体も倒産しており、何の化学薬品がどのような調合で利用されていたかも窺い知れないんだ。

もう…………もう…………リーシェが目覚める可能性は、翁が求めている。薬にしか、望みがないんだ。

もう一度だけ言っておく、明日13時『ダウト』だ！

ドラ猫の姿が少しでも見えたら、ニムロドをフル装備で六本木の街に突撃させるからな……………

こなければ、柊博士はあきらめて地下に潜っての研究になる。分かるな！危険は数十倍に跳ね上がるぞ。」

「分かった。dangerous twinsは動かさないから・・・
早まった事はしないでくれ。」

なあ、ホアン。今なら引き返せるぞ？
力になるから戻ってこれないのか？」

「俺は、この世で2人の人間しか信じない、ワイフと『ワンさん』
だけだ。知っているだろう？ゲンには背中には任せられるが、ゲンの
前では熟睡は出来ないんだ・・・」

プツリと電話は切られた。

やるせない気持ちを抱いたまま、今の会話を伊集院に報告に行く源
五郎丸の後ろ姿は、必死に涙をこらえている寂しいものだった。

「田中一郎かあ……」

（会議で一度しか会っていないが、不思議なタイプの人間だったな。
媚びてるようで、眼は絶対に媚びないと語っていたな…

的確な判断とそれに見合わない突飛な行動。しかし全ては…最後に
は何故だか辻褃が合う。

この報告書に間違いがないのであれば、彼はこの事態を乗り切りる。
切り札になるのか？

しかし、何故？

源五郎丸が調べているにも係わらず、中学からの記録しかないんだ？

戸籍上、両親は1975年に死亡となっているが…

死亡の理由などの調べがつかない。

これだけ、一定期間とは言えども完璧に消息を絶つ方法に検討がつかない。

と、源五郎丸が最後に備忘を残した資料は初めてだな。

託してみるか！)

伊集院が腹を決めた瞬間に、扉が開かれた。

そこには、初めて見る憔悴しきった姿の源五郎丸が居た。

それから、ヒトミとアスカが呼ばれ、延々と長い打ち合わせが行われ、終わった時点で、どんよりした冬の太陽が都市を照らし出していた。

「やっぱり！冬だね。寒いね。アスカ。

ほら、息がしろ〜い！」

そこ、ジャパンテレコムの上には、伊集院と源五郎丸との打ち合わせを終えた、ヒトミとアスカが朝日に向かい背伸びをしていた。

「ヒトミ。さっきの室長の話し？がしたいわけ？」

私も、流石にニムロド相手の鬪いに姉妹喧嘩のままは突入出来ないわよ」

「OK!じゃ仲直りね!」

ヒトミはいきなりアスカに飛びつき、しっかりとアスカを抱きしめた。

(てか…そもそもイスラエルに行く前日に、限定販売のプリンを1個、勝手に食べただけで、姉さんが怒り出したんじゃない。

5個もあつたくせにさ。

で、イスラエルの作戦中に思い出して……

散々だったじゃん。

止めに入るモサドのメンバーを20人以上病院送りしたのも…

怒りに任せて、テロ組織を皆殺しにしたのも…

ぜくんぶ、あなたなのに!

いっつも、二人揃っての呼び名 dangerous twins。

しかもあなたは一応 angelだけど私なんかDevilだからね!

まあ、世界で唯一の肉親だし……

私が我慢すればいいんですよ!

ねえさん!)

アスカもヒトミを優しく抱きしめて、めでたく数年来の姉妹喧嘩は

終結した。

しかし、恐ろしいのは女性のおやつに対する執着である。

たかがプリンで……イスラエルの諜報機関が大打撃を食らったのである。

くわばら くわばら

次回 予告

田中さん かみんぐすん

第26話 源五郎丸 拓也 5日前(後書き)

ご意見・ご感想 お待ちしております

第27話 田中一郎 おいおいどうなってんだ？（前書き）

やっとこさ。物語中のリアルタイムに戻れました。

反省を踏まえて、これからはリアルタイムの中で適時話しの前号を埋めて行くようにします。

一気に展開を動きのある話しにしたいのですが…

如何せん、襲われた時のリアリティがどうしても書ききれないです。

第27話 田中一郎 おいおいどうなってんだ？

「今までのところ、残念ながら何の成果も出ていないが…

解明出来れば、人類の不老不死すら可能になる、秘めたるウイルスじゃよ。

あなたにもわかって貰いたいものじゃな。

人類の永遠のテーマなんじゃ！」

少し遠いところを眺めているような黄昏た表情を見せる柊に、渾身のウエスタンリアクトをぶちかましたい衝動が警備の自衛官に伝わったのか？

自衛官が自動小銃のグリップを握り直した姿を視界の隅で見取った田中は寸でるところで駆け出すのを踏みとどまった。

「え・永遠って…そりゃ永遠に追いかけることが出来るからテーマとして素晴らしいんでしょうがね。

映画のゾンビみたいなのは…いかがなものすつかね。

不老不死どころか…一歩間違ったらゾンビになりやしませんか？

そんな危なっかしいのは、流行んないと思いますよ。」

田中の反論が意外だったと見え、柊は足を止めて

「おや、おや？『カニバリズム』を理解されておられる方の発言とは思えません！」

『人』と言う生き物は所詮強欲な生き物なんじゃよ。

『人』は、この地球上の食物連鎖の頂点に立ち、ありとあらゆる物を手に入れてきたんじゃ。

最後に残ったものは『死』を回避する手段だけなのじゃよ。

もう、誰も『死』を怖れなくてよくなるんじゃ！

素晴らしいとは思わんかい？ 田中君？」

ふざけんじゃねえやい！この傲慢コンチキチンが！

「ひと…」

田中が反論をしようとした瞬間に、いきなり照明が切れ通路は真っ暗になった。

ガチャガチャと慌ただしい音が続き小さな灯りがともされた。

警護の自衛官が手持ちの懐中電灯をつけながら

「博士に2人つけ！ 全員初弾装填！バーストだぞ！

新庄！前方警戒！ 梨田！後方警戒！十分に注意しろ！

発砲は許可してからだ！」

「新庄、了解」

「梨田、了解」

「つきました！」

「本部！本部！こちら、警護足立班。いきなり停電したが、状況連絡と指示を願う。」

柊博士は現時点では無事確保中！以上。」

「3分で自家発電に切り替わる！各個注意！」

「三宅！田中さんを博士の横までお連れしろ！」

キャサリン

停電2分前

自室に到着したキャサリン博士は、自身のパソコンに接続されていた外付けハードディスクを取り外す作業中に、パソコンに新着メールの表示が出ていることに気がついた。

ハードディスクの映像を会議室に持っていき用意しなければならぬが、メールを1件確認するくらいは構わないだろう。

メールを開くとキャサリンが利用しているネットランジェリーショップからの新製品の案内であった。

身長2メートルを越す巨漢のキャサリンが唯一入手出来るランジェリーを販売しているのだ。

物心がついた頃からキャサリンは同世代の女性の2倍は大きく、お洒落どころかサイズの合う服を手に入れることすら困難であった。

家もどちらかと言えば貧乏な方であり贅沢を許されることはなく、巨漢ゆえに友達からも敬遠されてキャサリンには勉強しか友達がおらず、結果一心不乱に励み現在の地位を築き上げたのである。

しかし、どんなに科学者として立派になろうとも…キャサリンは女性としての幸せを掴むことは出来ず、唯一、誰に魅せることもないランジェリーを購入するのが生き甲斐となっていた。

本来、特殊な研究活動中であるので、インターネットとなど外部との接触は禁止されていたのだが、キャサリンには誰にも知られていない特技の一つに超一流のハッキング能力があった。

おかげで世界中にキャサリンが入れないところなどなく、暇があれば大統領のスクランダルをもみ消すCIAの報告書などを色々なところに侵入し眺めていた。

勿論、このビルのセキュリティも赴任した3日目に突破し、ネットサーフィンなどを楽しんでいた。

キャサリンが3日もかかったセキュリティは久しぶりであったので、研究所自体のセキュリティのレベルはアメリカ合衆国の諜報機関並と言えた。

そんな、慢心があったのだろうか、普段ならば、メールに添付されたデータは自作のセキュリティソフトで検疫してから解凍するのであったが…

キャサリンが添付ファイルダブルクリックした瞬間に…キャサリン自身が検疫漏れのウイルスを検知した際に防御壁を作動させるソフトがいきなり起動した。

「えっ？……」

ダブルクリック自体を片手間で実施したキャサリンは一緒何が起こったのか把握が出来なかった。

キャサリンの防御壁はデータを持ち出させない、外部に出るデータのポートをブロックするタイプであったが……

メールに添付されていたウイルスは、愉快犯タイプのウイルスであり、キャサリンのパソコンを通し、研究所のメインサーバに侵入し、主に、設備面でのセキュリティを無効にしてしまうタイプのものであった。

館内の電源を切断し、監視カメラの監視パターンを初期化し、内部ネットワークのデータをでたために書き換え、電話交換機や館内無線機のデータを初期化してしまった。

研究所内では、各情報機器に設定されていたNAT機能（インターネットに接続された企業などで、一つのグローバルなIPアドレスを複数のコンピュータで共有する技術。組織内でのみ通用するIPアドレス（ローカルアドレス）と、インターネット上のアドレス（グローバルアドレス）を透過的に相互変換することにより実現する機能）を無茶苦茶なデータに書き換えられたことで、ありとあらゆるコンピュータで制御されているシステムが作動しなくなった。

「やばいわ！ばれたら……責任問題ですまなくなっちゃう！停電だから、部屋から出れなかったと言えば、警備の兵隊さんが来るまでは時間があるかも……」

キャサリンは、ノートパソコンのバッテリーを頼りに必死にキーボードを叩き、自分が研究所内のメインサーバにアクセスした痕跡を消しながら、外部とのインターネット接続やメール接続のログを探

しては削除し続けていた。

「データが無茶苦茶になっている！いやだわ！ログがなかなか見つからない！」

須永隊

岡田博士を無事に確保した須永分隊の面々は第2格納庫の正面に到着した際に館内の停電に遭遇していた。

「各個！フラッシュライト点灯！」

隊員は各自の自動小銃に装着されていたフラッシュライトのスイッチを入れ、左右前後をまんべんなく照らしながら周囲を確認した。

「後方クリア！」（長谷部）

「左前方クリア！」（安部）

「格納庫！扉開けます！」（稲本）

「本田！稲本をカバー！突入はするな！開いて内部の確認を優先しろ！」

岡田博士は私の横から離れないで下さい！」

「扉開けました！内部は……今のポジションで確認出来る範囲はクリア！」

どうします？隊長」

稲本は暗い格納庫の中を目を凝らしながら覗き込んでいた。

「隊長！俺が入ります！」（本田）

「駄目だ！岡田博士がいてるんだ！安全が確認出来るまで、これ以上人数が減るのはヤバイ！」

「本部！本部！………駄目だ！無線に反応がない。クソツ！本部の連中は何をやってやがるんだ！誰か携帯電話もって来ているか？」

「わ・わたしのでよければ……」岡田がポケットから携帯電話を差し出した。

「博士、折角ですが……田坂3佐か青島2尉の番号が必要なんで……」

「田坂3佐の電話番号は緊急用でメモリーに入れさせられたよ。使ってくれたまえ。」

「遠慮なく拝借します。」

携帯電話のメモリから田坂の電話番号を選択ながら、電波状況を確認し、心の中で毒づきながら（アンテナ1本！繋がるのか？）須永は田坂3佐に電話をかけ始めた。

本部

本部全員で館内の各部屋の在館者確認を監視カメラで行っている最中に、キャサリンのもたらしたウイルスが停電を引きおこした。

「停電だと？あおしま！！どうなってるんだ！あおしま！」

田坂が顔を真っ赤にしながら青島に叫んでいた。

「システム担当！至急原因を調べろ！」

3佐！3分で自家発電に切り替わります。しばらく待ってください！」

田坂は無線に各小隊や警護班の責任者の名前を呼び続けながら

「青島！無線も反応しないぞ！」

「システム担当！無線を最優先でやれ！最優先だ！報告も急げ。」

「無線も駄目なんですか？　　チクショウ！メインサーバのフレーム内に問題が生じたのかも知れませんが！無線はしばらく駄目と思っ
て下さい！」

警備！寝てるシステム担当者の奴らも引つ張って来てくれ！1人や2人じゃ対応出来ない。」（毛利准尉）

「警備！毛利の指示にしたがえ！ここには3名だけ残して残りは全員でシステム担当者をかき集める！」

いや！2名は柘博士とキャサリン博士の安否を確認しに行け！

無線が使えない間は……

そつだ！今日の客人用の会議室で待機させておけ、向うの警護班に

引継ぎ次第安否連絡に戻れ！急げ！急げ！」

本部内は騒然とした状況に陥っていた。現在社会のシステム化の恩恵の影に隠れた致命的な欠点が、ゾンビが館内を徘徊している今露呈してしまっていた。

館内のある会議室

この会議室には70名近い終研究所内に勤務する若手研究者が、月1回の勉強会のため集合していた。

各グループに分散し発表が終わったばかりの課題についてパネルディスカッションを始めた途端の停電である。

「きゃ~~~~あ！」

「何だ？何で停電したんだ？誰か明かり持ってないか？」

「明かりなんか持つてるかよ！携帯電話も没収されてんに！誰かライター持ってないか？」

「ライターは駄目だ！ここの感知器は敏感だから喫煙ルーム以外での火は厳禁だぞ！」

「でも、なら、どうすんだよ！非常灯も切れてるぜ。完全に真っ暗闇じゃねえかよ！」

「3分！3分で自家発電に切り替わるから・・・じつとしいたほ

うがいいいんじゃないか？」

「自家発電？それなら、緊急電源で館内アナウンスでその旨の連絡放送が流れるだろ？何にも流れないぞ！ヤバイことが起こっているのも知れないじゃないか？出ようぜ！」

「そつだ！そつだ！この階にはあの『感染体』がいるんじゃないか？たっけ！」

「そつだ！逃げないと……喰われるかも知れない！みんな！にげるぞ！にげるんだ！！！！！」

「さて！さて！単なる停電かも知れないじゃないか？何でも、感染体に結びつけ……ゲツ！」

70名の殆どが、パニック状況に陥り会議室の扉に殺到し、停電の注意をしていた古参の研究員は70名に雑踏に吹き飛ばされ、何十人も人の足に踏みつけられた。

通路

西脇分隊を襲い終わった感染体の一行は、当初の倍の人数に膨れ上がりどこを目指しているのか？フラフラと同じ方向に進んでいた。

一行が通り過ぎたすぐ後ろで、あわただしく扉が開きたくさんの人が押し合いへし合いであふれ出てきた。

先頭に行く女性がつまずいて転倒してしまいすぐ後ろを走る男性を

驚きの叫び声も… いつしか大量の絶命に至る絶叫に掻き消されて
いった。

こうして、徘徊する死者たるゾンビは総勢80を超える一団となっ
てしまった。

第27話 田中一郎 おいおいどうなってんだ？（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第28話 拡散（前書き）

死にそんな勢いで書いてますが…

身体が持つんでしょうか？

眠たいです。

第28話 拡散

本部

「あ・お・し・ま!

どうなっているんだ!とうに3分は過ぎたぞ!

自家発電はどうなってる!非常灯すらつかないじゃないか!」

手元で小刻みにバイブレーションを起こしている携帯電話にも気づかず田坂は青島に怒鳴り散らしていた。

「んっ?」

やっと震える携帯電話に気がついた田坂は相手も確認せずに通話ボタンを押した。

「田坂!」

「田坂…佐で…須永…です。い…り…てい…ん。」

「須永が?よく聞こえないぞ!」

「ツ…ツ…ツ…」

「くそ!切れた。」

田坂はコールバックしようとして着信履歴を見て、若干安堵の表情を浮かべた。

(須永達が岡田博士を確保したようだな。)

取りあえず、岡田博士の無事を感じとった田坂は、柊博士とキャサリン博士の安否を確認にいかせたこともあり、これ以上焦っても仕方ないことを悟り、本部機能と館内の通信網の復旧作業の指示に専念することにした。状況が把握出来なければ、的確な指示すら出せないからだ。

「毛利、どんな具合だ。」

青島が心配そうにパソコンを覗き込みながら尋ねた。

「ウイルスが侵入したみたいです。」(毛利)

「ウイルス？このネットワークはここ本部室以外の端末は外部と遮断されていると説明を受けていたが？」(青島)

「まあ、ある意味では…外部と遮断はされてますが…この部屋が使えると言うことは、外部に抜ける穴はあると言うことですから…完璧かと言えば…ご想像の通りです。問題は誰かという部分はさておきますが」(毛利)

「ごたくはいい！復旧の目処はどうなんだ？」

「私の持っているルート権限で出来る範囲の事はやってるんですが…自家発電機のスイッチを入れに行き、サーバのメインフレームを再起動するしか方法がないかと…真鍋1尉がお持ちの権限ならもしかしたら何とかなるかもしれませんが…」

真鍋と聞き、青島は力なく頭を振った。

ゾンビが館内にアウトブレイクした時から、強弁にアラーム発令を主張したせいで、鎮痛剤を注射され自室で昏睡させられていたのである。

(クソツ！ビビリの真鍋を排除したのが裏目か… ったく、田坂の奴の体育会系気質の弊害出まくりじゃねえか)

「発電機は誰なら操作できる？メイン何とかは君なら出来るのか？」

「発電機なら、私と黒瀬と秋葉… くらいですか？メインフレームは、真鍋さんと私と秋葉です。」

「秋葉つて？あの小娘か？確か初教あけじゃないのか!？」

「あいつはあんなりですが… 多分日本の中で5本の指に入るハッカーなんです。PCやネットワークなら真鍋さんも子供扱いですよ！但し、権限がないんで彼女を行かすなら、2尉のICカードを貸して貰わなきゃなりません。」

「ハア？何で俺のICカードなんだ？お前と二人でいけばいいじゃないか？」

「もしもの時に、私のICカードの場合はその後には生体認証をくぐらなきゃならないです。」

その点、2尉のICカードだけがオールユーザー登録なんで、秋葉でも使えます！」

「な・なんで？田坂3佐でなく俺のICカードなんだ？しかも、本

人にも知らされてないし」

「知りませんよ！そんなこたあ。真鍋さんが、青島2尉のICカードをオールユーザーに設定しとけば、きつと緊急時に役に立つと・・・田坂3佐にも内緒で上にくらいついて設定したんですよ。」

（なるほど、真鍋の奴も、田坂3佐は信用していないわけか！）

「分かった！で？その秋葉はどこにいる？」

「さつき、警護班に呼びに行かせましたから、追っ付けきますよ！寝癖茫茫でね！あれさえなければ、萌え萌えのピチピチなんですけどね！」

そうこうしている内に、ドタバタとした小走りの長靴音が青島の後ろで止まり。

「秋葉2士。到着しました。」

うつすらと灯るパソコンの光の中、ボサボサの寝癖のまま迷彩服のボタンもちぐはぐに留め見事にブラジャーを公開している、秋葉が精一杯の敬礼をしていた。

（大丈夫かよ！てか・・・ブラジャー見えてんぜ）

声も出さずに、毛利は秋葉に近寄り、秋葉の迷彩服を正して一言

「ここは、男が圧倒的に多い職場なんだよ！変な物出してつと皆にぶっこまれるぞ！ポケエ！！今から、発電機起動させてメインフ

レームを再起動にいくから用意しろ！ICカードは青島2尉に借りる！

グズグズすんなよ！……黒瀬！後は任したぞ。」

青島への挨拶もそこそこに、警備班に近づき予備の自動拳銃2丁とスペアマガジンを貰い受けて、本部備え付けの大型マガライトを片手に飛び出そうとしたが、秋葉が警護班とゴチャゴチャと何か言い争っていた。

何事かと近づいた青島は、自分の耳に入った言葉を一瞬疑った。

「私達にも、89（自衛隊の正式採用に自動小銃）かショットガンを持たせて下さい！途中でゾンビにあつたら任務遂行できないじゃないですか！館内の情報網の再構築は最重要任務なんです！」
駆け出した毛利が戻りかけると同時に青島も困り果てていた警備の者に近づいた。

毛利が時間がないもどかしさを訴えながら

「2尉！彼女は1級射手およびスナイパー候補官でもあるので……」

「警備、彼女の希望する装備を渡してやれ！兎に角、停電とネットワークの復旧は最優先事項なんだ。ゴチャゴチャせずにさっさといけ！

あっ！毛利 何分で完了できるんだ？」

「発電機まで、障害なしで5分。起動と安定確認に2分。そこからメインサーバー室まで1分。起動と初期設定のパッチ作業に15分25分時間下さい。」

秋葉！モタモタすんな！おいてくぞ！」

毛利が小走りで本部を飛び出す後を、小柄な秋葉が不釣り合いな荷物を担いで追いかけていった。

須永分隊

「ツー・ツー・ツー」

「駄目だ！電波状況が悪いみたいだ。このままじゃ本部は当分あてにはならんかも知れないな……。」。仕方ない、当初の命令通りに動くぞ！」

「隊長！俺、暗視装置装備してます。中に入っていいですか？」

須永が電話をしている間に、本田が装備の中から暗視装置を引っ張り出して装着していた。

暗視装置は、非常に視野が狭くなり、慣れないとこのような格納庫内の探索には向いていないが、本田は常日頃、鈴元の指導の元、真つ暗闇の倉庫内で鬼ごっここの暗視装置訓練を行っていたので苦もなく格納庫内の探索に向かった。

「クリアー」

「クリアー」

「クリアー」

本田は小学校の体育館ほどの大きさの倉庫内のくまなく探索し、危険がないことを確認し大きな声で

「室内！クリアーです！！」と叫んだ。

「よし！安部は残って扉を確保。全員指定の区域に向かえ！」

既にC-2エリアに先に到着していた本田は、操作盤をライトで照らして準備をしていた。

「隊長！停電してるのに……開くんですかね？ てか操作盤自体に電気がきているようには見えないっす……よ」

操作盤に張り付いた長谷部は、隊長に渡された情報端末と操作盤の交互に見やりながら、暗証番号を入力してみた。

「入力完了しましたが……何の反応も無いです。」長谷部が呆れ顔でつぶやいた。

稲本はおもむろに扉らしき部分に近づくと、まるで潜水艦の扉にっいているような大きな回転式にハンドルを力いっぱい回した。

ギツギツと僅かな抵抗の後、あっけなく扉がひらき分隊と岡田博士は地下駐車場にその姿を現した。

すぐ近くにいた2名の自衛官が小走りに近づき敬礼をしながら

「志村三曹と加藤士長です。命令により須永分隊に仮配属となります。よろしくお願いします。」

敬礼を返しながら

「こちらこそ！」

須永曹長だ！博士を搬送用の車両にお連れしてくれ。

それと、地下駐車場は停電していないみたいだが、三曹、本部に無線確認してくれないか？研究所内は停電の上に無線も駄目なんだ。」

「了解！地下は停電しているんですか？

本部！本部！ 青島2尉！ 警備 志村・・・
駄目です。無線機に反応が無いです。」

「あつ！そつだ！博士、携帯電話拝借できます？・・・」

須永です。館内は大丈夫ですか？

ハイ！岡田博士は無事に地下駐車場までお連れしました。

ええ、地下駐車場は停電はしていません。

まだ、本部は停電が続いているのですか？

はい、外部の送電線ですか？確認はしますが・・・駐車場は問題ないですから、ちと考えにくいかもしれませんがね。

このままでいいですか？

全員乗車！新人2名はドライバー席に、博士は先頭車両に、分担はいつも通りで行くぞ。」

全員が乗り込み、軽装甲機動車はユツクリを地下のスロープから街に繰り出した。

「三曹！停車してくれ！

ちょっと待ってる！

3佐、今駐車場を出てほぼ建物の真正面です。

はい、地上階は停電しておりませんね。エントランスから最上階まで明かりがついてます。

電力会社か応援部隊に電話などしなくていいんですか？はあ、あと10分程度で自家発電がですか？

分かりました。我々は当初の任務を継続します。

はい、織田陸将補ですね。えっ！私が陸将に説明するんですか？了解しました。

よし、出発するぞ。

三曹、行き先変更だ。県庁に向かってくれ！10分くらいで到着できるだろう？」

須永分隊と岡田博士はひとまず地獄から一步遠のくことが出来たが、それも大した時間もたたずにまた巻き込まれていくのである。

柘博士一向

突然に停電にはびびったが、流石に訓練を受けてる軍人、ん？軍人って言うてもいいんだっけ？テレビや映画みたいにするばやく体制とりやがるわ。案外日本の自衛隊の捨てたもんじゃないのかも知らないな。

しかし、謎めいた1日に秘密基地めいた建物に停電かよ。こりゃあ、間違いなく貧乏くじのフラグがファイバーだな！多分確立変動に間違いないぜ！

「柘 博士。ここの警備はどうなってるんですか？そのゾンビとやらはどこに居てるんすかね？」

「そんなことを聞いてどうするつもりなんじゃ？こんな暗闇のなか

じゃ見学は許可できんがね。今いるところが地下1階じゃで、感染体は1階したの地下2階じゃよ。」

「ゾンビって走るのが早いんでしたよね？（確か、事務の由美ちゃん）が走るゾンビは怖かったとか深夜放送を見た朝にわめいていたよな！」

「おやおや！ゾンビの映画は見ないんじゃないのかね？」

君の言ってるゾンビはリメイク版じゃよ！走るゾンビは夢がない！と思わんか？

ましてや、ワクチンで人間がゾンビ化する映画で壁を這い回るゾンビなんぞ、言語道断じゃよ！」

また、ホホホ付きかよ！お前のゾンビ映画の評論を聞きたいんじゃないやねえよ！映画の評論なら、やっぱり『故水野晴男』先生だろうが！『いやあくほんとうに映画っていいもんですね』だろうが！さいなら・さいなら・さいなら・したるぞ！（淀川先生スマン！）

「は・博士・・・映画の話しじゃなくて、ここに居てるモノホン！ホ・ン・モ・ノの話しがききたいんですけど？まさか？走ったりしないですよね？」

「走るの何も、ベットに拘束してあるから大丈夫じゃよ」

かみ合わない親父やなあ。

二人の会話を見かねて、警備の自衛官が話しに割って入ってきた。

「アメリカでの発生した時点の映像では、走ってる姿は確認されていません。軍隊の生き残りの証言からの、走るところか、酔っ払い

が必死に走ろうとするスピードより少し遅いくらいということですよ。これで、少しは安心していただけましたか？いざとなれば走って逃げられますよ。」

酔っ払いが必死に走ろうとするスピードより少し遅い？どんな速さなんだよ？

その酔っ払いが、ウサイン・ボルトやカール・ルイスだったらどうすんだよ。

普通に走る親父より早いかもしねえじゃねえか？

べん・ジョンソンなんてドーピング！てかドーピングしたゾンビだったらやばいじゃねかよ！

「ちいいいと尋ねてもいいかい？兵隊さん？酔っ払いが必死に走ろうとするスピードより少し遅いてえのはどのくらいのスピードをアスタは想定してるんだい？」

「えっ？いや〜あ。私は実際に映像を見えますから・・・その、なんと云うか・・・最大速度が普通に80歳位の老人の早歩き位ですかね？」

またまた、新しい基準だよ。何で時速とかで表現しないんだろう？

まあ、走らないんだったら救いもんだわな！

第28話 拡散（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第29話 拡散 2（前書き）

へっへっへっ

のめり込んで……

徹夜になってもた……

死にぞこない状況で仕事

職場ゾンビ です。

只今 タバコ休息中

第29話 拡散 2

斉藤分隊

「全員、装備は持ったか？竹原副長が先に出ているから各個バディと装備確認を実施！」

装備を準備した斉藤分隊は、先行する竹原曹長を追った。

福永と酒井は、周囲に気をつけながら装備庫に向かっていた、途中バイオハザードエリアの角を曲がった近くの部屋に大勢の研究者がワイワイと集まっているところを目撃したが、伝えてよいものか判断がつかないうえに、まだ、感染体とはかなりの距離がある分、自分たちと斉藤分隊が戻って来るだろうと判断し、先を急ぐことにした。

途中、竹原とその部下3名と落ち合うことができ状況を説明してた結果、分隊全体で行動する方がよさそうだと結論し、斉藤達の到着を待った。

「隊長！竹原さん達です。」

見たところ、自分の隊の4名以外に2名の自衛官しか確認できなかった。

「福永です。」

「酒井です。」

斉藤は両名に返礼しながら

「君たち2名だけか？」とたずねた。

福永が小さく頷き、後着の隊員の間に関きなどよめきが起こつた。

「まっつて下さい！」

隊は……隊長の間違つた判断で……その……全員がMP
-5に初弾装填なしで現場に遭遇しましたので……
通常ならば、こんな被害にはならなかつたと思います。」

「そうか！仕方なかつたのかも知れないな。出来れば避けたい任務
だが……敵討ちにいくしかなさそうだな。」

各個、初弾装填し2名1組で交互に距離を置いて前進。
遭遇次第、バディのショットガンで威嚇攻撃、89で留めをさすん
だ！リロードの瞬間には十分に注意しカバーリングを行うこと！以
上。」

固唾を呑みながら、斉藤分隊はその場をあとに前進を始めた。

その中で、意外とこんな時に肝つ玉の座つた決断をし、的確な指示
を出した斉藤は竹原に肘で突かれて、珍しくお褒めの目配せをされ
た。

もうあと2ブロックでバイオメディカルエリアというところでき
なり停電が発生した。

斉藤分隊も他の者達と同じように、どこにも連絡が取れなくなり、
一時的に前進を中止するよりほかになかつた。

停電から数分がたったとき、酒井が

「悲鳴つす！それも1人や2人じゃない！どうします？」

酒井の注意の後、全員が耳を澄ますと間違いなく、たくさんの悲鳴が聞こえてきた。

「何で、あんなにたくさんの悲鳴が聞こえるんだ？今晚、このエリアにそんなに人がいたのか？」

斎藤が誰にもなく質問をした。

「すみません！自分たちが助かった瞬間に……忘れていました。S-3（バイオハザードエリア）の会議室に若手の研究者がたくさん集まってきました……俺が先行します！」

福永が、堰を切ったように言い出し、突然前方に向かい走り出した。

「竹原！連れ戻せ！」と斎藤が叫ぶ前に酒井が竹原に飛びついていた。

「離せ！酒井！離せ！」

福永は必死に酒井の身体に下でもがいていたが、完全に酒井に押さえ込まれた状況で、1分もしないうちに無駄な抵抗と悟り静かになった。

「竹原！3名つれて前方50メートルの安全確保。総員、竹原班が安全確保しだい50M前進。竹原班の次は、築地班。次は、俺と福永、酒井！3班の順繰りで50Mずつ前進。」

班員たちは必死で応戦したが、暗闇から襲い掛かる感染体の数が多すぎてあつという間に人波にのみこまれたしまった。

「竹原！通路の左右を照らして…ガッ」

タン・タン・タン　タン・タン・タン　タン・タン・タン　と短い音とともに命令途中の斎藤と竹原のそばにいた隊員が2名吹き飛ばされた。

「隊長！」

福永は斉藤に駆け寄った時点で、斉藤の身に何が起こったかを知った。

斉藤の後頭部はザクロのように内側から破裂したような傷がついていた。

「全員しゃがめ！襲われた奴らが痛みで引き金を引いてる！」

「竹原さん！そっちは何名残ってます？」

「こっちは俺と酒井だけです。」

ついでに、俺のMP15のフラッシュライトも流れ弾でやられました。

申し訳ないけど隊長の装備から拝借します！」

「こっちも2名やられた。俺も膝をやられて動けそうにない！」

「そっちに行きますから…前方だけでも注意しておいて下さい。」

福永は斉藤のライトを自分のMP15に装着して、ライトが点灯することを確認し酒井に声をかけて前進を始めた。

「畜生め！膝が完全にやられちゃった！

おい！中曽根。お前は大丈夫か？」

「大丈夫です。無傷です。」

中曽根が竹原に走りよってきた。

「取りあえず、包帯と止血をしないと……」

中曽根は分隊では衛生兵でもあった。

「いや！手当てはいらない！それより前方を注意しろ！

築地班の悲鳴がなくなった！

こちらに向かってきているかもしれないぞ！」

中曽根は、慌てて自動小銃を前方に向けたとたん……7体の血だらけの感染体がこちらに歩みよってくるのを確認した。

ある者は腕が不自然に曲がっていたり。

またある者は腹から内蔵を垂らして歩いていた。

「う・う・うわあああ！」

中曽根は自動小銃をフルオートで打ち始めた。

確認出来る範囲で5体から6体程の感染体に銃弾を浴びせたが、当たる度に身体はショックでのけぞりはするが……感染体は確実に近寄

つてきていた。

竹原は膝を撃たれ倒れた際にショットガンを落としてしまっていたので、拳銃で感染体に向かい発砲していたが、結果はただ暗闇に向かい闇雲に撃っているに過ぎなかった。

「前に出ます！副長は少しでも、這ってでも後退して下さい。すぐに福永さんと酒井が来ます。」

中曽根は怒鳴りながら、一歩二歩と震える足を右拳で叩き、自分を鼓舞しながら前進した。

その横を誰かが凄いスピードで駆け抜けていき、一番手前の感染体に回し蹴りを浴びせていた。

感染体は首をへし折られて数体を巻き込んで後方に吹っ飛んだ。

啞然とする中曽根の肩を福永が軽く叩きながら

「副長に肩を貸して、後方に下がれ。ここは、アイツと俺がやる！」

言うやいなや、福永は数メートル離れていた感染体の頭に3発の銃弾を叩きこんでいた。

「酒井！左頼んだぞ。」

素早く床に落ちていたショットガンを拾い上げた福永は、おもむろに右方向にいた3体の感染体に、ダブルオ-バツクの散弾を連続で叩きこんでいた。

流石の感染体も8発分の散弾（単純に8発には各8発の鉛弾が入っ

ているので64発の鉛弾を浴びたことになる）を浴び、3体が床でのた打ちまわるようにしていた。

かたや、酒井は先ほど吹き飛ばした2体の感染体を前に、右の感染体の腹に前蹴りをしてさらに後方に吹き飛ばし、その横の感染体には返す右足を大きく感染体の前で蹴り上げて、落ちる踵を感染体の脳天に打ち下ろした。

感染体が朽ちるのを確認して、後方に吹き飛ばした感染体が起き上がり向かってくる正面に対峙し、いきなり相手の右の膝を正面から蹴り抜き、膝が潰れて前のめりになった感染体の脳天に渾身の肘を打ち下ろした。

福永はのた打ちまわる感染体の頭に順番に銃弾を撃ちこんでいった。

丁度、中曽根が福永に肩を叩かれた時に停電が復旧したが、福永も酒井もそれに気がつきもせず感染体を葬っていた。

中曽根は竹原に肩を貸したまま立ち尽くし、竹原は膝の痛みも忘れ、酒井の信じられない感染体の葬り方に、ただただ口をあぐりと開けたままであった。

「相変わらず！お前の殺り方は自衛官じゃないな！
自衛官なら俺みたいに武器を使えよな！」

相変わらず、空手技でゾンビを倒す酒井にあきれ声で福永が言った。

「福永さんこそ、いつつも、3メートルとかの近距離でしか、頭に当てられてないじゃないですか！」

「そんな事を言うか？お前こそ、自衛官として武器のひとつも使ってへんやないか」

「福永さん、いきなり関西弁は卑怯ですよ。」

通路一面が血飛沫におおわれた修羅場で、まるで漫才のような掛け合いに、寸でまで死を覚悟していた竹原と中曽根は涙を流しながら大きな声で笑った。

少し前の築地班

「ん？何んだ今見えたのは？」

森は、ライトの灯りの隅に何か床を動くものが見えた気がして、そちらの方向に銃を向けて、数歩前にでた。

（何?!人が床を這ってる!怪我人?助ける?)

森が悩んでいる間に、床を這う男が更にライトの光の輪の中に入ってきた。

森の目には信じられない男の姿が写し出されていた。

男には、下半身がなかったのだ。

下半身の代わりに、血だらけのはらわたを引きずっていたのである。その男が、森が向けた灯りに反応したのか？

森に向かって何が映し出されているかわからない、白く濁った目を

向けて信じられない速さで這いずってきたのである。

込み上げてきた吐き気に勝てずに、森は床に膝をつき胃の中にあるものを大量に吐きはじめた。

それが合図かのように、暗闇のライトの視覚から感染体がうようよと現れ出したのである。

「う・撃てええええ」

築地は、あまりにも多く現れた感染体に対して当初のショットガンで弾き飛ばして距離を取り89小銃で留めを差す。

と言う戦術をすっかり忘れて89小銃の5・56ミリ弾を左右にバラまくように打ち出していた。

「食らいやがれ！」

築地のバディの坂下2士は、ライトが照らし出す感染体に向かい立て続けにショットガンをぶっ放していった。

装填されている弾丸は、通常の散弾ではなくバツクショットと呼ばれる12ゲージでシエル（実包）内に8発の鉛弾を有するタイプでありOOB・ダブルオーバツクと呼ばれる、スラッグ弾（単発弾）に次ぐ威力があり、近接近戦において最大の効果を発揮する、警察や軍隊で多用される弾丸である。

その凶器は、近距離であれば簡単に人に致命傷をあたえられる威力を持つが……感染体は頭部か頸椎に致命傷を与えなければならず。

吹き飛ばされた感染体は何事もなかったかのように、人肉を求めて

また起き上がってくるのであった。

全弾を撃ち尽くした坂下は、ショットガンをひっくり返し、ズボンのサイドポケットから散弾を掴み1発ずつ装填していった。

装填が済み、銃身の下部にあるスライド式のコッキング握りを持ち、銃口を上に向けて片手で勢いよく下方方向に向けて銃を降り抜いて初弾をチャンバーに送り込み、次に迫り来る感染体に狙いを定めた時、横にいてるバディの築地に体当たりをされた。

「な・何んなんだよ」

倒れながら築地の方を見たが、暗闇では何が起こっているかがはっきりと分からずに、床に身体が着いた瞬間に床を転がり距離を取りながら立ち上がり、ライトとともに銃口を向けたところ、築地が2体の感染体に噛み付かれながらも必死に抵抗している姿があった。しかし、既に肩には肉を喰い千切られた後があり

「班長！成仏して下さい！」

第29話 拡散 2 (後書き)

ご感想 ご意見 頂戴な！
無理して更新しているご褒美に！

第30話 拡散 3（前書き）

やけくそ状態です。

眠たいを通り越してます。

朝が憎い！

朝がどこから来るのか？居場所が判明したら、ポッコポッコにして…

…

第30話 拡散 3

坂下はシヨットガンの引き金を絞り築地もろとも、感染体に3発の散弾を打ち込んだ。

（班長つ！バディの約束！

お互いに噛まれたら人である内に……人として最後を迎えたまま留めを刺す！

約束は守りましたよ！俺も直ぐに行くと思いますから……三途の川で会いましょうや！）

涙で標的がにじむのを無視して坂下は銃口の先に感染体を探しはじめた時、森のバディである林の真後ろから感染体が襲いかかる瞬間を目撃した。

後ろから左肩を噛みつかれた林は、痛さの余り、手にしていた89小銃の引き金を引いてしまった。

バースト（1回の引き金操作で3発の銃弾が発射される）で！

都合3回に渡り噛みつかれた林は3回とも引き金を引いてしまっていた。

しかも、しっかりと保持されていない89小銃は竹原班や隊長が控えている方向に銃弾を浴びせていたのだ。

（チクシヨウ！班長に続いて林まで撃つのかよ！）

坂下は、林と襲う感染体に対して2発の散弾を叩き込んだ。

その途端に、坂下の左腕が物凄い力で掴まれた。

瞬時に身体を捻り、必死に抵抗しながら、ショットガンのストック（肩当て部分）を感染症の顔面に叩き込み、何とか逃れながらショットガンの弾丸を見舞った。

さらに近づいてくる感染症に発砲した後、次の感染症に対した時引き金がカチツと空撃ちし、残弾が空になったことを知らせた。

拳銃や自動小銃のように、空になった弾倉を入れ替えるだけと違い、ショットガンの装填には時間がかかる、坂下は装填を諦め、近寄る一番近い感染症に対して、ショットガンをバットののように振り回していた。

ひとしきり、胃の中身を床に撒き散らしかした森が周囲を見渡すと、襲われた築地を感染症ごと撃つ坂下を見た。

更に、坂下が次に自分のバディである林にも銃口を向けて散弾を発射しているところを見て、最後の精神の糸が切れた。

「逃げなきゃ！逃げなきゃ、撃たれる。」

坂下を見つめながら、床に座ったまま後退りを始め、何とか立ち上がりかけた時、最初に遭遇した臓物を引きる感染症に、ふくらはぎを噛み千切られた。

精神に異常をきたしていた森は痛みによる叫び声をあげることもなく、足を引きずりながら、たまたまにバランスを崩して床に倒れ込んだりしながら一路通路奥の貨物用エレベーターに向かった。

貨物用エレベーターまで30メートルをきつたところで停電が復旧したが、森にはそんな意識はなかったがむしゃらにエレベーターに向かうのみで一杯だった。

ようやく、エレベーターに到着し、ICカードをかざしてエレベーターに乗り込み、

1階のボタンを押したところで出血多量状態で倒れ込んでしまった。

大型の貨物用エレベーターは定員が80名を越す巨大なタイプであり、扉が閉まるのにもかなりの時間を要した。

森は振り返ることなくエレベーターを目指していたので、森を追いかけるように感染体の大群が続いていたことは知るよしもなかった。

エレベーターの扉が閉まる少し前に、感染体の先頭がエレベーターに到着し、エレベーターはセンサーによって扉を再度開くことを選択した。

こうして、地下2階で徘徊していた感染体は、更なる食場。

いや！狩人達は、大いなる大地へ獲物を求めて解き放されたのである。

人類は、今この瞬間に生態系の頂上から引きずり降ろされようとしていた。

取り残され坂下は、その後2体の感染体を葬ることは出来たが、多勢に無勢……何ヶ所もの噛み傷を受けながら、最後は自分の自動拳銃を口にくわえて引き金を引き『人』として最後を迎えた。

福永

「と！くだらない揉め事をしてる場合じゃないで！」

「酒井！装備を再点検したら、築地班のところまで行くから用意しろよ。中曽根は竹原さんの応急処置と本部への連絡を頼む！見た限りは全滅臭いが、兎に角行くぞ。」

倒れている隊員のズボンのサイドポケットから散弾を何度かに分けて自分のサイドポケットに移し、更にショットガンに装填しながら福永は小走りで向かった。

福永は…数体の感染体の死体と、築地、林、坂下の死体を発見し、念のために生死を確認していた。

「森がないな？」

福永が1人足りないことをいぶしがっていた時に

「た・大変つす！え・えエレベーター！」

酒井の素っ頓狂な声に釣られ、貨物エレベーターの方向をみて、ショットガンを床に落としてしまった。

「嘘だろ？彼奴、エレベーターの操作が出来るのか？」

「本部！本部！こちら福永！S-3の大会議で研究会があつた模様

！そこが感染体に襲われ、大量に研究員が感染した模様です。
大量の感染体が・・・

S-2の大型貨物エレベーターで上に上がりました！

繰り返します。

大量のゾンビがエレベーターで上に上がりました！

酒井！エレベーターまで走って何階で止まるか確認しろ！

本部！本部！」

「こちら青島！オープンチャンネルで流す！

無線が復旧したばかりで通信が混乱している。

至急用件がある者以外、一旦無線を切れ！

至急用件者は最初に一言で用件を述べる！

以上。」

「福永！感染体の被害拡大の恐れについて！」

「青島だ！どういうことだ！」

「福永です。地下2階です。」

よく聞いて下さい！

S13の大会議で研究会があつた模様！

そこを感染体が襲い大量の感染体が発生した模様です。

今その感染体がS-2の大型貨物エレベーターで上に上がりました！」

「とーくーなーがーさーん。いつーかーいーにーとーまーりーまーしーたー」

「なお、エレベーターは1階に止まった模様です。以上。」

「福永！何故、阻止しなかつたんだ！他の者はどうしたんだ！」

田坂が無線に割って入ってきた。

「お言葉ですが

西脇分隊は私と酒井を残して全滅！

斉藤分隊は暗闇の中で感染体と遭遇し殲滅活動開始し、竹原副長が重傷、他生存者中曽根だけです。可能な限りの排除は試みました！

感染体は暗闇にも関わらず、研究会場を襲つたのかもしれない。

私と酒井が到着した時はもうエレベーターの扉が閉まる寸前でした！

エレベーターが何故使えたのかは不明です。

なお、斉藤分隊の森3士が行方不明です！」

「な・なんてことだ！」

田坂はガクガクと震えだし

「き・貴様達がキチンと感染体を始末しないから…ど・どうすれば！」

あ・青島ツ！対応策を10分で作れ！

責任は作戦立案の貴様だからな！」

本部全員が冷たい目で田坂を見ていた。

「警備！田坂3佐を拘束！外に出して監視しておけ！」

全館の隊員に無線でコードレッドのアラーム発令！」

矢継ぎ早に命令を下す青島に叫びながら飛びつこうとした田坂は警備のスタンガンで意識を奪われて別室に連行された。

「通信士！回線を織田陸将補につなげ！繋がったら回せ！」

本部員は本部維持の最低限の業務に絞り、手の空く者は館内の監視カメラで現状を確認し報告！

取りまとめは黒瀬！

警備！今、本部にいてる警備の員数は？

待機の警備班と実働の班の状況を把握！

岡田博士以外の最重要保護対象者の確保に必要ながあれば班を組み替える！

最重要保護対象者の確保が出来れば、順次レベル下げて、レベル3の研究者まで拡大！

初動は青山班を当てる！

保護対象者の確保の指揮は岩永3尉！

三笠2曹！

残りの分隊、馬場分隊と鶴田分隊と、斉藤と須永のところの明け勤務者で1分隊隊を編成しろ！

3分隊を研究所の外に出すぞ！

馬場か鶴田か用意が出来た方から先に、1階または建物付近に散開し感染体を索敵、殲滅活動！

警備は、藤原と藤波の班を合体させて藤原に指揮を取らせて、館内の安全確認に向かわせる！

それと、地下2階の生き残りを引っ張って来い！
いいか！時間との勝負だ！

以上。散開！」

「2尉！陸将補と回線開きました！」

「よし！こっちに回線まわせ！」

雛形（遠藤博士の助手） 4時間前〜現在

遠藤先生になんて報告したらいいんだろう？昨晚たまたま、話しをした自衛官が賛同したせいで…勝手に……実行してしまった！

少しだけ、ほんの少しだけ僕の血液を口に垂らしただけで、いきなり手を掴まれてしまった。

慌てて、引き剥がしたけどあいつの爪で指を引っ搔かれてしまった。

引っ搔かれたが、体液や粘膜感染ではないから大丈夫だろうが…身体はかなりダルいな…

あの勢い！やはり僕の仮説、空腹は正解だったようだ！

でも、どうやって先生に報告したらいいだろう？

何故って？決して自己ピーアールじゃない！

終博士より、絶対に遠藤先生の方が優秀なんだ！なのに、遠藤先生にくだらない採血なんて仕事をまわしやがって！

喰ってやるっか？

しかし、何だか、無性に肉が食べたいな！

指が凄く痒い！痒い！痒くて堪らない！

ん？何だ！かきむしり過ぎて、骨が見えてるじゃないか？

包帯かなんかを探さなきゃ！

いや、それより食事だ！お腹が空いた…

（雛形くん、今日の勤務は終わってるはずだよな？夕食にもこないし…

遠藤博士に聞いたら、昼から自室に閉じこもってるって…

いきなりで怒るかしら？

良いわよね！だって、2週間前からお付き合いしてるんだもんね！

ここね！）

雛形の恋人である、矢部良子が夕食に現れないことを心配し訪ねてきたのである。

手には手作りらしいお弁当を携えていた。

ICカードをかざして雛形の部屋に入った矢部は、机の前にフラフラと揺れながら立ち尽くしている雛形に声をかけながら初めて雛形に後ろから抱きついた。

「？」

矢部は雛形の身体にまるで弾力がないことに気がついた。

しかも、死人のように冷たかった。

看護師である矢部には、はっきりと自分が抱きついているのが死人だと確信出来た。

雛形から離れた矢部は

「嫌!どうなっているの?雛形くん?」

振り返った雛形の目は白く濁り、口からは腐臭を吐き出していた

「き・きやああああ!」

警護 青山班

「例の感染体とやらが…誰かのミスで部屋から出ちゃったらしいぜ」

「そうらしいな。でも動きは遅ええんだってよ

初めてビデオで見た時にはビックリしたけど…

まあじっくり狙えばなんとかなるだろうよ」

「ここに来てからの4日間の実弾練習で過去5年間分以上の実弾を撃つたしな!」

しかし、かなりの数だと連絡があったぜ。
停電騒ぎで数はわからんらしい。」

白峰2曹と黒田3曹は、レベル1にランクされている各博士の助手の部屋を確認に回っていた。

既に柊博士の第2・3助手と博士達の作成データの分析・整理を担当している職員3名の5名を保護して引き連れていた。

「でも、地下1階にはいないんだろ？」

福岡にはかなりの部隊が展開されてるらしいから…すぐに制圧出来るんじゃないか？」

末端の自衛官を萎縮させず士気を低下させないために、アメリカ軍が制圧出来なかったことは原則尉官以下には知らされていなかった。詳細を知らされていたのは、戦闘を専任している部隊だけであった。

「おう、ここだ！」

「BA-1-201つと！」

黒田は左腕に装着されている情報端末に、保護完了のステータスと更新した。

その間にICカードで部屋の扉を開けた白峰は、開いた扉から出てきた2本の手に頭を捕まれて一瞬の内に室内に引き込まれた。

何かが噴き出すような音を疑問に感じた黒田が部屋の中を覗くと、白峰が床の上で首から血飛沫をあげて倒れていた。

「白峰！」

黒田が白峰に駆け寄った時には、既に白峰の身体は最後の『生』を吐き出すかのように……小刻みに痙攣していた。

「白峰！」

な・何があつたんだ？」

黒田の目線の先にピンクのサンダルを履いた足が現れた。

「ん……」

誰だ？と目線を足に沿ってあげていった黒田は、どす黒い染みを視た瞬間に

ヤバイ！

咄嗟に右の太ももに装着されていた自動拳銃のホルスターに手を伸ばし拳銃に指先が触れたところで、右肩に信じられない痛みを感じた。

恐る恐る自分の右肩を見ると、既に肩の肉は喰い千切られていた。

「に・逃げて下さい！」

そう警告するのが精一杯だった。

そのまま、雛形だった者に押し倒された。

矢部だった者は、咀嚼しながら通路に新たな肉をあらたな獲物を求めて、通路に向かって踏み出していった。

第30話 拡散 3 (後書き)

少し 疲れました。

何故？計画的に執筆、投稿出来ないんでしょう？
ご意見・ご感染いや！ご感想お待ちします

第31話 拡散 4 (前書き)

来週から出張生活に入ります。

更新が出来るか不明ですので一話だけでも

お読みいただければ幸いです。

第31話 拡散 4

システム復旧の二人組

「よし！メインフレームの再起動は終了時したぞ！

秋葉！あとはお前の腕次第だ。

無線・ネットワーク・電監視カメラ・電話の順に再構築できるか？」

携帯用の小型ノートパソコンを起動させている秋葉はコクンと小さく頷いて

つかつかと毛利に向かって歩いてきてすれ違い、メインフレームに自分のパソコンを接続した。

「毛利准尉。先週の会議の私の提案、覚えてます？」

毛利は、きたか！と苦笑いをした。

「緊急時のメインフレームのバックアップデータの件か？

確かに、お前の言う通りになったわな。

しかし…真鍋さんにも逆らえないからな、俺は…。

お前の案はいい筋してるとは思ったぜ。

でもよそのプログラム自体がな。

こんな組織だから…はい、そうですねかとは使えないんだわ。」

「僅か18の小娘が作ったプログラムを認めるのがいやだったんで

すよね。」

喋りながらも、信じられないスピードでキーボードの上を走る、秋葉の指先にたまげながら毛利は諦めたように

「お前の言う通りだよ。真鍋さんも、陸自ではトップクラスの自負があつたんだろうな。

ポツとでの……

わりい！な

小娘が！てなところだつたんだろうよ。

で……お前さん。今、何のプログラムを走らせてんだ？」

エンターキーを大袈裟に叩き終わり、オーケストラの指揮者のように両手を広げおえて、秋葉は、くるりと回り毛利に顔を向けた。

「やっぱり！毛利さん爪を隠してたでしょう？」

何で、私がプログラムを走らせたと気がついたんです？」

「つ、爪？なんだ？そりゃあ？」

まあ。話しの流れから見りゃ。見返すチャンスじゃねえかよと思うだろつがよ。

てか…お前。いっつも勤務明けたらメインサーバに不正アクセスしてっただろう！

一応、不正侵入されたら俺の責任だかな。ログは完全に消さしてもらったからな。

しかし、かなわんことにお前以外にももう一人居てやがるだ、こんな閉鎖的などころによ!」

「やっぱり!毛利さんって、普段は適当に仕事流しているだけですよ?」

ここのサーバの不正アクセスを感知出来るって、私の知ってるレベルでは、

スモールマンかバカボンかキャプテン・G。

もしかしたら、チームBoo?

くらいしか思いつかないんですけど。」

「て、全員。名だたるハッカーじゃねえかよ。」

でも、最強のおぼっちゃまがぬけてんじや……………

なるほど!おぼっちゃまは俺の目の前の、寝癖小娘か!

こりゃ、一本取らたな。

毎夜の不正アクセスはバックアップデータのためか?」

「システム構築の要件書を見たんですけど、あるところまで侵入すると要件に載ってない、特殊なファイアウォールが出てくるんですよ。」

2年前に統合幕僚本部に侵入した時も非常に似たタイプにぶち当たったんで……………

更にその後のトラップに引っかかっちゃって……………ピンポンダッシュヤになっちゃいましたけど。」

で、誰が作ったのをかしりたくて自衛隊に入ったんです。

隊内の実力分布から見たら、真鍋さんが一番怪しかったんですけど

……

実際にあつたら、テンでど素人ですし…

毛利さんでしょ？」

「はっ！ばれてりゃ、惚けても意味ねえわな。

俺だよ。2年前に『さつちゃん1号』が突破されときゃあ、シヨックだよ。

挙げ句に無駄とは思ってて念のために用意してた『黒髭』にひっかかりやがるもんで……

更にシヨック倍増よ！

『黒髭』に引つかかる。イコール大人ではない。ってことになりゃ、『さつちゃん1号』は子供にハッキングされたってことだかな。」

右袖で涙を噴くまねをしている毛利であった。

「あれ、『黒髭』って言うんですか。確かに、社会人になっちゃったら、引つかからないですね。」

「で？目的は達成。辞めんのか？」

「正直、迷ってます。私って、結構普段を気にしないタイプだから、だらしく見えませんか？」

普通の会社だと間違いなく規格外扱いでしょ？」

ここだって、毛利さんだけが普通に接してくれるだけですし……」

「まあ、システム屋に近い匂いみたいなもので、お前を放っておけないだけだよ。」

ついでに言えば、だらしく見えるんじゃないやなく、女性としては十分にだらしないと認識した方がいいと思うがね。」

ピーーと言う音がなり、秋葉はメインフレームに駆け寄った。

何度か、パソコンを操作してメインフレームに指示を送り

「毛利さん、完了しました。」

でも、2点問題が……」

毛利は秋葉のところに駆け寄り、報告を聞くまでもなく

「1つは入退室管理だな！真鍋さんが組んだプログラムなんだけどバグだらけなんだ。」

どれどれ………ひっでえなあ。中学生レベルのミスじゃねえかよ。

チッ、こんなレベルの設計にパスワードつけるかあ？ふつう？

あの人は、わかんないんだよな。こんな初歩的なミスをするかと思
うと……

予測できない優秀なプログラムを書き出したりで……

しかし、現状ではヤバい問題になるな。」

「えっ？でも、25回の開閉動作でセンサーが、最終更新設定に戻るじゃないですか！

25回の意味が分からないですけど……」

「館内の者は自然とICカードを利用するだろ。」

しかも、センサー自体がICカードをかざすタイムラグを10秒としている。

つまり、通常ではセンサーでの入退室はあり得ないんだ。

でも、今は感染体はそのセンサーで各部屋に入ることが出来るということになるんだ。

更に、よく見てみな。再起動後に本部のホストコンピューターから指示を出さなきゃ作動しないことになってる。」

秋葉は、毛利の顔の真横で爪を噛みながら

「ほんとだ！しかし、わかりにくい指令コマンドですよね。」

「あの人の特徴だよ！ダッシュで本部に戻るぞ！」

「本部！ 青島2尉！

毛利です。」

「毛利か？助かった！一斉に無線が入って大変な状況なんだ！

もうしばらくそちらに待機しておいてくれ！」

「参ったな。こちらの話を聞こうともしないぜ。

しかたなねえな。こっちから本部に乗り込むとするか！。行くぜ。」

メインフレームは、地下3階にあり、エレベーターなどから一番遠い位置にあるため、徒歩で戻るしかなかった。

本部から行く場合は、階段を駆け下りるだけで済むが、戻るのは階段を上がらなければならず、秋葉の銃器が意外とかさばり、地下1階まで思ったより時間を要した。

「よしゃあ！後は平坦な通路だけだな。

しかし、お前さん……ちょっと多すぎへんか？

むちゃくちゃ重いぞ。

弾、持ちすぎと違うか。」

扉を開けながら、担いでいたバックパックをドサリと床に下ろした。

「パーン！」と小さな音が聞こえたような気がして、毛利は思わず通路を振り返った。

「な・何だ？お前も聞こえたか？」

「銃声みたいですね。」

秋葉は腰のホルスターから自動拳銃を抜き、スライドを引きチェンバーに初弾を送り込み、安全装置をセットしホルスターに戻しながら答えた。

更に無言のまま、89小銃にも初弾を装填して、バックパックから

予備弾倉を携行するためのベストなどの装備を引つ張り出し次々と武装していった。

本来、非戦闘員である毛利も秋葉の雰囲気呑まれ見様見真似で同じように装備を身につけ始めた。

89小銃を手に背中にショトガンを背負った秋葉と、両手にMP15を持った、即席戦士が誕生した。

「毛利さんは実戦訓練は受けられたんですか？」

何か、あまり『さま』になつてませんけど？

まるで自衛官じゃ無いみたいですよ。」

「ない！」

自慢じゃないが、俺は文部科学省からの技術出向なんだよ。兵隊さ
んじゃないんだ！

あんまり長い間出向してるんで…みんな勘違いしてるがな！

だから、実弾を撃つたのは…ここに配属された4日前。

使い方を知ってるのも、ピストルのピー22何とかこのマシンガ
ンのNPなんたらだけ！

但し！教えてくれた鈴木士長によると、一般隊員より命中率は高い
らしいぞ！

特に、動く標的に動きながら当てるのは天性の素質だって言ってた

ぜ。

まあ、黒瀬に言わせりゃ。変わり者は変な才能があるんだとよ。お前と同様にな！

そうか！黒瀬に！」

「本部！本部！黒瀬曹長！

こちら毛利！」

「こちら、黒瀬です。

無線連絡が混乱してて緊急以外は禁止されてるんです！

用件は何ですか？どうせ厄介ごとでしょうけど。」

「空きチャンネルをひとつ教える！

チャンネル、変えりゃ2尉も文句ないだろ！」

「2で待ってます。2尉は今偉いさんに状況説明中です。」

毛利は、素早くチャンネルを設定し、呼びかけた。

「黒瀬か？」

「ハイハイ、なんつすか？

今、すげえ状況なんすつよ。

地下2階で、若手の研究会の会議室が感染体に襲われたみたいで…。

西脇、斉藤、両分隊で生き残りが僅か4名つす。1名、重傷なんで

実質は3名ですが…。

最悪で、ざっくり…50から80近い感染体が発生しちまったみたいなんです。」

「な・なんてこった！真鍋さんが言ってた通りじゃないか！で、感染体は地下2階か？」

「いえ…：そ、それが、何でか分からないっすけど、貨物用のエレベーターに乗って1階にいつちまって…」

監視カメラから見たところ、1階に20体くらいが徘徊してて…：後は建物の外に出たっばいです。」

馬場分隊が駐車場ルートで外をに、鶴田分隊がB階段ルートで1階を、索敵・殲滅行動予定です。」

で、須永、斉藤の明け勤務者で1分隊を編成して馬場分隊の応援に出します。」

馬場、鶴田両隊とも既に展開開始しました。」

後、2分で編成した隊が馬場隊の応援に出ます。」

「もしかして、戦闘部隊が空っ欠になっているのか？館内はどうなってるんだ。」

「足立班は柊博士やキャサリン博士に付いています。他の保護対象者を青山班と本部詰めの住友班の半分を割いて地下1階で集めています。」

警備の藤原・藤波の両班が地下2階の索敵に出たばかりです。地下2階は最優先で監視カメラで確認し、2体が徘徊してるのを確認してます。」

「地下1階の監視カメラの確認はどうしているんだ？」

「地下1階ですか？確認順位最下位なんで……」

「黒瀬！よく聞け！さっき、銃声が地下1階で聞こえたんだ。至急に地下1階の監視カメラをチェックするんだ！」

本部の警備班に注意歓喜するんだ！」

「了解！」

（本部はICカードがなきゃ入ること出来ないのに、毛利さんもびびって判断力低下してんじゃねえか？）

「おい！地下1階を写してくれ！」

オペレーターがパソコンを操作して地下1階を写し出した。

「毛利さんの取り越し苦労か。」

順々に写し出される画面を覗き込みながら、黒瀬は毛利に返事を返そうとした瞬間に、画面に黒っぽい染みのような物があるのを見つけた。

自分のパソコンでその画面を拡大して、信じられない物を見たように、黒瀬の目が飛び出さんばかりに大きく見開かれた。

「け・血痕？」

突然、画面の血痕らしき物を、自衛官が履いている長靴が踏みつけた。

（誰か知らんが、いいタイミングで現れてくれるな！）

画面右上の映し出されている場所を確認し、画面をズームアウトさせながら

「地下1階のC通路、5番付近にいてる者！聞こえたら返事をしてくれ！」

監視カメラがなかなかズームアウトを開始しないことに苛立ちを感じながら

「地下1階 C通路にいてる者！返事を！」

やっと、カメラがズームアウトした。

「……………ヤバいぞ！」

そこには、カメラに映し出された自衛官以外に7〜8体の感染体があった。

保護対象者の確保に赴いた青山班の隊員と保護対象者達であった。

黒瀬は、無線の警報ではなく。館内放送の警報装置を作動準備をし

「こちらは本部です。地下1階を感染体が徘徊しております。各自は部屋から出ないで下さい。

警備班が感染体を排除するために発砲する場合があります。」

とマイクに吹き込み、自動録音で同じ案内3回流れるように設定し

「地下1階に感染体発見！各個、装備装着！ゾンビだ！」

本部内に警戒を呼びかけて、カ一杯にアラームのスイッチを押した。

第31話 拡散 4 (後書き)

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第32話 拡散 5 (前書き)

ノリノリに書いてますが……

確実に、睡眠時間は削りとられています。

だんだん主人公が田中さんから

福永さんと酒井くんになりそうで

早く、研究所編（今頃、研究所編にしときゃ良かったかと思ってます）から

福岡市街地編（ほんとか？）に進んで 田中さんを出さないといふいと他の作品に行ってしまういそうで

焦ってます。

第32話 拡散 5

「はい、確かに……拘束しました。
3分隊で索敵、殲滅行動に出しましたが……
正直、外に出られたら……
どちらにせよ、そちら側からの部隊派遣もお願いします。」

青島が織田陸将補に状況説明をしていると、にわかには本部内がざわめきだし、非戦闘員達が自動拳銃を手にし始めたことに気づいた青島は、一旦連絡を中断し

「岩永！黒瀬！」

と叫んだ時

ビイッ・・・ビイッ・・・ビイッ・・・

けたたましいアラーム音が鳴り響き、薄暗い本部内は赤い警告色の点滅につつまれた。

「こちらは本部です。地下1階を感染体が徘徊しております。各自は部屋から出ないで下さい。」

警備班が感染体を排除するために発砲する場合があります。」

「くるせ・・・！くるせ・・・！

何が発生したんだ！報告しろ・・・！」

黒瀬のデスクの方に目をやると、ごった返す本部員を掻き分けながら、黒瀬と岩永が近づいてきていた。

青島は田坂などと違いアラームを勝手に発令したことには一切触れずに

「何があつた？」

インカムを操作しながら黒瀬が答えた。

「地下1階に感染体約8体発見。青山班の隊員と研究所員達です！」

「今、藤原達を呼び戻してます。」

言い終わるや、岩永はインカムからの返事を聞くために左手をインカムに添えて指示を出し始めた。

「感染体は地下2階から地上に出たんじゃないのか？」（青島）

青島も他の本部員にしろ、自分のP226（自動拳銃）を引き抜きスライドを操作し発砲準備をした。

「わかりません。でも、青山班の連中が感染しているところを見ると……」

地下2階とは違う個体かもしくは、はぐれた個体が地下1階に出て来たのかも知れません。

しかし、はぐれ個体なら、奴らはエレベーターのみならずICカードを使用して扉を開けて階段を登れることになります。」

自分の想像が、如何に恐ろしい現実を予測しているかに身震いしながら黒瀬が答えた。

「ICカードが使えるのか？
それだけの知能があるとなると厄介だな。

！本部警備班に入り口を固めさせるんだ！

発見した通路番号は？」

岩永が本部警備班長の元に飛んで行った。

「た、確か…C通路の5番…でした。」

「かなり近いな。普通に歩いたら2分もかからない距離じゃないか
！」

少し青ざめながら、青島が黒瀬を引き連れ監視モニターの前につい
た。

「高柳！その後の感染体の動きは？」

黒瀬は監視を指示したオペレーターに叫ぶように確認した。

「監視カメラの音声もモニターするようにしました。」

他の通路、具体的には居住区域のD通路で、青山班長と末永が3体
と遭遇し交戦！

3体は無力化しましたが…一緒にいた保護対象者の5名が感染し
て、後退しながら交戦中です。

そこに、等々力と清水に研究所員7名。合計9名の感染体が合流し
て、班長達は交戦を断念して全力で後退中。

倒したしりから増えていつてる感じです。

青山班の14名の内、感染体になって徘徊している隊員が6名。感染体と差し違えて絶命していると思われる者が2名。行方不明が2名。生き残り2名です。

C通路の感染体は、青山班長達が発砲した途端に向きを変えて銃声の方に行きました。

音に反応していように見えます。

それ以外、監視カメラからの情報だけですが10体近い感染体が確認されています。」

「2尉！本部警備班長の志村曹長が4名を残し青山班長達の救出を願いで出てますが藤原達を呼び戻していますので…却下しました。」

岩永が本部警備班と本部警備の確認を終えて戻り、警備班長のからの要望と却下したことを報告した。

「わかった。」

藤原達は、今どこのあたりだ？」

「藤原班！現在地を連絡せよ！
繰り返す、現在地を連絡せよ！」

岩永が、インカムに唾を撒き散らしていた。

「こちら、藤波！」

地下1階にも感染体が出現とのことで……

藤原と相談し、隊の全滅を防ぎ地下1階の救助を行うために、二手に分かれることにしました。

元の班に戻しエレベーターに乗れなかった5名を追加して行動中。

藤原班はA号エレベーターで今上がり始めたところです。
我々はE階段で上がってます。」

黒瀬が無線に割って入った。

「藤波さん、E階段の地下1階出口に毛利准尉と秋葉2士が居るはずなので保護お願いします。」

「了解。二人に連絡がつくなら、扉を開けたままにして数メートル離れているように指示しておいてくれ！2分とかからない。」

黒瀬は藤波に返事をするのも忘れて、毛利達の無線回線にチャンネルを切り替えて喋りだした。

「毛利さん！黒瀬です。毛利さん？黒瀬です。返事をして下さい！」
数十秒が経過した。

突然にインカムに毛利の声が入ってきた。

「黒瀬、わりい！状況はどうなってる。」

かなり小さな声で毛利が話すので聞きとりにくい黒瀬は

「もっと大きな声で話してくれないと聞こえにくいですよ。」

「すまん！感染体が通路の角に3体いてるんだ。」

さつきから、こちらの方に顔を向けているんだか…気づいてはいないみたいなんだ。

秋葉の感だが、見えてなくて、音に反応するんじゃないかと思われる。

さつきまで4体立っただが…1体が急にどこかに行ったと思った
ら、暫くして凄いい悲鳴が聞こえた。

多分、どこかの部屋から研究員が出たんだと思う。

で…何だ。

藤波が来る？

駄目だ！そんな大勢で駆け上がって来たらいつぺんに集まってくるぞ。」

「了解です。」

毛利と話しをしながら、紙に『藤波班停止』と書き、岩永に押し付けた。

読んだ岩永は抗議しかけたが、黒瀬の眼に逆らえずに藤波班に停止命令を出していた。

藤原班

「班長、10人はやっぱりきついですよ！」

隊員が愚痴るのを

「文句を言うな！」と

藤原は一喝した。

「松坂と和久井！もう直ぐで地下1階だぞ。扉が開き次第飛び出して、安全確保しろ！」

藤原に指名された二人は、狭い中でショットガンを握り直した。

チン！と音がなり、コンピューターの電子音声が

「地下1階に止まります。」と到着を告げた。

「俺が先に出るから」

右手にいる松坂が和久井に飛び出す順番を告げた。

「了解！気をつけて！」

本来なら、ショットガンを構えて銃口を前にしてエレベーターから出たかったが……

構えることが出来ないため、銃口を天井に向けた形で飛び出す用意をしていた。

扉が開いた。

飛び出そうとした松坂が見た目ものは、両手を前にだし掴みかかるうとしてくる3体の感染体であった。

「うあっ！」

松坂は叫ぶ間もなく感染体に抱きつかれる格好になった。

何事が起こったのかを一瞬に察した他の隊員達が、一気に松坂を盾に感染体をエレベーターから押し出しかけたが、隊員達の装備がお互い引っかかり、思うように動けなかった。

既に松坂の首にはがちりと感染体が噛みついており、隊員達は松坂の首から噴き出る血飛沫を浴びることになった。

松坂は全身を痙攣させ、あろうことが、ショットガンのトリガー（引き金）を引いてしまった。

発射された散弾のその暴力的な破壊力はエレベーターの天井と、エレベーターを吊り下げているワイヤーに襲いかかった。

エレベーターの天井をやすやすと破った散弾の内、数発がワイヤーを傷つけた様子を見せ、エレベーターはガクンと片方向に傾き、ギシギシと軋み、ブチブチとワイヤーが切れていく音がなり響いた。

隊員達は口々に呪詛をはきながらも、そのまま怯まずに押し続け、4名の隊員の身体がエレベーターから出たところで、ワイヤーはエレベーターとその乗組員の重さ耐えられずに地下3階へと落下していった。

押された勢いそのまま飛び出した和久井は、自身の足につまずいてしまい、数メートル先へと派手に転がってしまった。

しかし、それが幸いしたのかも知れない。

転がり終わり、その勢いで手放してしまったショットガンを拾い上げて、振り返ったエレベーターホールでは、和久井以外の3名はエレベーター落下から生き延びたのではなく、感染体の活き餌として生かされただけだったのかも知れない。

「うがああああ。」

「いでえええ。」

「わ・く・ころ……し………」

「うおおおおおっつ！糞つたれえええー」

和久井は、仲間の隊員共々3組に2発ずつの散弾を撃ち込み、ピクピクと動きだそうとしている松坂にも留めの散弾を頭に撃ち込んだ。

しかし、エレベーターの落下音に続き、これだけの銃撃の音は付近の感染体に大きな声で呼び掛けているのと同じことであった。

音が聞こえる範囲にいた感染体は、まるでハーメルンの笛吹きに呼ばれたかのごとく、A号エレベーターに集結するためにフラフラ、ヨタヨタ歩き始めた。

エレベーターホールにいた感染体を排除した和久井は、開きつ放しのエレベーターの扉から、顔を出し、ライトで落ちた先を照らしてみたら地下3階は遠くはつきりとは見えないが動く者はいなかった。

何かを引きずるような音に気づいた和久井は、音の方向、エレベーターホールから地下1階に繋がる通路を見た。

「う・嘘だろ？」

ざっと見ただけで、10体近い感染体が通路から出て来かけていた。

和久井は、慌てて骸になった仲間の89式小銃を拾い上げて、予備弾倉をかき集めた。

「まだ、まだ、大丈夫。焦るな、焦るな。」

と自分に言いきかせ、89式小銃、自動拳銃に初弾を装填して、ショットガンにも弾を込め始めた。

感染体との距離が10メートルになった時、和久井は89式小銃をフルオートで左右に振りながら撃ち始めた。

感染体の身体に当たる度に、感染体は身体をよじったようにのけぞるが、一步一步と近づいてくる。

僅か20発の弾倉はあっという間に空になり、その都度新しい弾倉を89式小銃に装填しては撃つを繰り返した。

弾倉を7個使ったところで5体の感染体がボロ布のようになり崩れいった。

和久井は最後の弾倉を装填し、一番近い感染体の上半身に全弾を撃ち込みさらに1体を穴だらけにした。

そして、89式小銃を感染体に投げつけて

立てかけていたショットガンを握り

5発の散弾を使い、残りの感染体を倒すことに成功し、とうとう現れた10体の感染体を排除することに成功した。

ショットガンに、追加の弾を装填してたところで手持ちの散弾が尽きた。

予備弾薬を持った後輩は地下3階に落ちていった。

「どうすりゃぁいいんだよ。班長。」

10体の感染体を倒したところで、たった一人、しかも残弾も残り僅かとなり一気に不安がのしかかり、自然と涙が溢れ出てきた。

涙で霞んだ目に、通路から足を引きずりながら現れた自衛官が見えた。

（助かった！）

泣き顔を見せるのが恥ずかし、袖口で涙を拭き。

助けの礼を言おうと顔をあげると助けにきたのは自衛官ではなく、襲いにきた元自衛官の感染体だった。

絶望感を感じた和久井は力なくその場にへたり込んでしまった。

和久井は、ホルスターから拳銃を抜き、口にくわえ最後にもう一度奇跡を願いながら通路に目を戻した。

(やっぱり駄目かあ)

「 えっ！ええええええー！ 」

信じられない光景が目の前で起こったのだ。

突然、大柄な自衛官が感染体の逆の通路から現れて一閃！踵落としで感染体を葬ったのだ。

さらに、その大柄な自衛官の影からもう一人自衛官が現れ、和久井からは見えない位置にいてるらしい感染体にきっかり3発ずつ発射するバースト射撃で感染体を撃つていた。

そして、自衛官を背負った自衛官が和久井に向かってきた。

「 衛生兵の中曽根だ。大丈夫か？
噛まれたりしてないか？ 」

和久井はただコクンと頷いた。

福永、酒井、中曽根、竹原の4人組みであった。

待機を命じられといたが、エレベーターの落下に気づいて地下2階から上がってきたのだった。

相変わらず、酒井は福永に

「 感染体より、お前の方がえげつない殺し屋や！ 」

と、いじられていた。

バラまかれた空薬莖を見て福永がはニヤリと笑い

「素手の殺し屋の次は乱射のアル・カポネか！
俺は福永だ。宜しくな」
と、手を差し出した。

第32話 拡散 5（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第33話 拡散6（前書き）

出張前の最後の投稿です

第33話 拡散6

藤波の連絡を受け、青島、黒瀬、岩永は監視モニターを A号エレベーターに切り替えて、藤原達がエレベーターに現れるのを待っていた。

突然、カメラの死角からエレベーターに向かう感染体が現れた。

「ヤバいぞ。扉を出た瞬間を襲われる！」

黒瀬が悲鳴に近い声をあげた。

「いや！訓練通りにやれば、扉が開けばショットガンを持った隊員が制圧行動を取るはずだ」

岩永が祈るように言った。

その後、監視モニターの映像は和久井の体験のままが映し出されていた。

同じ画面に見入っていた高柳は、ヘッドフォンから複数の悲鳴が聞こえることに気がついた。

（いつから？聞こえていたんだ？）

音を検知した監視カメラを選別する命令を操作用のパソコンに打ち込み、どこで悲鳴が起こっているのかを確認しようとしたところ、5箇所のカメラで音声反応があることがわかった。

急いで、その5箇所のモニター画面を分割表示した。

「……………」

通路には数え切れないほどの感染体うつっていた。

大半が研究所員であり、示されたエリアと通路番号は居住区域であった。

「2尉！居住区域に感染体大量発生！画面切り替えます。」

高柳の悲鳴のような報告と同時に、和久井の画面から、通路一杯の感染体の画面に切り替わった。

「こ・こんなに？… な・何で… 増え続けるんだ！」

黒瀬が力なく床に崩れ落ちながら絶叫した。

「り、理由があるはずだ！監視カメラの映像を遡ってチェックするんだ。」

青島は、黒瀬と高柳に指示を出しながら、岩永を手招きで呼んだ。

「いいか！本部警備班全員で入り口を固めさせる！」

それと、数名を選別して、警備班のバックアップにつかせる！2名に1名程度でいい、予備弾薬の補給が出来るようにしろ。

最悪の場合には弾幕を張るつもりで撃たすんだ！しばらく任すぞ！

通信兵、織田陸将補に回線繋げ！」

毛利と秋葉。

「秋葉よお。すげえ音がして、戦場みたいな銃撃の音がしてなのに向こうの3体は動かんよな？何故だと思っ？」

「確かにおかしいですね。あの3体以外は通り過ぎて音に向かってくるんで……音に対する仮説は間違いないと思っんですが……」

「まだこっちの方を向いてるよな？何故こっちを向いているんだろっ？」

「そんなこと、私に分かるはずないじゃないですか？それより、音に向かっただったゾンビの数、すごい数でしたよ！ここに住んでいる研究員、全員が感染したじゃないですか？」

このまま、ゾンビとにらめっこしててもしょうがないよな。秋葉、ゆっくりと階段をおりて、藤波達を呼んで来い。

最悪は実力行使で切り開くしかないかも知れないからな。」

「了解。毛利さん1人で怖くないですか？」「ガ、ガキじゃないんだ。マシンガンだって持つてるし、それより早く呼びに行け！」
音を立てずに、秋葉が扉の向うに消えた瞬間に、急にゾンビ達はこちらの方向の興味をなくしたように、フラフラとしだしたかと思っ
と、3体とも同じ方向に進み出した。

「何なんだ？秋葉がいなくなった瞬間にこっちの報告に関心がなくなつたみたいだな。音じゃなかったら……何だ？」

俺と秋葉が2人だとこちらに関心があり、秋葉がいなくなると関心がなくなるといふことは、問題は秋葉ということか……

俺と秋葉の違いは？男と女？だよな。でもその違いは見ないと分からないよな……もしかして、匂いか？でも、秋葉は香水なんざあつけてなかつたし。」

色々と考えも巡らしている間に、秋葉が藤波班を引き連れてきた。

「准尉。藤原んところが1名を残して全滅です。移動に使ったエレベーターが落下したんだそうです。岩永3尉から連絡がありました。」

本部員は本部内に立て籠もるらしいです。監視カメラによると研究員の8割以上が感染したみたいだそうです。

すみません、無線が入りました。副長、説明を頼む。」

藤波が毛利に説明している間に、簡単な防衛ラインを5メートル先に設置しを得て戻ってきていた小沢曹長が説明を引き継いだ。

「現在、地下1階で確認がとれた依存者ですが、F会議室に柵・キャサリン博士と来客者1名に足立班の6名の計9名。弾薬が切れた青山曹長と末長3曹の2名がロビーの自販機の上に登つたままでゾンビに取り囲まれています。」

それと、西脇分隊の福永曹長と酒井2士、斉藤分隊の中曽根2曹と

竹原曹長。竹原曹長は膝を撃たれた状態でかなり重傷みたいです。それと、和久井がこの4名に助けられました。それと我々です。」

説明が終わるのを待ち、秋葉が毛利の肘をつついてきた。

「何だ？」

「ゾンビが3体増えてます。もともといた奴と同じでこっち向いてます。でもさつきより頻繁にこちらに歩いて来るそぶりがあります。」

「分かった！……秋葉！小沢！こっちに来てくれ！君、ゾンビの様子を見ておいてくれ」

隣にいた隊員にゾンビの観察をたのみ、毛利は秋葉と小沢を扉の向うの階段に連れ出した。

「ちょっと、ここで待っていてくれるか？」と言いつつ残し扉の向うの通路に戻っていった。

「秋葉さん、どうゆうことなのか説明してくれる？」

「曹長、私も訳がわかんないんですよ」

「そう。なら准尉が戻って来るまで待つしかないわね。」

そついいながら、小沢は階段に腰掛けてリラックスしたように壁にもたれかけた。

「おまたせ！」毛利が通路側から戻ってきた。

「どういうことですか？私には指示を出さないといけない部下がいるんです。何時までも階段で休んでいる場合じゃないんです。」

小沢が毛利に詰め寄った。

「失礼な質問で恐縮なんだが、2人とも、その……今日なんだが、その……、本当に失礼なことなんだが……生理か？」

「もう！こんな非常事態に何聞いてんですか！後で正式の抗議しますからね！馬鹿馬鹿しい、完全にセクハラ発言ですわ！」

イライラしていた小沢は、毛利を突き飛ばすように通路に向かった進もうとした。

「わかった！わかりました、毛利さん。そういうことなんだ！ゾンビはどこかに行っちゃった？」

「ああ、という事はお前は生理と言うことだな！」

「そうです。それも一番きつい日です！ゾンビって犬並の嗅覚って事なんですネ！」小沢は毛利を秋葉の顔を交互に見ながら

「感染体が、匂いをかいておっしやられるんですか？准尉は！」

「その通りさ。実際にお前さん方が階段にでた途端に、回れ右でいなくなっちゃったよ。」

曹長も生理と思っていていいかな？」

顔を真っ赤にしながら小沢は頷いた。

「毛利さん、本部から命令が入りました。隊を半分に割り、1隊は青山班長の救出。もう1隊は、談話室にバリケードを作って立て籠もっている福永達と合流してF会議室に行き、柵・キャサリン両博士を救出して研究所から県警本部に警護してお連れしろとの事です。小沢！ちつとハンデだが頑張ってくれよな！」

通路で藤波は隊を半分に分けた。藤波が率いる隊は青山曹長の救出。毛利（実質は小沢）が率いる隊は談話室と会議室を目指した。

第33話 拡散6（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております

第34話 拡散 7 (前書き)

違うタイプのゾンビ活劇『親父の楽しく険しい旅』も新規連載始めました。

よければご覧下さい。

第34話 拡散 7

「では、各隊。幸運を祈る。」

藤波の全員に対する言葉に対して

「敬礼！」

小沢曹長の凜とした声が全員に行き渡った。

両隊が離れて20歩も歩かない内に

「お・ざ・わ！」

毛利が隊の中ほどから声をかけた。

先頭付近にいた小沢は他の部下に警戒体制を指示し毛利に近づき

「何ですか？准尉！」

露骨に嫌がりながら返答をした。

「何って………お前さんや秋葉が先頭にいたら………馬の鼻先に人參をぶら下げてるようなもんだろうが！」

「お言葉を返すようですが、私の隣にいた2曹も結構な腋臭ですが？男ばかりの自衛隊で臭いで行動を妨げるのは如何なものかと？」

「いや、いや！よく聞いてくれよ。腋臭は誰もが不快な臭いだ。先

ほどの感染体を思い出して欲しい。
全部、男の感染体だったはずだ。」

「と言いますと？」

「スケベエな、男のサガですか？毛利さん」

秋葉が話しに割って入ってきた。

「ご明答！

感染体になっても人間の本能はあるだろう。と推測できなくもない。と思うのだが？」

ニヤリと毛利が秋葉に返答した。

「なら、うんこやアンモニアの臭いを先頭にして進んだら、感染体はよって来ないんですか？」

小沢が馬鹿にした口調で毛利に反論した。

「可愛い顔して…うんこかよ！そりゃ、臭いでは近づいては来ないだろうが…感づかれ時の食欲と臭覚のどちらが勝るかだが…十中八九、食欲だろうな。」

どっちにせよ、うんこが直ぐに手には入る訳じゃないんだから、二人は真ん中がいいんじゃないかねえか？」

毛利に指摘されて顔を赤くしていた小沢に代わって秋葉が

「なら、私と曹長が囿で感染体を引きつけて……てのは、どうですか？」

と言いながら89式をポンポンと頼もしげに叩いた。

本部

「はい、研究所内は感染体で溢れそうです。直ちに研究所のある区域の封鎖が必要かと…」

岡田博士は既にそちらに輸送中です。

柊博士とキャサリン博士は研究所内です。

今追加の隊を送りました。

映像とわかった限りのデータは送る準備中です。」

「2尉！」

高柳が叫んだ。

「何だ！早くデータの用意をしろ！」

「黒瀬さんがやってます。本部入り口前に感染体が約30体ほど近づいて…」

いきなり、ショットガンの発射音が響き渡り、高柳の声はその後の銃声にかき消された。

「班長！いきなり扉が…」

「撃て！撃て！」

「ぎやああああああああ」

「加藤が食いつかれたぞ。」

「引きずり込まれるぞ！助ける！」

「間に合わん！」

「撃つんだ！撃て！」

「近すぎて89式じゃ駄目だ！ショットガンばらまけ！」

ドガン！ドガン！とショットガンの発射音はするが如何せん、ショットガンが7発から8発しか撃ち続けることが出来ず、4名の射手はあっという間に撃ち尽くした。

「リロード！」

「リロード！」

ショットガンをリロードしている矢先から次から次へと本部内に感染体に雪崩込み、手当たり次第に襲いかかっていた。

「拳銃！」

班長の叫びと共に、残りの警備班とバックアップにあたっていた本部員が拳銃弾を撃ちまくったが……

大混乱の中、素人に毛の生えた本部員では感染体を射殺出来ずに次々と身体を噛み干切れていった。

更に、最悪なことに慌てて発砲された弾丸や食いつかれ、断末魔の力で引き金が引かれた拳銃から出た弾丸が無線の集中管理装置を打ち抜いてしまい、無線が途絶えてしまった。

柘博士と足立班。

「柘博士！状況がかなりヤバい感じですよ。」

他の班がこちらに救助に来ているそうなのですが、この会議室は一番奥まった位置なので、こちらからも進んだ方が得策だと思います。

「班長！本部無線に発砲音！その後無線が不通です。」

「本部！本部！こちら足立！………ダメだ！」

梨田！新庄！柘博士とキャサリン博士に付け！

三宅！扉につけ！

長内は俺と！

しんがりは新垣！部屋を出るぞ！」

たつたいま、衝撃的な動画を見せつけられた俺は周りで起こっていることが、他人ごとのようにスローモーションに映っていた。

また、地獄を見るのか？と数十年前の記憶が蘇りかけていた。

「田中さん！ガクガク震えてる場合じゃないんだよ！あんたはこれで！自分の身は自分で守ってくれ！」

誰かわからないが肩を揺すぶられ、特殊警棒を目の前に突き出されて俺は正気に戻った。

一度は地獄から舞い戻ったんだ、自分を信じる！特殊警棒を握り締めながら自分に言い聞かせた。

「GO！GO！GO！」

足立の掛け声と共に三宅がぶつかるように扉を開け通路に飛び出した。

「うわあああああ」

飛び出した通路には20体あまり感染体があり、泳ぐように手を前にかきながら三宅に襲いかかった。

「てえ〜」

足立の掛け声と共に、長内としんがりの位置から長島が飛び出して、89式を撃ち出した。

「博士！部屋の中へ戻って！」

足立が叫びながら二人の博士を部屋の奥へ誘導した。

「頭！頭！あたまだ！」

幅の少ないの扉付近で、普通の長さの自動小銃を撃とつすること自体が間違いだ。

お互いの銃身がぶつかり合い、目標を正確に捉えられていなかった。

「引いて撃つんだ！」

田中がいきなり叫びながら、足立の奥襟をひつつかみ部屋の中方に引きずり込んだ。感染体は部屋の中に入りこんできたが、距離を取ることができた。

既に、長内と長島は感染体に取り囲まれていた。

「ぎやああああああああ」

かみつかれた長島の悲鳴とともに、ダ・ダ・ダ・ダ・ダ・ダ・ダ・ダ・ダ・ダ・ダと発射音が響き渡り、同時に柊博士と新庄が銃弾を身体中に浴びせられ壁に吹き飛ばされた。

「博士？」

叫びながら足立は柊博士の元に駆け寄った。

「博士！博士！」

「死んでる！それより扉から入ってくる奴を撃つんだ！」

田中が足立を引きずり起こして扉を指さした。

更に数が増えたのか？室内には30体ほどの感染体がいた。

「No・No・No~~~~~」

いきなり、キャサリン博士が狂ったように感染体に向かって駆け出した。

ボブ・サップもブルーザ・プロディモアンドレ・ザ・ジャイアントも真っ青の体当たりだ！

5〜7体ほどの感染体を吹き飛ばしたキャサリン博士は更に突進しようとしたところを、足立と梨田が後ろから飛び付くように止めに入るとした。

放っておけば、感染体はただ吹き飛ばされるだけだったのだが、下手にキャサリン博士の身の安全を図ろうとした二人にスピードを殺されてしまい、挙げ句に3人でバランスを崩して感染体の目の前に倒れ込む形になってしまった。

そこへ、10体以上の感染体が飛びかかるように群がっていった。

「駄目か！」三人を助けることが無理と悟った田中は

「逃げる！」

と自分に言い聞かし、一番感染体が少ないところに素早く駆け寄っ

た。

右の感染体に前蹴りを浴びせ、左の感染体の足を払い倒し、正面にいた感染体の頭に特殊警棒を打ち込んだ。

更に、左右から手を伸ばしてくる感染体に対して、バランスを崩さして倒す・ひっくり返すを戦法にしてほんの3体の頭を砕くだけで出口に達した。

出口付近に感染体が居ないことを確認して、振り返るとは足立や梨田、キャサリンをは床に内蔵をぶちまけられて、絶命していた。

仕方ないと肩を挙げ、通路を歩み始めた田中の足元に何かが触れた。

「た…た、殺しでええ」

最初に飛び出した三宅が上半身だけの姿で内臓を引きずりながら、田中のズボンの裾を引っ張っていた。

田中は、おもむろに床に落ちていた89式を拾いあげ、三宅の弾倉パウチから新しい弾倉を取り出し装填し初弾をコッキングし単発に切り替えて

「……………」

聞き取れないような小声で何かを呟き、引き金を弾いた。

すぐさまに、室内に銃口を向けて、素早く引き金を弾いた。その動作を19回行い、19体の感染体の額に銃弾を叩きこんだ。

すぐさまに扉を締め、その外開きの扉に立派な成りで付けられていた大型の引き手に89式を挟みこんだ。

扉には到達した感染体達は、89式をへし折る程の押す力が無いのか、扉はギシギシと音をたてるだけだった。

まさか、この状況で扉の中を確認する馬鹿はいねえだろうな？

一瞬、89式の残りの弾倉を使い殲滅するべきか？田中の心が揺れた。

「いや！駄目だ。ヒット・アンド・ウエーが一番大事なんだ」

田中の目は遠い過去を見つめていた。

まずは、この建物から逃げるか？しかし、右も左もわかんねえのに

……

「あつ！」

おもむろに、田中は先ほど本人の希望通りに、留めをさした三宅に近づきその胸からICカードを抜き取った。

「確か、柵のおっさんが出入りにいるって言ってたよな。どこもかしこもICカードでピッ！ピッ！でしか出入り出来ないのかねえ。

便利なんだか不便なんだか…警備班のICカードだから出入り自由だよな？」

特殊警棒を握りしめ田中は出口を探しに動き出した。

藤波

「各個！無線が駄目になったみたいだ！ハンドルシグナルで進むぞ！」

急に本部を経由していた無線が不通になり隊員達に動揺が走ったが藤波はその不安を消す笑みを投げかけて大丈夫だと隊員達に笑顔を見せた。

裏腹に藤波の心の中では警報がなり響いていた。

（ヤバいぞ！本部で銃声があったぞ！撤退？いや、青山達を放つてはおけない。でも、本部はどうする！
ちくしょう！無線が無きゃ、何にもわかんねえじゃないか！）

その時、前衛の隊員が右拳を挙げて隊列を止めた。

「班長！前方に人！発見。」

「感染体か？注意を怠るなよ！」

藤波は、戦闘準備を指示しながら、前衛の隊員の横に行き、20メートル程先にいる人影を見つめた。

「感染体だな。胸元が血だらけだ。しかし、いやにしっかりした足取りだな」

「はい。発見した際から通常の人と同じような動きです。どうします？」

「研究員の服装だな。返り血を浴びただけの可能性もあるな……」

「こちらに気づいたみたいです。」

感染体らしき人影が、こちらに早足で進み出した。

「感染体の歩き方じゃないな！至急保護するんだ！」

命令された前衛にいた3名の隊員が駆け寄って行った。

「大丈夫ですか。もう安心ですから……」

最初に駆け寄った隊員が声をかけたところ、その人物はおもむろに顔を上げた。

白濁した真っ白な眼。間違いない感染体であった。

「えっ？」

一瞬、パニックに陥った隊員は慌てすぎて、89式小銃を落としてしまった。

「にぐう〜」

と叫びながら噛みつかれた隊員は訳がわからない内に絶命していた。

反応が遅れた他の2名の隊員が銃を構えた瞬間に、感染体は右手を横に一直線に動かして隊員達の首を払うような仕草をした。

指先の爪が非常に鋭利になっていて、2名の隊員の首から血が飛び散った。

「痛てえじゃないかよ！」

さほど深い傷では無いのか、2名は口々に罵りながら再度銃口を向けようとした時に、感染体がいきなり走り出した。

「！……………」

誰もが予期しなかったため、突入された藤波達是对応が遅れ数名が突き飛ばされた状態になり、班の精神的な支柱である藤波がその毒牙に一瞬の内に喉笛を噛み千切られた。

パニックに陥った隊員達はそののちに数名が噛みつかれ、噛みつかれた隊員が発症して更に他の隊員に噛みつき始めて数分で藤波隊は全滅した。

噛みつかれて発症するまでの時間が僅かの内に数倍の速さになっていた。

変異なのか？種の保存の進化なのか？確実に増殖作用が発達しているが、人は無線と言うコミュニケーション手段を失ってしまっていて、この情報は誰に気づかれることはなかった。

最初に襲われた時に傷を負わされた2名はあつという間の出来事に腰を抜かして床を這いつくばっていた。

這いつくばる2名に興味を示さずに、走る感染体は次なる獲物を探し求めて行った。彼の首からぶら下げているICカードには、雛形と記されていた。

そう、日本における唯一の、引つ掻き傷から発症した感染体であり、通常数倍の感染時間を経験した違うタイプの感染体なのだろうか。

新たな、走って叫ぶことができる感染体が出たとすれば、感染体は種の保存の法則通りに進化をしているのだろうか？

第34話 拡散 7 (後書き)

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第35話 拡散 8 (前書き)

またまた 脱線しまくりです。

次話で元に戻るつもりです。

またまた、主役の田中さんを食っちまうキャラとして毛利准尉が急浮上です。

小沢さんですが…フルネームは 小沢 柚木 おざわ ゆずき です。

秋葉さんは…秋葉 郁恵 あきは いくえ です。

第35話 拡散 8

毛利・秋葉・小沢

「女を囷にする作戦だと！何を血迷った事をいいだすんだよ。お前はよくても、小沢曹長は………嫌だよ。なあ！」

毛利が呆れたと言わんばかりに小沢に共同戦線を申し入れるために、出来るだけの笑顔をふりまきながら小沢の方に顔を向けた。

げえ！…小沢つてわっかかりやすい奴だな、やります！やります！楽しそうです！…って顔にかいてやんの、そっぴいあ、こいつは可愛らしい顔して、バリバリの武闘派だ…誰かが……そう！鈴木が言ってたなあ

協調が無理と悟った毛利はさっさと白旗を上げた。

「あー、もう好きにしてくれや。どの道、部隊の最上位官は俺だ。が指揮権は曹長だかな。でもよ、あんまり女が死ぬところは見たくないんだよな」

「大丈夫です！」

いやいや、目をウルウルさせながら頬をポウツと赤らめてゾンビ狩にワクワクと胸をときめかすってえのは………ほとんど変態の域だぜ。

鼻歌を歌い、スキップでもやりそうな勢いで二人は、先頭のポジションに向かっていった。

「俺たちがついてますから…心配せんで下さい。」

あまりパツとしない、30後半くらいの隊員が声をかけてきた。彼の後ろには似たよう世代の隊員が3名かたまっていた。

「石原1曹です」

石原は毛利に握手を求ながら

「後ろに控えているのは渡2曹、舘2曹、神田2曹です。姫は私らが守りますんで安心なさって下さい。では、失礼なすって」

挨拶を済ますとさっさと小沢を追いかけていった。

「軍団！4人でカバー頼むわよ！」

まるで後ろに目がついているのか、信頼しきっているのか、小沢は疑いもせずに4名が続いていることに確信したように歩き続けた。

「姫って？小沢のことかあ？」

えっ？軍団？4人で？軍団って…

あっ！石原・渡・舘・神田！か！

つたく、太陽にほえるか？いや、西部警察？出来過ぎやろ！」

「准尉。」

後ろから声をかけられて振り返ると20代後半の隊員が無理無理な作り笑顔で挨拶してきた。

「松田3曹です。姫の命令で准尉をサポートしますっ」

松田か、こいつも軍団の一員なんだよな、姫って言ってんだから。

てか松田って言えば松田優作だよな？はて石原軍団だったか？

「断つても無駄みたいだね。よろしく。」

訳が分からなくなった毛利はやけくそ気味に愛想よく、ボディガードの松田を引き連れて秋葉のサポートになりそうなポジションを探しに行った。

「小沢さんの武器は何ですか？私はこのボディ君（89式自動小銃の自衛隊内での呼び名）でえゝす。」

小沢に負けないはしゃぎっぷりの秋葉だった。

「そつ。」

私は基本的には格闘戦派なんだわね。

だからメインウエポンはこれよ。

今日は思いっきり殴っても誰にも怒られないわよね？」

うふつと笑いながら、手のひらにピッチピッチの黒皮の手袋をはめて、ポケットからなにやら取り出して人差し指でクルクルと回して握りしめた。

「ジャーン！ブラスナックルゆずぽん仕様よ」

そこには、ピンクメタリック色の5つの穴の空いた板状の鉄らしき物体があった。

「こうやって握って拳を作るんだ。」

そうしたらね、ほら！丁度、正拳で殴るところがナットの尖った部分になるの、これで殴るんだよ！」

（わかりやすく言えばメリケンサック。わからなければ調べてちょよ：作者）

「いいなあ。愛用品で。私なんか借り物ですよ」

普通の格好をして、原宿辺りを歩いていたら間違いなくスカウトされそうな肢体と美貌を持つ二人が、銃器や武器についてまるで化粧品品の品定めのように会話をしている。何とも物騒な話である。

流石に隊長とは言っても若い女性である、隊斥候に起つのは古参兵に反対されたため、先頭はショトガンを持った隊員が勤めていた。

「小沢さん、小沢さんの班って、変わった武器を持った人が多いんですね。」

キョロキョロと回りの隊員を見ながら秋葉が羨ましそうな声で聞いた。

「そうね。私の班はちょっと風変わりなのよ」

確かに風変わりな装備の隊員がいる部隊であった。

全員で8名

普通の装備を持っているのは、斥候の位置についている牧田土長と最後尾を受け持つ沖田曹長の2名だけだった。

他の者は自動拳銃などの最小限の基本装備だけは持っていたが使用するのは特異な武器だった。

石原はククリナイフ（別名グルカナイフ）

渡は日本刀

館はシルバーのS & W M 6 8 6リボルバーの2丁拳銃（357マグナム弾を使用する回転式拳銃）

神田はA A - 1 2（フルオートショットガン）

松田に至っては、左右の手首に長さが50センチほどの3本手鉤（但し鉤の部分が尖った槍状になっている）を装着していた。

斥候を勤める牧田は拳を握りながら腕を上げた、『止まれ』の合図である。

その合図を認めた小沢は音もなく牧田横に進んだ。

「どうしたの？」牧田の顔に頬がつくほど顔を寄せ、牧田の視線を追いながら小沢がたずねた。

「先の通路を曲がったところに居てます。」

「見えないじゃない？」

「曲がる後ろ姿を確認しました。間違いありません。どうします？」

様子をみますか？」

牧田の問いに、ニツコリと微笑みながら小沢は即答した。

「馬鹿ね！殺るわよ〜。そのために来たんでしょ？用意して！」

「神田！前に出る用意だ。直ぐに姫が飛び出すぞ。」

石原が横にいる神田に注意をした途端に、小沢が立ち上がり、牧田のフリッツヘルメットを大きく叩き。

「いやっほほーい。皆のもの！突撃！」

脱兎の如く、通路角に向かって走り出した。

「ウソ〜！いきなり突撃ですか？心の準備がないですよ〜」と文句をいいながらも、秋葉は小沢を追った。

小沢が最初に通路角に到着し通路を曲がった。

通路には数え切れない感染体が回れ右をしているところだった。少なく見積もっても40体は居た。

「もつと、広いところで遭遇したかったなあ〜」残念そうに言いながら2歩、3歩と前進し、近づいて来た最初の感染体の顔面に体重をかけた『プラスナックルゆずぼん仕様』の一撃必殺の右フックを放った。

プラスナックルは、素手ではありえないほど感染体の顔面にめり込み、その肉と共に頬骨を粉碎した。

小沢は更に止めを刺すために、叫びながら1歩踏み込んで左のショートアツパーを感染体の右顎下から斜め上に撃ち抜いた。

「ブウーメラン テリオース!!!」

感染体はあらぬ方向に首を曲げて、床に崩れ落ちた。

「さあ！お次は？」

次なる獲物を求めて通路に顔をもどした瞬間、小沢の顔は冗談を言っている顔から、一気に真面目な顔になり、口を真一文字し気合いを入れ直した。

1メートル以内に感染体が4体ほど戻って来ていた。

(やばいなあ。一気に4体は相手に出来ないわ。引くしかないの?)

そう考えた瞬間に、小沢の脇から軍団の1員の神田が飛び出して、AA-12を感染体に向け、引き金を弾いた。

「ド・ド・ド・ド・ド・ド・ド・ド・ド・ド・ド」鈍い重低音が鳴り響き、4体の感染体はポロポロになっていた。

神田の利用するAA-12は毎分350発の発射スピードを持つフルオートショットガンである。

今装着しているドラム弾倉には32発のダブルバックの散弾が装填されている。

あっという間に10発の散弾を感染体に浴びせたのだ。

「神田！アンタの武器 反則だよ！」礼どころか助けた神田の武器にいちやもんをつける小沢であった。

「姫！30メートル後ろのホールまで退却しましょう！その方が楽しめますぜ！」

神田が小沢の前面に位置し、感染体の動きを確認しながら怒鳴った。小沢にとって撤退は絶対に嫌なことだったが、神田の広いところなら楽しめるの一言に乗った。

回れ右をして「た・いきゃ〜〜〜く」と叫ん走りだした。

その後を神田が散弾をフルオートでばら撒きながら後退した。

「て・撤退ですかあ〜」
すれ違いかけた秋葉は、急制動が間に合わずに、神田の真横に出ってしまった。

「きゃあああ！」

とか悲鳴を上げながらもスリングで肩にかけてあった89式を構えて、3点バーストで打ち出した。

「微妙〜〜〜！」

狙ったところと着弾点が思惑通りに行かないみたいである。

しかし、引き金を1回弾いて発射された3発の銃弾は全弾、感染体の頭部に命中していた。

6体に銃弾を撃ち込んだところで

「何やってんだよっ！撤退だろうが！

撤退しながらリロードしろよ

ほら！いくぞ。」

そう言いながら毛利は感染体に向かって、1弾倉分のバラベラム弾を浴びせていた。

その横には影のように松田が張り付いていた。

3人で撤退し、30メートル後方の開けたホールにたどり着いた時点で

「毛利さん。射撃が上手いって自慢していませんでした。さっき撃った弾はぜんぶ、感染体の足にしか当たってなかったですよ？」

秋葉が『勝った』と言わんばかりに鼻をフンフンと鳴らしていた。

「馬鹿か？お前は！ありや膝を狙って撃つたんだよ！

膝が駄目になりやよ。あいつらだって、歩けやしまい？

這ってるところなら、バットを持った中学生だって殺せるぜ！」

目をキラキラさせながら『凄い冷静な計算的な作戦ですね』とかく
るかと思ったら……

「そんなことしたら…楽しみがなくなるじゃないですか！」

あまりに真剣でみるみる内に顔を真っ赤にし始めた。

マジかよ？本気で怒ってやがる！こいつは感染体相手にシューティ

ングゲーム感覚なんじゃねえか？

「もういい！あっちいけ！シッ、シッ」

毛利は秋葉を追い払う右手の仕草をみせ、背を向けてしまった。

「毛利さんは浪漫がなさすぎ……」

毛利と秋葉がじゃれている間に、他の物は防戦体制を敷いていた。

「いい！最低10体はホールまで無傷で来させるのよ！

出来たら1〜2体単位でね。みんな、わかった？」

ハア〜 こつちのお嬢ちゃんもか……

普通、無傷で陣地に招き入れろなんて指示だす指揮官がいるかあ？

呆れかえって壁にもたれかかる毛利の横に松田が同じようにもたれかけながらガムを差し出した。

「ハツカっすけど……」

「ありがとう」

毛利はガムを口に入れ、手持ち無沙汰を解消する方法を考えていた。

「姫、姫を変わった奴だなんて思わないで下さい。」

「へっ」

いきなり話し出した松田の顔が真剣だったので毛利は続きを話し出すまで待つことにした。

「姫は……親父さん、いや、小沢隆 おざわたかし の娘なんです。だから……事件の後、丁度8年前の中学の時に報復とかで鳩山組に拉致されて……散々な陵辱を受けて……子供も産めない身体になっちゃってます。」

あんなに、綺麗なのに水着にもなれないほど身体中傷だらけなんです。

それから、姫は変わっちゃって……

強いことを示すには圧倒的な力と暴力の誇示だと思い込んでしまったんです。

それに気がつかずに、四神が親父さんの変わりに稽古を……。

元々、親父さんが唸るほどの才能があつて、僅か3年で……四神達もかなわないほど強くなって……

とうとう、4年前に……鳩山に乗り込んで……

丁度、俺が警察官になって、偶然に通報で駆けつけて姫だとわかったんで逃がして、四神に匿ってもらったんです。

その後は、自衛隊の織田陸将補が……どこかに手を回して、事件を揉み消して、四神と俺も自衛隊に入ったんです。

まあ、揉み消しと言うより、鳩山も自分は半殺しで、息子も殺され、組員も30人死亡に20以上が再起不能なんて……恥かきたくはなかったと思うんですが……

あつ、織田陸将補は親父さんにとっては兄貴みたいな人だったらしいです。」

小沢事件

8年前 当時（現在も）日本最大の広域指定暴力団だった鳩山組組長、鳩山幸久はとやまゆきひさの息子（当時17歳）が大阪市内の女子中学生4名を10日間に渡り拉致監禁、強姦し絞殺した事件で女子中学生が在校していた中学の父兄だった小沢隆が単身、鳩山組に乗り込み犯人の鳩山幸久を襲い、壮絶な争いの後に、小沢隆は30余余りの刀傷と8発の銃創で絶命。鳩山幸久が意識不明の重傷（一命は取り留めた）、他組員20余名を再起不能にした事件である。事件の詳細は

行方不明になった女子中学生の遺棄死体が発見され、最後の目撃情報が発見されたリーダーにする暴走族『なにわメサイア』に言い寄られて嫌がらせをされていた。と言うものであった。

警察の懸命の捜査により、実行犯の内の1人を逮捕、自供から鳩山幸久が主犯であると断定。

それ以外にも類似の事件の余罪についても自供がされたので未成年であったが異例の指名手配となった。

4名の女子中学生を拉致監禁し強姦の末に死体を遺棄したことで、マスコミにも大々的に取り上げられ、他の実行犯2名も逮捕されたことから発見も時間の問題と思われる矢先に、逮捕された3名の実行犯の肉親が立て続けに通り魔事件に合い死亡。

捜査を担当していた捜査官の子供が誘拐され、死体で発見された。

マスコミがこぞって、鳩山組の関与を糾弾したが、マスコミ関係からも被害者が出るようになった。

どの事件も、犯人は捕まらずに鳩山組の関与を裏付けることは出来なかった。

度重なる警察への協力者の身内の不幸は、協力者達を震えあがらせていた。

幸久がひよつこりと姿を表したところを警察が逮捕したが、公判では実行犯3名が供述を覆したことにより、無罪判決となってしまうた。

検察は、証拠がないことや、実行犯達の覆した供述を覆すことが不可能と判断し上告をあきらめた。

小沢隆は、弱小だが実力日本一と噂されていた『実践格闘塾 小沢』の塾長であった。

被害者の女子中学生の1人が塾生であり、塾仕込みの護身術で激しい抵抗をしたがために、アキレス腱を切断されるなどの酷い暴行の後に強姦されていたことを知らされた。

小沢は塾の運営のため、流派を存続させるため、金銭を得るがために、安易に護身術などの教室を開いたことを悔やみ、幸久を殺すことで償い、かたきをとり単身で鳩山組に乗り込んだ。

しかし、人を殺すことは出来ずに幸久と幸久を守る組員を血祭りにはしたが自身の命も尽きてしまったのだ。

「何故？俺にそんな話しを？」

「わかんないつす。俺、凄いカンが働くんです。誰かに姫の事を伝えておかなきゃ……そんな気がして……」

「わかった。俺の心にしまっておくよ。それより、生きてここから出ようぜ」

毛利は軽く松田の肩を叩き

「小沢の人生の一時には辛いことがあったかもしれないが、今は君や軍団に囲まれてて幸せなんじゃないか？弱気になるなよ」

「准尉。ありがとうございます。」松田は、何か吹っ切れたような顔になった。

さあ、聞いちまったら仕方がねえな。モエモエ秋葉と小沢姫は命に替えても護らなきゃ、男じゃいらねえな。

『誰』かを護るために戦うよりは目標がある方がいいわな！

毛利は手にしているマシンガンのMP15のグリップをギュウと握り締めた。

第35話 拡散 8 (後書き)

ご意見・ご感想 お待ちしております。

第36話 拡散9（前書き）

あけましておめでとつございます。

昨年のご愛読ありがとうございます。

新年1発目の更新は山田さんでスタートです。

本年もご愛読 宜しくお願い致します。

うさぎが跳ねるように飛躍出来る年にしたいですね。

第36話 拡散9

「聞いたか！姫のオーダー通りにいくぞ！渡！ついて来い！」

指示を出すや否や、石原はククリを鞘にしまい、感染体の群に歩み出した。

「おい！さすがにあれは無謀じゃないか？松田。」

俺は、武器を鞘にしまい感染体に歩みよる2人と松田を交互にみながら、MP15を構えて数歩前に出た。

「まあ、見てて下さい。四神って由来がわかりますんで。」

松田は、毛利のMP15の銃身を軽く押し下げながら言った。

石原と渡は通路の左右に広がり、手を伸ばしてきた感染体の背後に周りこみ、背中を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた感染体は、小沢の数メートルのところに転がり、既に蹴り飛ばした人間のことは忘れたかのように、小沢を喰らわんとして起き上がっていた。

石原と渡は、感染体に掴みかかれないように注意をしながら、1体を巧みに後方蹴り飛ばしていた。

「いらっしゃーい！」

小沢が舌なめずりをしながら、2体の感染体を迎え入れた。

右手の感染体の頭部にハイキックを浴びせ、そのまま左足を軸に回転しながら、右手をしなるように振り抜いた途端に、感染体の顔半分が砕けたように変形した。2体の感染体はそのまま床に倒れ込み永遠の死を向かえた。

石原と渡は巧みに感染体に当て身や蹴りを入れて後方に弾き飛ばしていた。

「次！」

汗一つ流さず小沢は次に近づいてきている感染体に挑んだ。

今度は、感染体の正面に構えて右足をやや後方に引き、正拳突きを構えから目にも止まらぬ速さで感染体の顔面に正拳を突き入れた。

感染体の顔面が一瞬凹み、衝撃はそのまま後頭部を突き抜け、まるで銃弾で撃たれのような裂傷が出来ていた。

次の感染体に対しては、突き出して来ている右手を掴み逆関節を極め、柔道の一本背負いのように投げながら腕をへし折り、頭を地面に叩きつける瞬間に頭部にローキックを入れた。

「陸奥園明流『雷』いかすぢ ゆずばんバージョン!!!」

小沢は余裕綽々に必殺技のごとく、ポーズをとっていた。

アメリカ軍の特殊部隊が……手こずった相手を、マンガの技を使って殺ってやがる！

アメリカ軍の奴らがみたら、これぞ！オリエンタルマジックって騒ぎ立てるんじゃないやねえかよ！

守るもくそもねえよな。そもそも銃なんざあ、必要のない闘い方じゃねえかよ！

毛利はあっけに取られていた。

あっという間に4体を葬った小沢は、とうとう石原や渡と同じ位置まで前進して、感染体に襲いかかっていた。

おい！おい！感染体に襲いかかる人間がいて、どうすんだよ！立場が逆になってんじゃないやねえかよ！

毛利が呆れているところに

「人がこちらに歩いて来てます！保護します！牧田！フォローしろ！」

沖田が小沢達が感染体を襲っている方向とは逆の方向から歩いてくる人影を発見していた。

毛利は、沖田の報告が耳に入り何気なく沖田と牧田の行動を目で追っていた。

彼等が保護に向かった方向には3名の人間が此方に向かって歩いて来ていた。

何か変だな？こんな状況だってえのにやたらと冷静というか、無防備に歩いているぞ？でも、感染体の歩き方とは違うようだしなあ。しかし嫌な予感がするな。

「沖田曹長！」

声を張り上げて注意を掛けようとした時、保護に向かった2人は既に3名とは10メートルを切る距離であった。

ユラツと3名が揺れるような動きをしたと思った瞬間に、3名はオリンピックの短距離選手並みの速さで駆け出して、沖田と牧田に近づいたと思った瞬間に、2人の首に空手の手刀のような感じで右手で斬りつけた。

「！」

毛利はMP15を3名の方向に向けながら叫んだ。

「秋葉！館！神田！逆方向注意！ 新手かも知れん。ちっと感じが違うぞ！」

「確認！見てました。沖田を襲ったと言うことで敵対勢力と判断します。」

館のS&W M686から連続で3発の357マグナム弾が発射されたが：着弾する間に3名は弾をよける動きをした。

「クツ！弾丸をよけるって：人間技かよ！神田！お見舞しろ！」

館が愚痴ると同時に神田はAA-12をフルオートで打ち出していた。僅か10秒足らずの間にドラム弾倉内の32発のダブル0バツクの散弾が3名に襲いかかったが、僅かに1名の身体を貫いたただけだった。

「ウ、ウソ。壁を這ってるってか…壁を走ってるう」

そう、秋葉の言う通り、散弾の嵐をかいくぐった2名は人間技とは思えないスピードで壁を伝って走ってきているのであった。

タン・タン・タン 秋葉が放った5・56ミリ弾は1名の腰から足に当たり壁から落ちた。

壁を走りきったもう1名は、館と神田の2メートルほど手前に着地し、ゆっくりと顔を挙げた。

館と神田を真つ直ぐに見つめる目は白濁しており、口を開きながら2人に飛び付いてきていた。

「感染体だ！」

神田がいち早く反応して、迫る感染体に回し蹴りを浴びせていた。

カウンター気味に入った蹴りは見事に感染体の顎を捉え、感染体は数メートル吹き飛んだ。

「やったか？」

館が拳銃をホルスターに直しながら神田に怒鳴った。

「いや！手応えが軽い。まだ、来るぞ！」

言った矢先に、感染体は跳ね起きて2人に向かって飛びかかってきた。

今度は館が飛びかかる感染体を紙一重でスウエーし、すれ違い際に渾身の右ストレートをこみかみにぶち込んだ。

感染体は壁に激しく叩きつけられて、頭から大量の血液を吹き出しながらも起き上がり、まだ襲おうと身体を捻るように、館に飛びつこうとした。

そこに、狙いすました神田の踵落としが感染体の脳天に突き刺さり、感染体の息の根を止めた。

「走ったり、超人的な動きとか……こいつら進化してるのか？」

神田が倒した感染体を見下ろしていた時、いきなり強烈な体当たりをくらった。

「危ない！」

秋葉が叫んびながら89式を構えたが既に遅かった。

神田の首には、先ほど襲われたばかりの牧田が喰らいついていた。

「ま・き・た？…た…ひめ……」

神田は最後の力を振り絞って、牧田だった感染体の首に腕を巻き付けてへし折った。同時に首を咬み千切られた神田は絶命した。

館もほぼ同時に沖田だった感染体に飛びかかられたが、ギリギリでかわすことが出来た。

館を飛び越した感染体は、丁度秋葉の構えている銃口の目前に飛び出す形になり、3発の5・56ミリを顔面に浴びた。

秋葉が壁から引き剥がした感染力は、毛利によって10発近い9ミリ弾を頭部に撃ち込まれていた。

「な・な・何なんだよ。走り出されたら……マジでヤバイぞ。壁を走れるなんて……どんな運動能力なんだよ！」

毛利は走る感染力が現れた方向を警戒しながら、誰にも聞かずに走った。

「グツ…ガハツ！」

「おい！何やってんだ！」

松田が、3本手鉤（但し鉤の部分が尖った槍状になっている）で館の頭を貫いていた。

「館さん。感染してます。首んところの傷……沖田さんの時にひっかかれたみたいです。」

館の首には、腐りかけた傷があった。

「毛利さん！こちらは簡単に片付きましたよ！」

神田！牧田！……館！お・沖田曹長？

どうしたんですか？何があったんですか？

「走るんだ……オリンピック選手並みに速い上に壁を走りやがるんだ。忍者みたいに……」

「何を寝ぼけたことを言ってるんですか？毛利さん？」

タン！

1発の銃声が起こり。秋葉の89式から硝煙が上がっていた。

首を喰い千切れた神田が感染体として蘇ったところを秋葉が撃つたのだ。

「姫！撤退して下さい！松田！姫を頼むぞ。」

いきなり、石原が小沢を松田の方に突き飛ばした。

「な・何よ！石原！」

小沢が石原に文句を言いかけた時には、石原と渡は手に得物（ククリナイフ、日本刀）を持ち、通路の奥を睨み付けていた。

其処には8体の感染体があった。

3体が通路に立っており、5体がヤモリのように壁に張り付いていた。

そう、理由は定かではないが雛形を祖にした感染体は恐ろしいほどのスピードと、どうやら、協力して狩りをする能力を持っている様子であった。

「石原さん、俺も闘います。」

松田が3本手鉤を胸の前にし、前方を直視しながら言った。

「駄目だ！お前は生き残らなきゃ駄目なんだ……神田や館が殺られたんだ、この感染体は普通じゃない。」

姫、どうやら四神も年貢の納め時みたいですね。もう……我がまは辞めにしましょうや。

この先は松田……と添い遂げて下さい。

あいつは、ずっと姫一筋ですから……

姫のことを一番良く知ってる男です。親父さんの言葉と違ってくだせえね。

松田！ ぜってえ、姫を守り抜くんだぞ！

毛利さん、お嬢ちゃん、悪いが、ギリギリまで援護射撃お願いしますわ。命に代えても、奴らは全部仕留めますから……。」「

2人は通路の奥に進み始めてた。

「秋葉！ 左」

「了解！」

毛利と秋葉はお互いに左右の壁に張り付く感染体を狙って射撃を開始した。

しかし、ヤモリみたいに吸盤があるわけでも無いのに……どうやって壁にくっついてるんだ？

壁に張り付いている感染体は短時間に恐ろしいほどの進化を遂げていた。両手、両足の平にマイクロいやナノに近い体毛がびつちりと生え揃い、まるで蠅のように壁に身体を固定しているのである。

毛利と秋葉の射撃は的確に感染体のいた場所に着弾していたが、着弾するのを見越しているように寸でのところで感染体は上下のどちらかに移動し弾丸から逃れていた。

「秋葉！ バーストなら、上下も同時に撃つんだ！」

そう言いながら、毛利はMP15の射線を感染体を中心から盾に変更して、何も考えずに銃口を上下に振った。

射線を上下にする方法は見事に効をそうし、1体の感染体の顔に数発の9ミリ弾が吸い込まれていった。

毛利の射線を習い、秋葉も感染体に対して縦に発砲を始めた。

元々、射撃の腕前は毛利が逆立ちしてもかなわないだけあり、瞬間に左手の壁に張り付いていた感染体を撃ち落とした。

「な！何んだ」

毛利が担当していた右側の壁を這っていた感染体残り2体が、1体は天井にもう1体が通路に降り立ったのだ。

「毛利さん、新手です。」

通路を歩いていた3体から分離するように、更に3体が現れた。

「くそつたれ！通路の奴ら、重なってやがったのか？

えらい知能が発達してやがるぞ！

秋葉！まずは天井の奴を殺るぞ！

左手から斜め下をてえ〜」

毛利が感染体に対して感染体から右方向の横軸に射線を取り、MP15から9ミリ弾をバラまいたところ、予想通りに左に回避仕掛けたところに秋葉の5・56ミリ弾が襲いかかった、数発を右肩に喰らい天井から落ちたところを見事に秋葉の斜め射線の銃弾が感染体

を貫いた。

毛利と秋葉が天井の感染体にかかっている間に、通路では壁から降り立ったた感染体と3体の影から飛び出した感染体の1体が合流して2体の感染体と石原・渡が対峙していた。1体は先程別れたばかりの藤波隊の一員であった。

「藤波隊も全滅か。俺が先に立つ。」

渡が、石原より数歩前に進んだ。

刀を鞘にしまい若干腰を落とし、左手で鞘を握り右手で刀を握り締めている。居合い抜きの構えであった。

2体の感染体がほぼ同時に、渡に襲いかかった。

チン！チン！と甲高い金属音がしたと思った瞬間に2体の感染体の首が胴体からズルツと滑り落ちた。

「あと、5体！」

2体の感染体が驚くほどのスピードで渡に迫っていた。

チン！と先程と同じ甲高い金属音がしたが、感染体の首は落ちずに、右手首が1つ落ちていた。

「ちっ！」

舌打ちをしながら、後方に飛び下がった。

感染体は切られる瞬間に右手で刀を払い、天井に飛び上がったのである。

後方に下がった渡に対して、2体の感染体が壁を蹴飛ばしたスピードに落下スピードが加わり、信じられないスピードで渡に襲いかかった。

渡は迫り来る感染体に対して、右手斜め下からすくい上げるように刀を薙ぎ、1体の頭部を斜めに切り裂いたが、スピードに乗った感染体身体からの抵抗力が次の1体の頭部に刃が届くのを阻止し起動を変えてしまった。右肩から左脇腹を切り裂いてしまったのだ、喰らいつこうとしていた感染体の引き裂かれた上半身が渡に飛びかかる格好になり、感染体の開かれた口は偶然にも吸い尽くすように渡の肩に当たった。

「ぐわぁあああぁ〜」

渡は右肩から血飛沫を振りまきながら、感染体共々通路に転がった。

ガツチリと渡の右肩に噛みついている感染体は更に強く噛みつき、渡の右肩の肉をこっそりと食いちぎった。

「く・くそつたれ〜」

刀を杖に立ち上がった渡は、ヨロヨロと感染体に近づいて、その額に刀を突き立てて……

「松田！ 姫を頼んだぞ！」

一声叫びながら、腰のホルスターから拳銃を抜き、おもむろに口の中に突っ込み、引き金を引いた。

その時、石原は他の2体と対峙していた。

何だ？こいつらは！噛みつくうとはせずに…手刀で首ばかり狙って来やがる

毒づきながらも石原は、右の感染症の手刀をククリで防ぎながら、左の感染症の脇腹にミドルキックを浴びせていた。

左の感染症が大きくバランスを崩した瞬間に、石原は右の感染症にズイツと接近し、両方のククリナイフを交互に薙いた。パツクリと首が開き、そのまま首は胴体から落ちた。

落ちた首の位置から、他の感染症の抜き手が飛び出してきた、石原は後方にバク転をする要領で避けながらも、抜き手の肘を蹴り潰していた。

ククリナイフを構え直した石原は、予想外の展開に我が目を疑った。後方に控えていた1体が、一瞬の内に肘を蹴り潰した感染症の真後ろに現れて……

その感染症に後方から石原の方向に向かって蹴り飛ばしたのである。感染症は人間の筋肉などのリミッターが外れているため、信じられない力とスピードで弾き飛ばされた感染症をよけることが出来ずに石原は感染症と抱き合うように吹き飛ばされた。

唯一の救いは、蹴り飛ばされたが背骨に損傷を負っていたので噛みつかれなかったことであった。

弾き飛ばされ、感染体ともつれ込んでいる間に、もう1体の感染体が石原に近づいて、その鋭利は爪で石原の首に傷を付けていた。

な・なんだ……反撃をしたいが、腕が動かない……く・首が痒い・痒い・痒い……意識が……意識が……い・し・き……

石原を襲った感染体は研究所の職員の姿をしており、胸には『雛形』とかかれたネームプレートがついていた。

そう、スピードど知恵を持った感染体の祖である。

雛形だった感染体は石原の変化に満足したかのようにニヤリと笑みを作った。

「ううおおおおっ」

松田が3本手鉤を突き出しながら雛形に襲いかかり、見事に雛形の頭を串刺しにした。

こうして、走る感染体の祖は葬られた。

松田は3本手鉤を感染体から引き抜き

「ありがとうございましたっ」

静かに、感染体へと覚醒していた石原の頭部に3本手鉤を突き刺した。

大粒の涙を流す松田を、そっと小沢が抱きしめていた。

「ありがとう。四神、松田さん。」

「しっぴりとしているところに悪いんだが……
またぞろ、走る奴が出てこられたらかなわんし、メンバーもごっそり減っちゃまったし……他のメンバーと合流しないか？」

小沢が顔を赤らめて松田から離れながら

「そうですね。行きましようか」

コソコソと死体の間をうるちよろしている秋葉に

「秋葉さんは何をしているのかしら？」

ビクツとして行動を止めた秋葉を見て

「俺が、言いつけたんだ。追い剥ぎみたいなのはしたくないが……
……お宅達と違って、俺や秋葉の生命線は弾薬だからな。死人には弾薬は必要ないだろ？」

2人にも、持てるだけの銃器と弾薬は持って貰うからな！

秋葉！用意が出来たら出発だぞ！」

第36話 拡散9（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております

第38話 拡散10 本部壊滅(前書き)

よくよく考えたら、やっぱり主人公の田中さんが殆ど登場してなん
ですよね……

もう少し拡散編(いつの間にか『編』扱いしてます)にお付き合い
下さいね。

第38話 拡散10 本部壊滅

襲われた直後の本部

「駄目だ！突破される！

向井、堀内、井川 下がって防衛線を張るんだ！急げ！」

本部警備班長の志村曹長が銃声に負けないように大声で叫んでいた。

「了解！」

向井と堀内が交互にM870（ショットガン）を乱射しながら後方に後ずさりを始めた。

本部中央あたりで両名は装填されている散弾を撃ち尽くした。

「リロード」と叫び、M870をひっくり返して腰の弾薬ポーチに手をつっ込み散弾をつかみ出して装填を始めた。

タン・タン・タン！・タン・タン・タン！・タン・タン・タン！
タン・タンタ・タン！タン・タン・タン・タン！

向井と堀内がリロードしている間、志村と井川が89式の3点バースト（点射）でゾンビに対して発砲していた。

「これだけか？志村！」

ゾンビに向かってP226を撃ちながら、岩永が志村の横の位置にサポートについた。

「この4名だけです。ゾンビの数が多すぎます。まだ20体近くは
います。さらに、襲われた本部員達もチラホラと奴らの仲間入り
が出てます。」

「リロード」

今度は、志村と井川が89式の弾倉を床に落としながら、胸の前に
あるポーチから新しい弾倉を引っ張り出して銃に装填した。

「2階に上がりましょう！2分はここで食い止めますから、3尉は
残りの本部員をつれて2階に行つて下さい。2階についたら我々が
上がる援護をお願いします。」

「本部員！2階に上がれ。銃と弾薬以外はいらない！急いであがれ
！」

青島や黒瀬などの本部員で生き残っている者が2階への階段を駆け
上つていった、最後尾の岩永が2階に上り、1階の援護を全員に指
示し拳銃を向けると

「ぐうわっああああ」

向井が2体の感染体に飛びつかれた瞬間だった。

「向井！」

井川が向井を助けようと動きかけた瞬間に、向井と向井を襲った感
染体は堀内が放った散弾に身体を貫かれていた。

「2曹（井川）間に合いません！」

堀内が悲壮な顔で、向井を撃ったあとに次の対象物に銃口を向けていた。

「堀内！次のリロードの時に上に上がれ！」

次は井川！最後は俺が上がる、もう少しだ。耐えるんだ！」

「リロード」

堀内は、一言叫んで2階に駆け上った。

「わああああ。噛まれた！」

井川が噛まれながらも、89式のストックで噛み付いた感染体を殴り倒していた。

「班長！先が上がって下さい。俺がギリギリまで階段前で粘ります。最後は楽にして下さいね！」

「了！任せたぞ！」

志村も2階に駆け上っていった。

「クソツタレが！」

井川は右手に89式、左手にP2226（自動拳銃）を持ち目に入る感染体に次々と発砲していった。

カチ！

カチ！

89式とP226を全弾撃ちつくしたところで、井川は腰の銃剣用のナイフを引つ張りだして、感染体の群れに突っ込んでいった。

「おりやああああ」

2体の感染体の頭部にナイフを突き立てた後に、井川は絶叫を残して感染体の群の中にしずんでいった。

「クソツ！……」

見下ろすしか成す術もない2階の岩永は手すりを叩いていた。

「堀内！上り口を警戒！M870なんだから、出来るだけゾンビがまとまった時に撃てよ！残弾にも注意するんだ。」

2尉は？青島2尉は？」

「ここだ。助かったよ、志村曹長。2階なら階段を上がらないと駄目だから何とかなるだろう？」

さつきから、無線がダメになっていて救援も呼べないんだ。」

「そうですか。救助がないのはキツイですね。何名ですか？2階に逃れたのは……」

「俺と岩永、黒瀬、高柳、墨田の5名だ。」

「わかりました。まずは、弾薬の確認をしたいのでそれぞれのスペア弾倉を一箇所にまとめて下さい。」

私は、堀内のバックアップに付いています。2分をお願いします。」

志村は、この短い会話の間に4発の発砲音を確認しており、かなりの数の感染体が階段に取り付いていることが手に取るように感じられていた。

「堀内！替わるから、少し後方で休め！」

「了解。ありがとございます。どんどん登ってきます。最初は蹴り飛ばしてたんですが、足をつかまれたら洒落になんないんで・・・」

「わかった！それと2尉に他のメンバーの弾薬を確認してもらっている。散弾はあとのくらいある？」

堀内は弾薬ポーチに手を入れて、散弾を数個ずつ引っ張りだして残弾を確認した。

「12発です。M870に3発残ってますから・・・計15発つてことになります。9ミリ（P226）のスペアは2本、銃に1本です。」

班長の89はどうなんですか？」

堀内は、M870に散弾を装填しながら答えた。

「最後の弾倉だ！（30発）9ミリもスペアは1本しかない。P226も既に何発かは撃ってるから。20数発つてところだな。」

「2尉んとところに確認行ってきます。」

「了解！来やがった！」

階段の登り口に2体の感染体を取り付いて階段を登り始めていた。志村は、感染体が階段の中ほどまで来るのを待ってから、先頭の感染体の額に5・56ミリを打ち込んだ。うま旨い具合に後ろの感染体を登り口に取り付いた感染体を巻き込んで落ちて言ってくれた。

「弾さえあれば当分は何とかなるか？」

堀内が戻ってきて、弾薬の状況を報告した。

「班長！2階のメンバーの残弾ですが……ダメです。墨田は銃すら持つてませんし、高柳と黒瀬さんは2〜3発銃に残っているだけです。」

岩永さんは、最後の弾倉を入れたばかりだそうです。2尉も5発くらい撃つたとのことでした。」

「そうか……。よし、黒瀬と高柳の銃から弾を抜いて2尉のマガジンに入れてそのマガジンを岩永3尉のスペアにするんだ。あまりは俺の銃に入れるから……この先は、俺とお前を岩永3尉の戦闘員で切り抜けるしからな。」

「了解ですが、1階のゾンビの数から言ってもギリギリっすね。何か、他の手を考えなきゃだめっすね。」

あきらめ気味に堀内に志村はヘルメットを叩きながら、

「上にいてりゃ、最悪は上がってきた奴らを蹴り落とすだけでも当分は何とかなる。まずは、弾薬を整理して、岩永3尉と俺たち二人で順番に上り口を警戒するんだ。わかつたら、指示通りにするんだ。」

まずは、お前が休憩しろ、岩永3尉を呼んでくれ。」

1分もしないうちに、岩永が志村の隣にやってきた。

「堀内から聞いたよ。曹長の方法しかないだろうな。堀内は向こうで休ませているから、君も少し休んでくれ、ここは俺が見ているから。」

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えて少し休憩させてもらいます。」

疲れきった身体を引きずるように志村は堀内の近くにいき、ドカッと通路にへたり込むように座り込んだ。

「岩永。俺も手伝うよ。」

青島がこうもり傘を手にしながら現れ、こうもり傘で槍を突つくような仕草をして苦笑しながら

「ないよりやあましだろ？誰かの忘れ物みたいだ。隅に転がってたよ。2階からなら、これで感染体の目ン玉でも突つつきゃ、死なないまでも、1階には転げ落ちるだろうよ。」

「県庁の本部には連絡はついたのでですか？」

「ああ。一応はな。今頃SATに扮した、西部方面普通科連隊の連中が100名ほどこの地区に投入されているはずだ。

さらに、第一空挺も200名ほどがこの地区の外回りを軽装甲機動車で警戒に入る予定だから、多少の犠牲は出るにしても……何とかなるだろう。」

「2尉！こちらに・・・見てください。入り口の方です。」

ぼんやりと2階から1階の感染体を眺めていた黒瀬が叫んでいた。

呼ばれた青島は。その場で立ち上がって入り口の方向を見ると、そこには、感染体と化した田坂がボンヤリと立ち尽くしていた。

あゝあ、たいして指揮能力もないのに上昇志向だけで任務を引き受けるから罰があったんだよな、まあ、同期がどんどん出世していくんだから、エリートにはたえられなかったんだろうな。

青島は、エリート面して怒鳴るだけの命令しか出来なかった田坂を哀れみの眼で見た。

「ん！おい！その者！危ないぞ！気をつける！」

普通に歩く人間が2名、本部内に入ってきたのを発見して青島は大きな声で注意をした。しかし、同じように1階を眺めている黒瀬からは大型モニターが死角になり見えていない様子だった。

青島の声に反応したのは周りの感染体だけであった。感染体はその2名には脇目も振らずに、叫んだ青島を求めるように2への階段に殺到し始めた。

何故か、叫んだ青島は自分の背筋がゾツとするのを感じて、それ以上声を出すことが出来なかった。

その時、岩永は数度目の感染体の上昇をこもり傘を使い退けており、以外に使いものになるこもり傘が気に入り、P226自動拳銃を通路の置いたままで感染体を階段から落とす作業に必死になっていた。

何とか声を出そうとした青島は、普通に歩くゾンビが視界から消えた瞬間にやっと声を出すことが出来た。

「曹長！至急こちらに来てくれ。」

志村と堀内が疲労した身体を引きずるように青島の元に近づいてきた。

「2尉、何かあつたんですか？」

志村が89式小銃の安全装置を解除しながら1階と青島を交互に見ていた。

「いや、見間違いじゃないんだが・・・その・・・何というか、普通に人が歩いて入り口から入ってきたんだ、2名。それが、感染体はそいつらに見向きもしなかったんだ。」

堀内が手すりから乗り出すように1階を覗き込みながら

「それらしいのは見えないっすね。全部、見慣れた感染体です。2尉の見間違いじゃないんですか？」

堀内はもつと奥を見ようとして、さらに身体を手すりから降り出して1階を見下ろしていた。

「2尉。疲れてんじゃないですか。やっぱり見えないっす。」

おーい！のろま！ここまで来て見やがれ！へへっくと、届くもんかよ！馬鹿ツたれが！もつと弾さえありゃ、ここから喰らわしてやるのによー！」

調子に乗った堀内は、右手を突き出して中指を立てながら、感染体をおちよくるように威嚇していた。

少し離れた場所から同じように1階を見下ろしていた黒瀬は堀内の方に目を向けて注意をしようとした。

「堀内！落ちるとやばいから、いい加減にし……」

黒瀬が言い終わる前に、堀内の足元からいきなり人が現れて、堀内の頭を鷲掴みにしまるで猫を放りなげるように、やすやすと1階に放り投げた。

「う……わああああ……痛たたたた。クソツたれ！えっ？」

既に堀内の周りには感染体は波のように押し寄せて来ていた。

「離せ！クソツ！離しやがれ！」

ズドン・ズドンと堀内は自分に近づく感染体に対して滅茶苦茶にショットガンを乱射し始めた。数体の感染体は散弾に弾き飛ばされたが、四方八方から伸びてくる感染体の手・手・手。

あっという間に堀内は感染体に飲み込まれるように消えかかり、僅かにM870の銃身だけが突き出していた。

「いでええええええ……。はなげえ……。ぎゃあああつ！」

断末魔の叫びとともに、痙攣を起こした堀内の人差し指は引き金をひいてしまいM870に残された最後の散弾を発射してしまった。その弾丸は、堀内を心配するように2人で1階を覗き込んでいた青

島と志村の頭を一瞬のうち吹き飛ばした。

「何だ！こいつは！クソツ。離せ！離せ！な・なんて力なんだ。」

志村と青島の頭が吹き飛んだ時、階段で感染体が登ってくるの阻止していた岩永は突然凄まじい速さで登ってきた感染体に咄嗟に反応が出来ずに、組込まれる形になり、格闘技と言われるマウントポジションにいるゾンビに必死に抵抗していたが、あっという間に喉笛を噛み千切られていた。

岩永を襲った感染体。それは、雛形を祖とする感染体の1体であった。感染体は恐ろしいほどの速さで岩永の喰いちぎり、その肉を咀嚼し始めた。

その横を、ふらつきながら階段を登ってきた感染体が横切り、怖で立ちすくんでいた高柳と墨田に向かって、両手を突き出しながら迫っていた。

反対側に位置していた黒瀬は、咄嗟に逆方向に逃げ出したが数歩と走らないうちに何かにつまづくように転んでしまった。

恐る恐る、自分の足元を見た黒瀬は信じられない物を見たかのように大きく目を見開いていた。通路の横から手が伸びてきて黒瀬の足首を掴んでいるのである。

「何なんだ。2階だぞ。3メートルの高さなんだぞ。どうやってら手が届くんだよ。」

叫びながらも、掴まれていない方の足で必死に掴んでいる手を蹴り飛ばしていたが、掴んだ手は怯むことなく、逆に黒瀬の足をどんどん強く握りはじめた、ブッシュユキュという音がした途端に黒瀬の足が握りつぶされ血飛沫が散った。

「ぐわあああああああつ！」

握りつぶされた足を、信じられないという目で見ていた黒瀬は更に信じられないものを見ることになった。空中に感染体の顔がでてきたのである。

黒瀬には分からないが、正確には黒瀬のいる2階通路の底（1階から見た場合には天井）に、感染体は張り付いたようにくっついていたのである。

感染体が、2階通路に身体全体を現した時には、大量の出血と理解出来ないものを見たことによって黒瀬の神経は破滅していた。

「キャハハハハ！キャハハハハハ！」

痛みを感じることなく喰いちぎられる黒瀬は、ある意味、幸せ死を遂げたのかも知れない。

「来るな！来るな！」

感染体に詰め寄られて、通路の一番奥まで下がっていた高柳と墨田は壁を背に必死に足蹴りなどで抵抗していた。

「うわっわわわわわ！」

「や・止める。お前・何考えてんだよ。止めるよ！」

いきなり、墨田が高柳を感染体に向かって押し出し始めた。

高柳は必死に抵抗しているが、墨田は突き当たりの壁を槌子のようを利用して高柳を感染体の方に力いっぱい押していた。

「嘘だろ。ここまで生き延びて逃げのびたのに……」

この脅威の感染体は、その後にも偶然にも次なる獲物として小沢が率いる班を襲ったことで、全員が葬られることになったことは既に周知である。

第38話 拡散10 本部壊滅（後書き）

ご意見・ご感想 お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4536m/>

死者の徘徊する街

2011年1月8日18時03分発行